



特233

663

善山

光瑞

始



特233
663



第二次特別攻撃隊員

岩瀬大尉



詩

義伸

鈴木高松市長書



大藏

鈴木高松市長書



寫

真

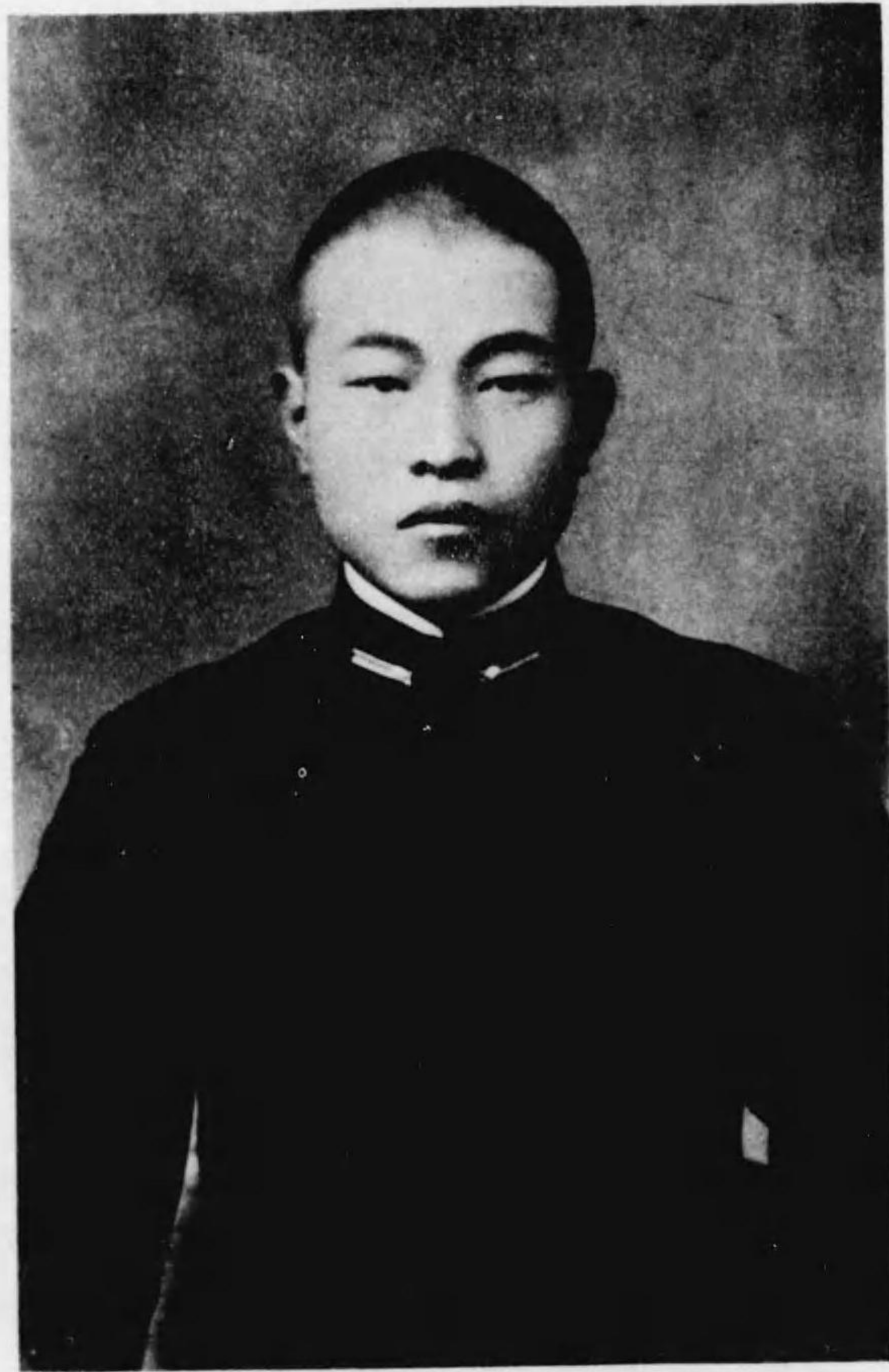
新

徽

海軍大將山本五十六閣下之揮毫

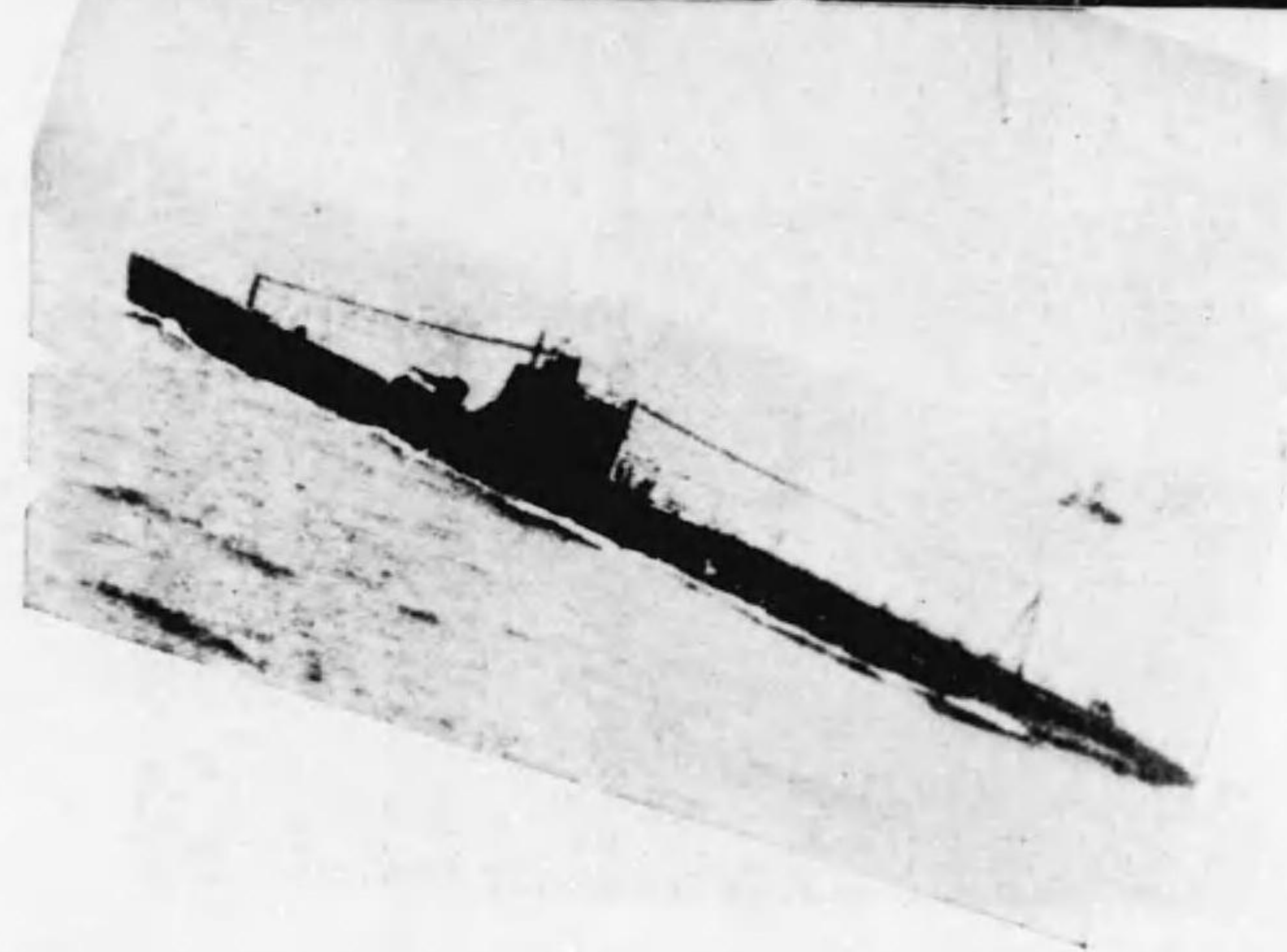
忠誠貫於金石
孝悌通於神明

昭和十八年十一月
山本五十六書



大尉肖像

江田海軍兵學校



我が潜水艦の偉容

遺品 (その一)



大尉謹書
の勅諭
(本文参照)

一軍人ノ忠節ト盡テ本外ト下ノ凡
生ヲ我國ニ守ルモノ誰カモ固ク根柢
固キモノノ用ニ止ラズ軍人ナラズ此心
軍人ナラズ根柢ノ心堅固ニシテ
及テ其心堅固ニシテ
存スル軍人ハ事ハ成ルニ至ルモノ也

千人其徳と
の杖杖と
又何共と
体等と其
旅二心
の者生
大ニ世界
以軍人
は

長く大事に使つた筆筒 (本文参照)



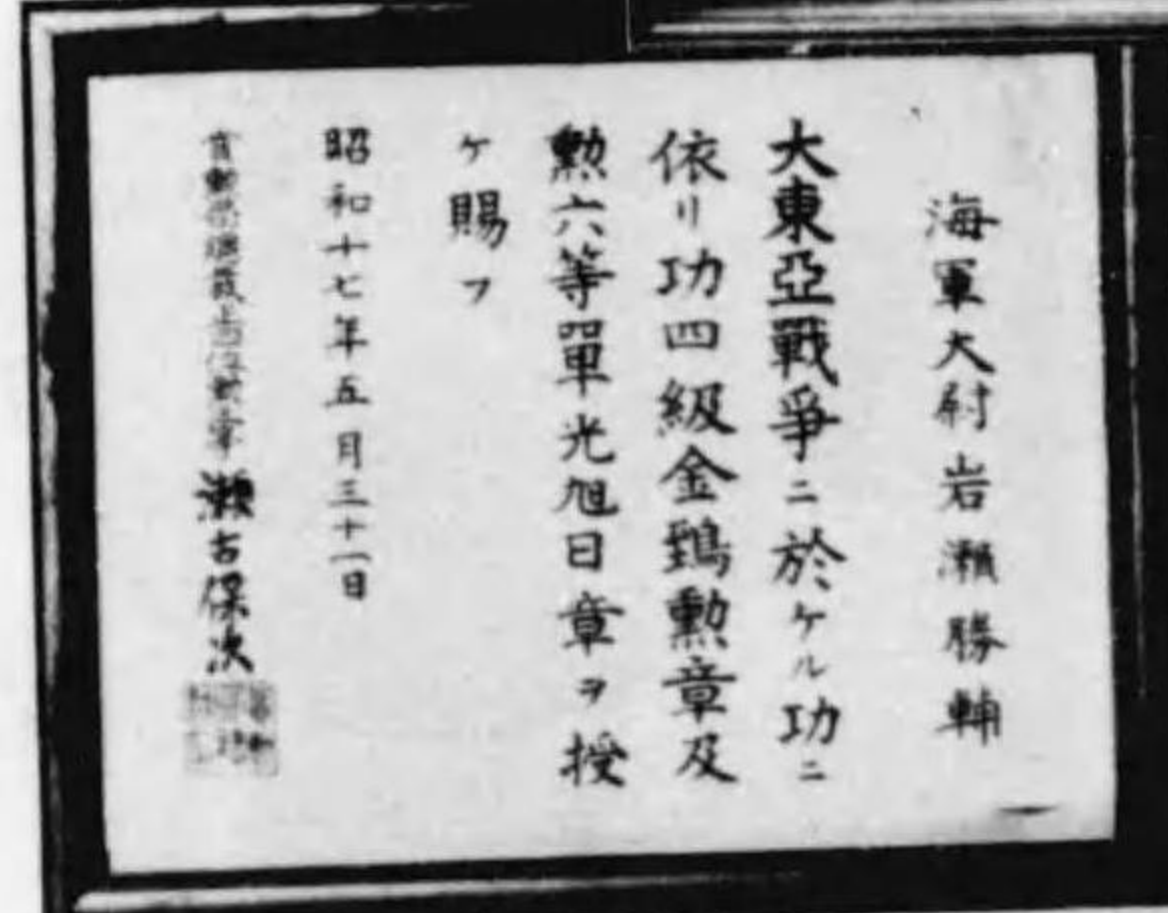
遺品 (その二)



海軍少尉岩瀬勝輔
任海軍大尉

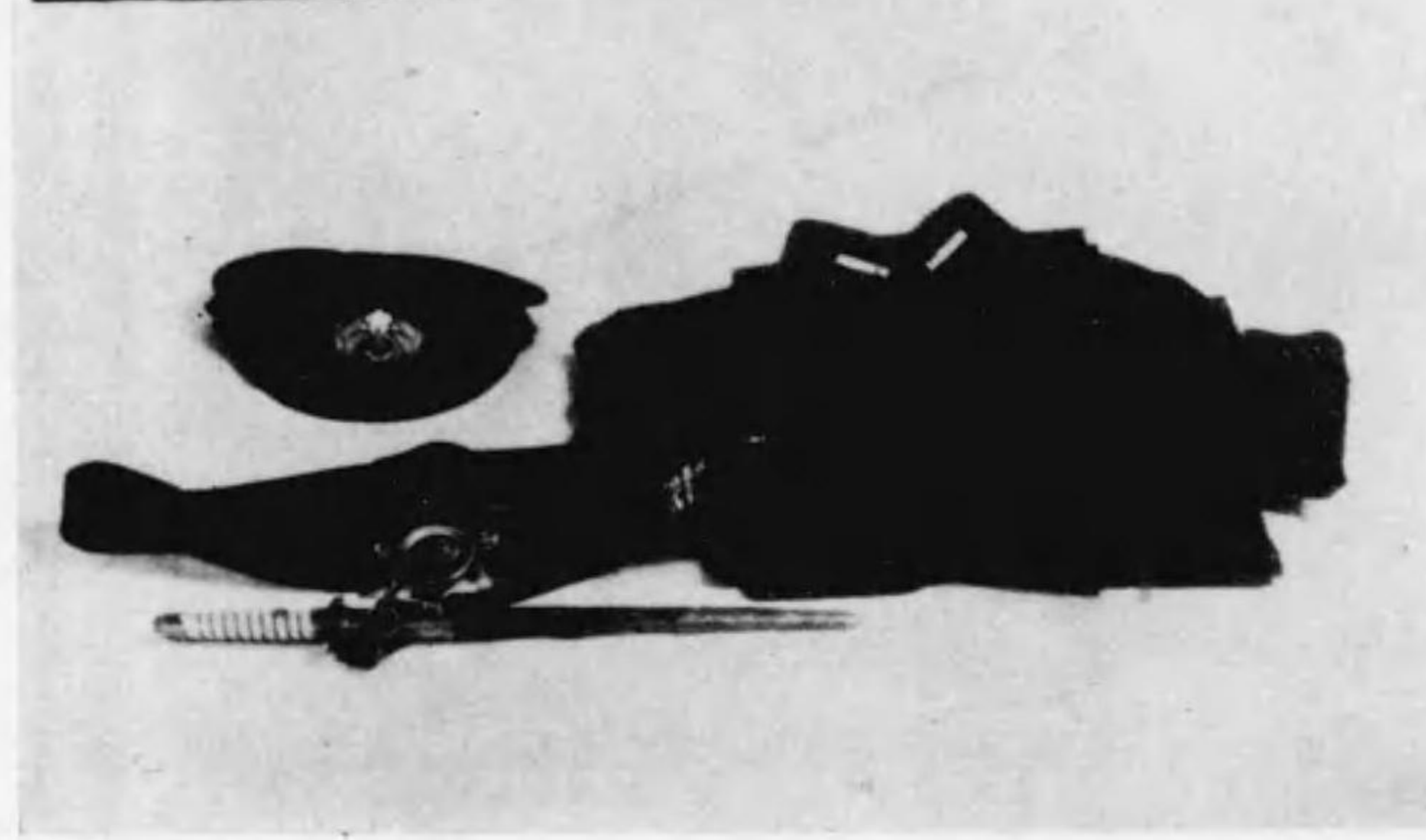
昭和十七年五月三十一日

内閣總理大臣陸軍大臣海軍大臣
内閣總理大臣陸軍大臣海軍大臣



海軍大尉岩瀬勝輔
大東亞戦争ニ於ケル功ニ
依リ功四級金鷄勲章及
勲六等單光旭日章ヲ授
ケ賜フ

昭和十七年五月三十一日
内閣總理大臣陸軍大臣海軍大臣
内閣總理大臣陸軍大臣海軍大臣



小學校時代



大尉の面影
六歳の時



中學校時代



少尉任官



壯途直前

嚴父準三氏



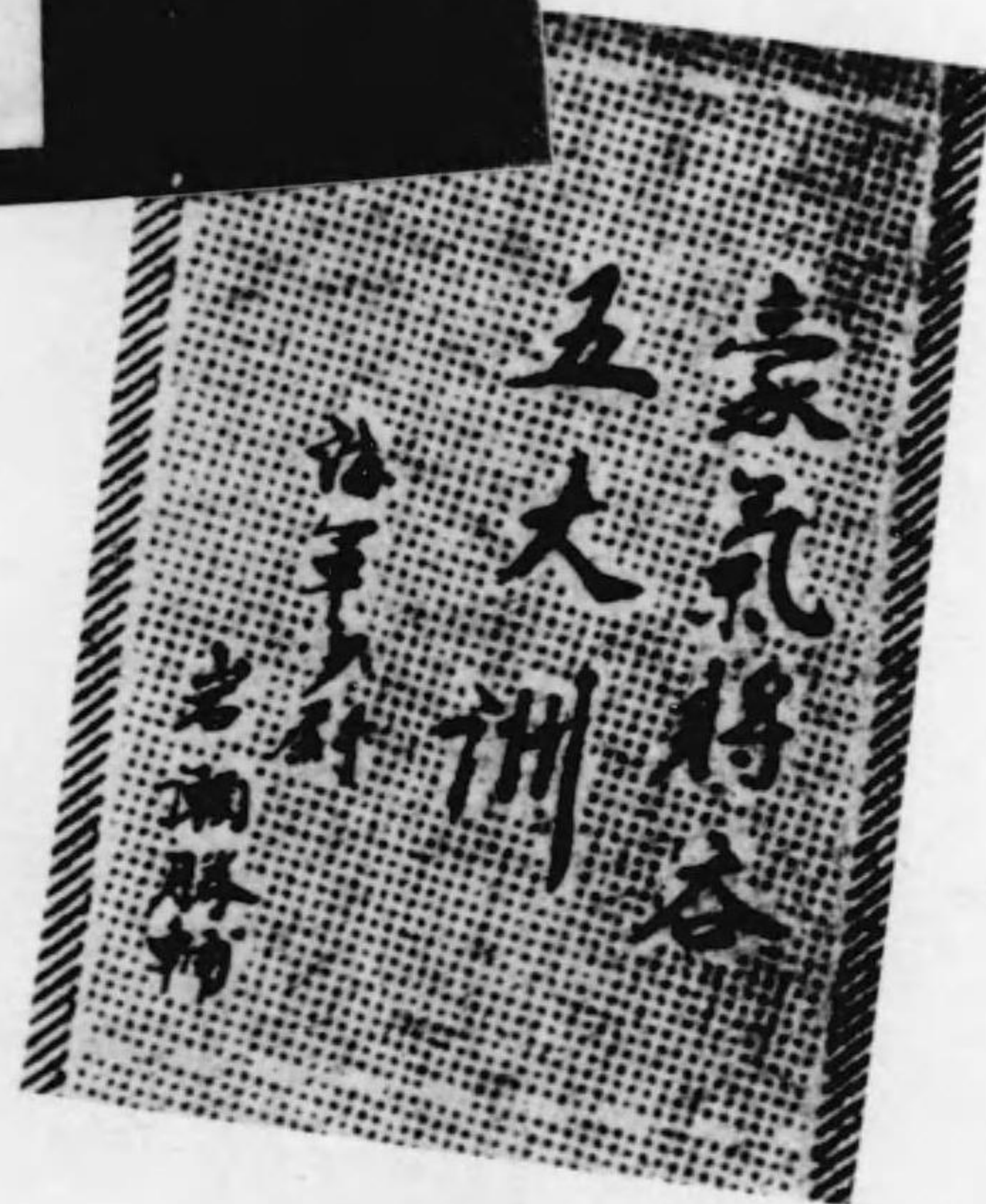
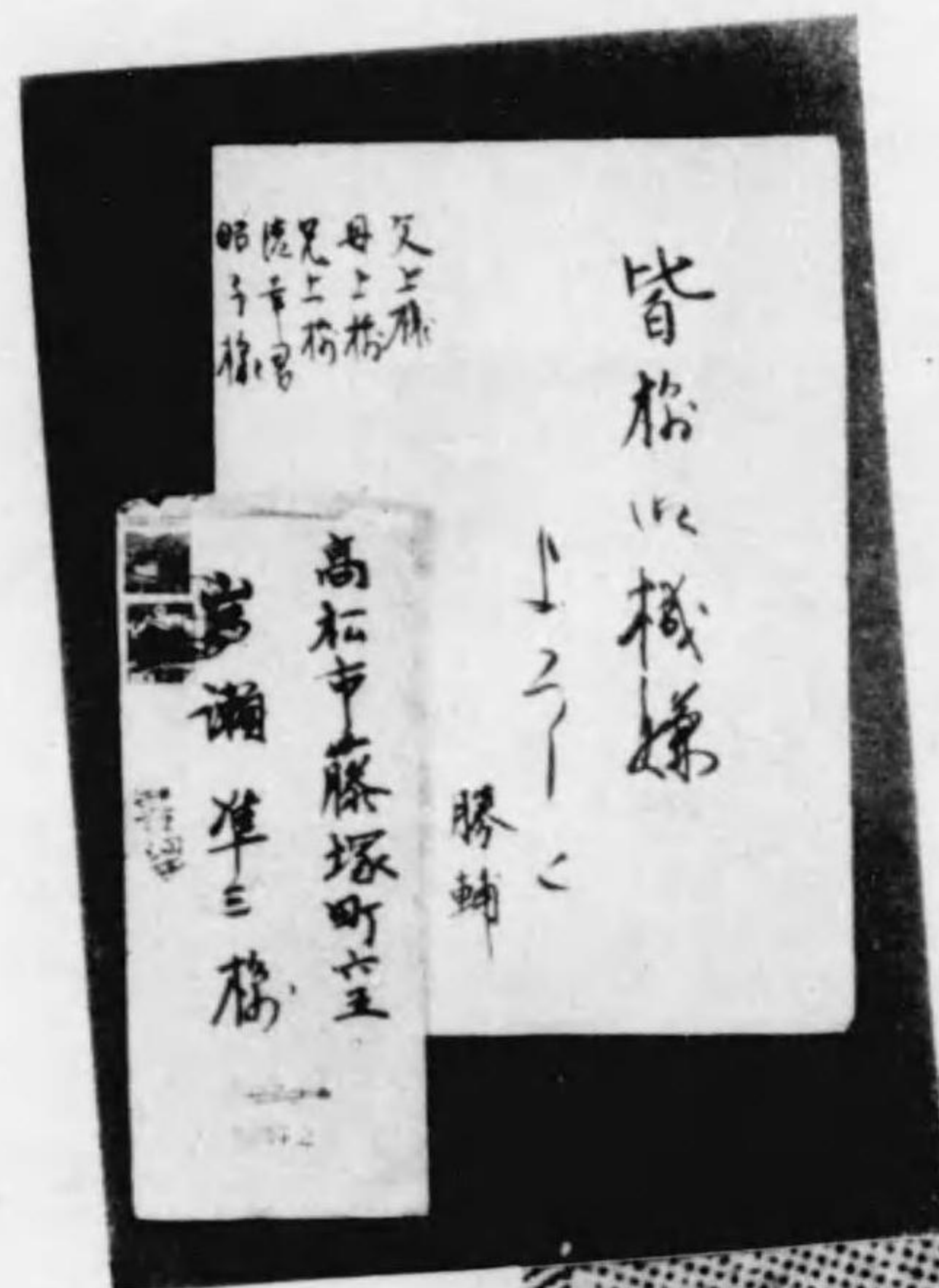
母堂はな殿



高松市長序文

(照參文本) 紙手の後最

大尉の絶筆



501-87

序

大日本は神國なり。

天照皇大神の御神勅を奉じて、現人神にまします 天津日嗣 天皇を中心として上に戴き、君臣の分は、明に古今を貫き無窮に易ることなき生命體として生成發展する、雄渾にして、壯嚴なる國柄であることを思ふならば、私共は、先づ、この萬邦無比にして、尊嚴極まりなき皇國に生を享け、宏大無邊なる大御稜威光被の下、私共の祖先が、代々踐み行ひ來つた所をそのまゝ承け繼いで、一切を捧げて奉皇の「まこと」を效すことの出来る、絶大なる光榮と感激を思はざるを得ないのであります。

回顧しますならば、徳川幕府の末、外國の事起るや、國論は分裂し、一大危機を招いたのでありますが、堅確なる國體信仰に徹せられた幾多の先輩が中心となつて、白刃をくゞり、生命を捧げて、尊皇攘夷の旗幟の下、國體護持、天皇防護を全うせられ、幸にして、夷敵のあくなき野望を撃推し得たのでありますが、扱て、明治維新以來、滔々として入り來つた西歐物質文明は、遂に、知識を世界に求めるに急にして、大に皇基を振起すべき根本を忘れ 明治天皇様の御思召にそむき奉るか如き様相を露呈し、眞に憂ふべき國情を醸成するに至り、幕末當時より更に大なる危局に直面するに至つたのであります。

明治四十四年 明治天皇様

教草しげりゆく世にたれしかも

あらぬ心の種をまきけむ

と御詠みになつた御製があります。誠に恐懼の極みであります。

於茲、日本は皇國內外の憂患爰除のため、昭和六年九月十八日、遂に起つて滿洲事變の勃發となり、鮮かなる戦果に、滿洲建國、國際聯盟脱退を伴つたのでありますが、續いて、帝國の眞意を解せざる蔣介石が、濫りに事を構へたこと因つて

昭和十二年七月七日、支那事變に擴大するの已むなきに至り、更に、平和の美名に匿れて東洋制覇の非望を逞しうせむとする米英の邪惡隱忍爲し難く、日本はその光榮ある生存の必要上、即ち、自存自衛の爲、一切の障礙を破碎するの外なく、驟然起つに至つたのが、昭和十六年十二月八日、感激極まる宣戰の大詔を載いて大東亞戰爭に發展したのであります。故に、之に因つて之を觀ますならば、日本は、眞に、己むに己まれぬ國體護持 天皇防護を本質とする聖戰を戦ひつゞけて居るのであります。而も、戰の様相は愈々苛烈凄愴、用ふるに詞なく、今や、全世界何れの部面も、正に實力と實力との對峙する本格的なる大戰爭に没入して居ることが、判然と感得せられるのであります。乍然、實に、神州は不滅であります。神意のまに／＼戰ふ聖戰に、勝利は必ず神州の上に来らずして、果して、いづれにありうるでありませうか。他の如何なる國よりも、より強き無限の力こそは、たゞ／＼萬邦無比なる國體の根基より湧き出づる力を持つ日本のみにあることを信ずる私共は、上に 皇祖皇宗の神靈を奉戴せられ、速に禍根を爰除せよと宣らせ給ふ 天津日嗣 天皇の御信倚に應へまつる爲、直に、征戰の目的を達成するに遺算なきを期して、その態勢を整へて行じなければなりません。征戰の目的を達成するに遺算なき爲には、國家の總力を擧げよと御示しを戴いて居り、而して、國家の總力を擧げる所以のものは、昭に、億兆一心と、御諭しになつて居られるのであります。

億兆一心とは、國民各々が、それ／＼の立場、それ／＼の利益、それ／＼の主義主張見解をそのまゝに、唯、相提携するが如き、中心が幾つもある自由主義的な平面的な團結でないことは申す迄もなく、中心は唯一つ、ひたすらに、一切をあげて至尊の大御心になつて、御奉皇申上げることにあることは明瞭であります。

中心は、宇宙唯一、至上、絶對の 現人神にまします 天津日嗣 天皇にあらせられる即ち尊皇、絶對、生命奉還の一つに結果すべきであります。戦場の皇軍將兵は、欣然、生命を奉還してこの大義に生きてゆく翼賛の最高奉仕を行じ全うせられ、皇民として最も所を得て、靖國の神となられ、傳世國家の生命力の源泉として、永久に神鎮まりますのであります。

茲に、眞にマダカスカル島アイエゴ、スワレス灣強襲の第二次海軍特別攻撃隊に参加し、烈々、熱火と燃ゆる純忠の至情

のまに／＼、奮戰敢闘、無敵皇軍の神髓を發揮、生命を奉還して世界を驚倒せしむる赫々たる武勳輝く十勇士の一人、海軍大尉岩瀬勝輔の命。

命は、當市出身の縁り深く、齡僅に二十二の若冠にして、純粹絶對の忠誠勇武なる、正に、大和魂の神髓を全身全靈につけて、これを餘す所なく發揚顯現せられたものであり、芳勳永く日本歴史に燦として輝く、報、一度傳はるや、十二萬市民は、心からなる感謝と、心からなる光榮に、齊しく鑽仰敬慕措く能はざるものがあるのであります。

素より、今次聖戰に、忠魂の身を以て示された所は申すまでもないのであります。特に、命の至誠一貫、以て 現人神に仕へまつる崇高なる軍人精神の神髓は、日本肇國以來、清麿公、楠公一族等々を経て、明治維新の志士に傳はり、更に、今日、この場合、忠魂と共に國體護持 天皇防護の崇高尊嚴なる臣民の本分を明にされたるものであり、直に以て、私共十二萬市民がその日常生活の實踐に移さなければならぬ所であります。

おほみこと戴きもちて、よくこれを奉行するを本分とすることを以て、眞の日本人であるといふ確固たる信念を腹の底に入れて、眞に日本人の正しさ、強さは、茲から出るものが眞物であり、物事の價値判断の基準は唯一つ、實に、茲にあるといふことを、はつきりと掴んで、これを筋金として、お互にこの重大なる皇戰を戦ひぬく、自覺ある「みたまわれ」として日常生活の上に、即ち私共、十二萬市民の皇戰の上に、具現實踐して行き度いと念願するものであります。この尊い記録を讀まれたならば、必ず、命の殘された偉大なる實踐の由つて以て來る根本を明に掴まれることと思ひます。

「世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」との教育勅語にお諭し戴いて居る有難い御恩召を思ひ、永く記録に止めて、關係方面に頒つ計畫を致しました趣旨も、全く茲にあるのであります。従つて、この顯彰は、米英的なる知識での理解のためでは決してなく、そんな風に終らせてはならぬのであります。命の身を以て行ぜられた眞の大政翼賛、臣道實踐をお手本として、十二萬市民日常生活の實踐、即ち、戰爭完遂を身を以て奉行するといふ事實の伴ふことが最も大切であるといふことを繰り返して置く次第であります。

靜に、考へれば考へる程、命の實踐の偉大さは、無窮に生成發展する傳世國家の生命力の源泉として、崇高鑽仰措く能はざる所、無限に盡くるなき感激を如何とも致し難いのであります。

終りに、この編纂に當りまして、格別の御高配と御盡力を戴きました御遺族始め、高松地方海軍人事部、外、關係各方面の方々に心から厚く御禮を申上げる次第であります。又編纂の任に當られました栗林國民學校教頭工藤義隆先生の格別の御苦心に對し衷心より敬意と感謝を捧げます。

皇紀二千六百四年

高松市長 鈴木義伸

第二次特別
攻撃隊員 岩瀬大尉

目次

表紙題字……………小磯内閣總理大臣揮毫
扉……………鈴木高松市長書

一 寫真

- 一 海軍大將山本五十六閣下揮毫
- 二 江田島海軍兵學校 わが潜水艦の偉容
- 三 大尉 肖像
- 四 遺品 (その一)
- 五 遺品 (その二)
- 六 御兩親
- 七 大尉の面影
- 八 大尉の絶筆
- 高松市長序文

一、勳功

不滅の武勳……………

(附) デイエゴ・スワレス灣奇襲の情況……………六
譽れ重なる若櫻……………七
寄せられし證言……………八

その一 軍艦〇〇〇加藤中佐
その二 軍艦〇〇〇艦長 原田覺少將
その三 海軍 〇 〇 參謀

二、略 歴……………一三

三、環 境……………一三

父 祖……………一五

遺 族……………一五

嚴 父……………一六

慈 母……………一八

苦難の中に育つ(その一—その三)……………二二

四、俊 傑……………二二

よ き 體 質……………二七

旃檀は二葉より香ばし……………二七

鋭 い 眼 つ き……………二八

優 秀 なる 頭 腦……………二九

五、自 制……………二九

幼時より自分の事は自分でする……………三三

極めて質素儉約、服装などには無關心……………三七

寡 黙 實 行 の 型(日記)……………三八

不斷の反省により厳しく自らを責む(日記)……………三九

六、氣 魄……………三九

熱 血 漢……………四〇

小柄なるも、攻撃精神に漲る……………四〇

すさまじき闘魂(日記のまゝ)……………四七

貫徹せずんば止まぬ、鐵の意志……………四九

負けじ魂を以て頑張りぬく……………五〇

“只今”を重んず(日記のまゝ)……………五二

明日への奮闘を期す!!計畫的なり(日記)……………五三

七、孝 悌……………五七

美 し き 兄 妹 愛……………五七

孝心深し……………五九
 (附) 優しき一面……………六〇
 ある一面……………六三

八、教養

親しまれし書(日記による)……………六七
 銀聖、宮本武蔵を學ぶ(日記による)……………六九
 見識(日記のまゝ)……………七三
 人を導く心構(日記のまゝ)……………七四

九、忠魂

至誠純忠眞剣なり……………八一
 海軍魂……………八二
 特に拔擢されて壯途に……………八三
 烈々、滿を持すの決意……………八四
 生死一如……………八六
 剛膽不敵……………八八

十、餘榮

大尉をしたふ學徒の聲(手紙その一——その六)……………九〇

しのばれる大尉(手紙その一——その十三)……………九七
 公葬……………一〇四

(附) 弔辭

山本聯合艦隊司令長官……………一〇四
 今和泉海軍大佐……………一〇五
 その二 遺骨郷里へ……………一〇六
 その三 村葬……………一〇九

(附) 弔辭

桑島山田村長……………一〇九
 嶋田海軍大臣……………一一〇
 小菅香川縣知事……………一一一
 鈴木高松市長……………一一二
 宇佐見池田中學校長……………一一三

胸像成る……………一一三

一 跋……………一一五

表紙繪……………香川寫眞館主光瑞氏筆

一、

總務部

中野貞哉 庶務課長

山本高壽 庶務課長

小宮善四郎 庶務課長

藤田新太郎 庶務課長

森島山田 庶務課長

(株) 香川

香川

香川

香川

香川

香川

香川

香川

香川

香川實業株式會社

香川

一、勳功

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

香川實業株式會社

不滅の武勳

(附) デイエゴ・スワレス灣奇襲の情況

譽れ重なる若櫻

寄せられし證言

その一 軍艦〇〇〇加藤中佐

その二 軍艦〇〇〇艦長原田覺少將

その三 海軍 〇〇 參謀

不滅の武勳

海軍省公表(三月二十七日十時)昭和十七年五月三十一日、特殊潜航艇を以てデイエゴ・スワレス灣及シドニー港に突入し偉功を奏したる第二次特別攻撃隊に對し、聯合艦隊司令長官より左の通り感狀を授與せられ、右の旨、上聞に達せられたり。

感 狀

第二次特別攻撃隊

昭和十七年五月三十一日敵英國艦隊をデイエゴ・スワレス灣及シドニー港に奇襲し、多大の戦果を挙げ、帝國海軍軍人の忠烈を克く中外に宣揚し、全軍の士氣を振作したるは其の武勳拔群なりと認む。仍て、茲に、感狀を授與す。

昭和十七年十二月八日

聯合艦隊司令長官 山本 五十六

この武勳が長くも 天聽に達し、特旨を以て二階級を進められるを拜す。この水漬く屍とちり果てた殊勳は、眞に世界戦史に特筆せらるべきである。これこそ、天地至大の氣の發露であり、日本精神の權化、我が國武人の總鑑として、必ずや死して忠義の鬼となり、極天皇基を護るべきことは昭々乎たる事實といはねばならぬ。

感激した小菅香川縣知事も「我が讃岐の誇り。」として、
「岩瀬大尉の最期こそ、全く武人の本懐であり、その芳名は千載に輝きわたり、國民を感奮興起せしむるものがあります。」と語らる。

長驅七千裡、渺たる特殊潜航艇に搭乗して南海の波を潜り、必中の魚雷を敵艦に命中せしめた後、あの東阿の海に莞爾として散つて行つたこの不滅の勳。

高松海軍人事部井上海軍少佐の

「全然私心といふものがない。まるで君國の爲に命を捧げる可く、生まれて来た様な人である。郷土の誇りこれに過ぎるものはないであらう。本人もさぞ満足して死んで行つたであらう。何れにせよ僅か三年の海軍兵學校の生活で海軍傳統の神髓を掴み得た大尉には、たゞく感激の他ありません。」

同日三月二十七日十時、海軍省公表の中、岩瀬大尉に關係深き記事をこゝに抜書きしてみる。

昭和十七年五月三十一日、約七千哩（一万六百軒）を隔つ、マダガスカル島デイエゴ・スワレス灣の英國艦隊を奇襲せり。西印度洋に於ける英國艦隊の根據地として利用せられたるこの灣には、英戰艦クイン・エリザベス型、同輕巡アレクササ型各一隻、その他碇泊しあるを確認せり。

折柄、デイエゴ・スワレス灣は、スコールの去來頻繁にして白波ありしも、十五夜の満月は時折雲間より海上に明かるく照射しあり。第二次特別攻撃隊は、御稜威の下、成功を確信して枚を衞み壯途に就けり。

同日二時廿分頃、特殊潜航艇發信と認めらるゝ電波を受し、二時二十八分ごろ、さらに灣内上空に、火焰の映するを遠く港外より確認せられたり。しかしてその後灣内には敵戰艦及輕巡を認め得ざる狀況、並に、英海軍省の公表を以て、特殊潜航艇の襲撃を認め、これによる損害は、利敵の恐れあるを以て發表するを得ずと報じある等の事實より判断して、これ亦多大の戦果を挙げ得たるものと判断せらる。デイエゴ・スワレス灣を奇襲せる艇乗員は、亦、艇と運命を共にせるか、或は、其の一部は、上陸後敵軍に斬込み、肉弾以て敵兵を斃し、壯烈なる戦死を遂げたるものと認めらる。右に關し外國ラジオは、六月一日午前二名の日本海軍軍人は、デイエゴ・スワレス附近に現はれ、守備兵と果敢なる戦闘を交へた後、壯烈なる戦死を遂げた旨放送せり。

第一次特別攻撃隊の後を受けて、艇の用法、整備に一層の研究、演練を重ね、歸還の方途また算あり。全般にわたりて、

一段の進歩を認められたるにより、こゝに第二次作戦實施の運びとなりたるも、遂に、戦死者を免れ得ざりしは、攻撃效果發揚のみを念頭に置きし結果と推察し得べく、帝國海軍軍人の忠勇義烈を克く中外に宣揚したるものにして、その功績不滅と云ふべし。

この壯舉こそは、われく國民にはあらゆる形容の辭を超えた純一な感動を與へ、敵陣營を底知れない戦慄と恐怖の坩堝に投げ込んだものであつたが、岩瀬勝輔海軍大尉（二十二歳）は、海軍中佐秋枝三郎（二十七歳）、海軍特務少尉竹本正己（三十歳）、海軍兵曹長高田高三（二十六歳）と共に、遠くデイエゴ・スワレス灣に散華したので、遠く佐久間艇長から脈々と流れる帝國潜水艦魂の傳統を承け繼ぎ、また報國の至誠の發するところ忠節を盡して、軍人の本分を全うする一念のほか何ものもなかつたのである。哨戒線を突破して敵艦のひそむ山懷のデイエゴ・スワレス灣に突入、目ざす敵艦の攻撃を行ひ、これを屠つて多大の戦果を収めた後、艇と運命を共にする、その一部の如きは敵地に上陸して敵守備隊兵の中に斬りこみ、戦死せるものなど、まことに懦夫をもふるひたしめ鬼神をも哭かしむる壯烈なる盡忠の烈士を出したものである。

享年三十歳の竹本特務少尉を最年長者として、享年二十二歳の岩瀬勝輔海軍大尉を最年少者とする若武者であつた。

しかも、偉大なる傳統に育まれ、忠魂に徹するところ、すでに死生を超えた至高至醇の境地に到達してゐたのである。第二次特別攻撃隊に、またまた我が國民性の力強い開花を見る。われくは、それと同時に、この旺盛なる攻撃精神を心の奥から學び取り、純忠の英靈に何を酬い、何を誓ふべきかに、深く思ひを致さねばならぬ。

美山不重天恩重
集ふ軽家命輕

保林光旭軍大尉揮毫 昭和十七年五月廿七日

服部軍醫少將揮毫

有恩美米德神威... 船隻... 敵艦... 先づクキン・エリザベス目... 戦艦クキン・エリザベスだ... 先づクキン・エリザベス目... 戦艦クキン・エリザベスだ... 先づクキン・エリザベス目... 戦艦クキン・エリザベスだ...

(附) デイエゴ・スワレス灣奇襲の情況

昭和十七年五月三十一日、我が特殊潜航艇の精銳は、デイエゴ・スワレスの港口附近にさしかゝる。附近の陸地にはフランス人の部落が點々と眠りに陥ちてゐる。港口に入る約三哩、右手に港内燈臺の眠さうな點滅があるが、わが特殊潜航艇は獲物を求めて奥へ奥へと進んで行く。月光を浴びておぼろに浮ぶ、シルエツトはマストか砲塔か。それこそ、まぎれもない戦艦クキン・エリザベスだ。わが勇士の腕は高鳴るばかり。攻撃の時は迫つた。魚雷の點検を終る。時に午前二時三十分。先づクキン・エリザベス目にかけて魚雷を見舞つた。忽ち震動と轟音。クキン・エリザベスよ。今こそ我が素敵必殺の海軍魂を思ひ知つたか。飛行機は吊光弾を落して港内をバツと明るくした。光の下は轟音と激動のるつぽである。かくて印度洋を越えたマダカスカル島の要港に凱歌が揚つたのである。

譽れ重なる若櫻

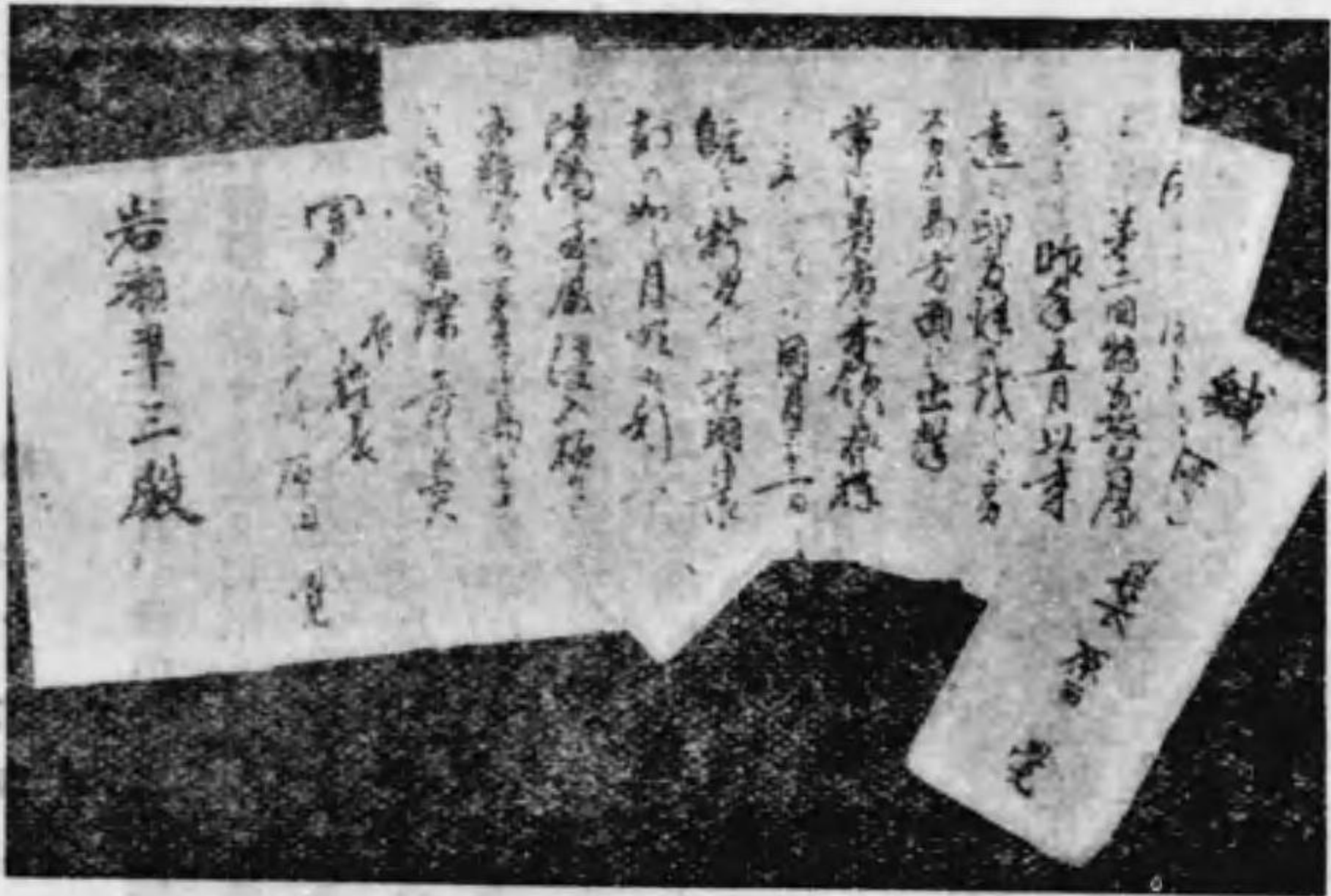
感泣する大尉の母堂は。さきに二階級進級の名譽を擔ひ、此の度は殊勳甲として優賞の恩賞に浴し、更に功四級金鷄章勳六等單光旭日章を下賜されたので謹んで語る。

「勝輔と同じ特別攻撃に参加して戦死なさいました高田高三兵曹長の御遺族を福井縣に訪問し、その歸途、勝輔が少年時代を通學した膳所中學などをお訪ねし、更に、在學當時の兵學校長で、現在舞鶴海軍鎮守府司令長官新見閣下にお禮を申上げて歸つたばかりです。皆さん、大變喜んで下さいました。歸ると、この五月廿七日といふ意義深い記念日に、又、この破格の恩賞とは、たゞく母として感泣いたすばかりでございます。口數の少い子供でしたが、人一倍の感激を胸に燃やしてゐたあの子のことです。草葉の蔭でこの光榮にどんなに感激してゐることとせう。佛前に早速報告いたしませう。」と。

寄せられた証言

軍艦〇〇艦長

原田海軍少將からの手紙



その一 軍艦〇〇〇 加藤中佐
あゝ鬼なるか、神なるか。
ひたぶりに國思ひ、日夜精進、熱血至誠努力鬼神も泣く。只、感激。
赤き心を神や護らむ。
祈御成功。

昭和十七年四月十三日

加藤 中 佐

岩 瀬 少 尉 殿

その二 軍艦〇〇〇艦長 原田豊海軍少將

謹啓 時下酷暑の候、貴下益々御壯健の段、奉賀候。陳者、御令息勝輔殿
開戦以來、特殊潜航艇乗員として精勵せられ、斯術の大家を以て許さるゝ
迄に相成り、自らも大に確信し居られ候處、此の度選ばれて、第二回特別
攻撃隊員となり、昨年五月以來、遠く印度洋を越えて「マダガスカル」島
方面に出撃し、常に勇者の本領を發揮し居られ候ひしが、同月三十一日、
既に新聞にて詳細御承知の如く、月明を利用して防備至嚴、侵入極めて至難
なる「マダガスカル」島「デイエゴ・スワレス」港の奥深く奇襲突入し、
極めて困難なる状況の下に、勇戦力闘、沈着果敢、能く敵の有力なる二艦

撃破したるも、熾烈なる敵防禦砲火に依り、遂に、壯烈なる戦死を遂げられ候。是邦家の爲、寔に痛恨措く能はざる所に
有之候。

斯る未曾有の大聖戦下、右の如く全世界を驚かしめたる抜群の武勳を樹て、特筆大書さるべき大功績を残して、壯烈無比
なる戦死を遂げられたるは、寔に武人の本懐光榮是に過ぐるは無かるべく、武神として全國民の敬仰の的に可相成候。
固より兒を喪ふの苦は、親に別るゝの態に勝ると申候に依りても、御家族の衷情は拜察に餘り有り候得共、情況右の如く
に御座候間、翼くば、御家族御一同、徒らに悲しむことなく、故人の殉忠報國の赤誠を汲み、其の偉靈を安からしめられ
んことを切に願上候。

先は乍略儀、御哀悼の微意を表し度、如斯御座候。 敬具

昭和十八年一月十日

軍艦〇〇〇艦長

海軍少將 原 田 覺

岩 瀬 準 三 殿

〇〇参謀追悼歌

故岩瀬特別攻撃隊員之靈に捧ぐ

準備なり、帽子打ち振り離れ行く、

つはもの心す美わたり見ゆ

敵求む、勇士如何ばかり喜ばむ、

この攻撃の命を受けなば、

勇美立ち、征きし勇士の面影を、

月に寫して我は忘れじ。

〇〇の海にいそしみわさねりし、

つはものどもは神となりぬる。

〇〇参謀

その三〇〇参謀

故岩瀬特別攻撃隊員之靈に捧ぐ

準備なり、帽子打ち振り離れ行く、

つはもの心す美わたり見ゆ。

敵求む、勇士如何ばかり喜ばむ、

この攻撃の命を受けなば、

勇美立ち、征きし勇士の面影を、

月に寫して我は忘れじ。

〇〇の、海にいそしみわさねりし、

つはものどもは神となりぬる。

二、略 歴

略 歴

大正十年八月四日

實父 準三(三十一歳) 次男として、松山市西堀端町に生まる。
實母 はな(二十四歳)

郷里は香川県綾歌郡山田村山田上三九

丸龜城北小學校入學

明石市人丸小學校へ轉校(尋五)

大津市南小學校へ轉校(尋六)

同校卒業

滋賀縣立膳所中學校入學

徳島縣立池田中學校へ轉校(三年)

海軍兵學校(江田島)入學

同校卒業 北上乗組

鳳翔乗組

少尉任官

マダカスカル島デイエゴ・スワレス灣にて戦死、同日 大尉任官

殊勳甲として優賞せられ

金鷄勳章功四級勳六等旭日章を賜はる

昭和三年四月
同 七年 四月
同 八年 七月
同 九年 三月
同 九年 四月
同 十一年 四月
同 十三年 四月
同 十六年 三月
同 十六年 四月
同 十六年 十一月
同 十七年 五月 三十一日
同 十八年 五月 二十七日

三、環 境

父 祖
 遺 族
 嚴 父
 慈 母

苦難の中に育つ（その一—その三）

父 祖

白峯の連峯を眞北に仰ぐ、綾歌郡山田村綾川の流れ淨き平和境!! 長くも大正天皇御大典の御砌、主基齋田に選ばれた同村大字山田こそ、大尉の嚴父の生まれた土地で、二男として生まれた大尉が幼時墓参にも度々かへつた懐かしいふる里である。しかも主基齋田となつた淨地は、大尉の父準三氏の伯父に當る岩瀬辰三郎氏の所有地である。かゝる環境において人となつた父祖の脈々たる血液をうけついで育まれていつたのが大尉である。嚴父は郷里を出て、三十幾年、故郷との馴染はさう深い方とはいへないが、何分、先祖代々の墳墓の地であり、大尉も幼い折、何度も墓参の爲歸郷してゐる。其の心のふる里に最後に歸つたのは、昭和十五年のお盆の時であつた。桑島幸七山田村長は

「あの凛々しい軍服姿が今も眼に浮かぶやうです。盡忠一路、若櫻の様に散つた大尉の忠魂をこの山里に迎へ、心こもる村葬の禮を以てお慰めしようと思つて存じます。」と。村の誇りとされてゐる。

遺 族

大尉の實父準三氏(五十三歳)は、高松税務署間税課長として精勵し、實母、はな女(四十六歳)と共に、高松市藤塚町六五に居住されてゐる。兄の勝氏(二十五歳)は、久留米豫科士官學校卒業後〇〇方面に活躍中。弟の清幸氏(十九歳)は、高松中學を卒業して、徳島高等工業に在學中。妹の昭子さん(十七歳)は、高松高女四年生に在學中である。

大尉の忠魂は、二階の四疊半の佛間に祀られてゐる。長くも靈前には 天皇 皇后兩陛下の祭料が供へられ、軍帽軍刀等が飾られてゐる。毎日の如く禮拜者あり、去る日即ち、昭和十八年五月八日には、佐世保鎮守府司令長官南雲忠一中將の弔問もあつた。

壁面に掲げられた額内の

任 海 軍 大 尉

海軍少尉 岩 瀬 勝 輔

昭和十七年五月三十一日

内閣總理大臣從三位勳一等功二級 東 條 英 機 宣

この輝やく二階級進級の證も目をひく。各方面遠近を問はず、一面識なき人々など來訪者絶えず、この四疊半の佛間は稍々せまき感あり。而も、母堂は、

「これでも、艦内生活のことを思ふと廣い位でせう。殊に勝ちやんはあの小さい特殊潜航艇に乗つてゐたことを思ふと、これで充分がまん出来ます。」と。

しかし、時には、家屋の狭きを口にされ、何處かへ轉宅しようかなど洩らすこともないではない。すると、隣組の人々が承知しない。隣組の人々も大變人情の美しい方ばかりで、この度の鬼神も哭く壯舉に、すつかり我が事に感激され、若し岩瀬家を訪ねて來る人があると、

「あゝ、あの岩瀬さんですか。そりや私の隣組の方です。さあどうぞ……………」
といふ具合に、鼻高々で肩身を廣くされるといふことである。日本臣民としてはさもあるべきことと思ふが、誠に涙ぐましいうるはしい情景である。

嚴 父

男手では迎も出来ない、おむつの洗濯を忙がしい暇々にして、子供の面倒を見たといふ。殊に、岩瀬大尉の時は、母堂の

産褥熱で、他の兄妹達の時よりも世話がかゝり、乳の世話までした。一事が萬事で、子供への養育は實に行届いてゐた。嚴父は、いつも、大尉に

「學校で習ふことは必ず學校で覚えてしまへ。教室で習ふことは教室で片付けてしまへ。」

と。之は大尉自身その通りやりぬかれたが、さすがの大尉も

「二年の時には三年の勉強をしておけ。」

三年の時には四年のをすまして行け。」

と、これには一寸閉口したといつたといふ。

この嚴しい言葉は、たしかに、大尉をかまくまでにしたまきあげたのである。家にかへると専ら研究を廣め、大して復習もしないですんだといふ大尉は、たゞ頭のよさのみではなかつたのであらう。

教室内のきら／＼光る眼も、嚴父により一層輝かされたものであらう。

「私など、教育方針としては何もありません。極めて平凡な家庭です。あの働きは全く海軍兵學校のおかげです。」

とは、いつも、新聞記者などに聞かれるまゝに答へられる自己を空しうされた謙虛な言葉である。多くを語らないで實行してゆく父のゆき方が、そのまゝ、大尉の爲人となつたものであらう。色々お話をしあふ間に、私が新聞記事は時々餘り理想化するといふ話を聞くことがあります。「大尉に關しては如何ですか。」とお尋ねしますと、

「新聞記事は、色々な關係からか、むしろ書き足りない感さへします。思ふ所まで書けない理由もありません。文章では迎も表はし切れない點もあると思ひます。ですから、新聞では決して勝輔のことを飾つたとか、誇大に書いた點はないと存じます……………」

と申されたが、之は子を思ふ親の眞情として自然の言葉と思ふ。

慈母

子供に對しては絶対に「嘘」をいはいさうである。品物でも買へないものは決して買つてやるとは云はない。必ず店に行つて見て来る。だから、何か買つてもらひたいといふ時、子供は二度とは要求しなかつたといふ。

何事も先生のおかけ、教育のおかけ、殊に兵學校のおかけだと喜ぶ母堂である。それで頻りに兵學校へ行かせよと、萬人にすゝめる。妊娠婦を見ると、「生まれる子供は兵學校にやりなさい」といふ。

「男子か女子か分らないし、どうせ受けさしても……………」

といへば、やゝ相好をくづされながら

「そんなことではいけない。どうでも受からすといふ意氣込でなければ……………」

私も男子が一人あると問はれるまゝに答へると、また幾度か「ぜひ、ぜひ。」とくりかへされた。私も兵學校が育くんで行つた大尉の人間完成にたゞ／＼頭の下がる想ひであつた。母堂は私にしみんと

「勝ちゃんがこんなに立派な人間になつたのはわたしの力ちやあないんです。海軍兵學校のお蔭なのです。何が何でも、私は近い中に兵學校へお禮に行かうと思ひます。」

と。また嚴父の轉動慌しい中にも、我が子の手紙ばかりは母堂の手によつて整理され持ち歩かれた。大尉の手紙は何度も讀んで、しまつて置く。眠れぬ夜も亦讀みかへす。かくて引越荷物の何よりも大切にした手紙は、四百通近く……………。是らの全部が完全な形のまゝで、海軍魂の記念碑の様に岩瀬家に大切に寶物として保存されてゐる。

母堂の負けじ魂は、溫暖な瀬戸内海の風土の中で美しくも逞しい海軍魂を育んで行つたものゝやうである。

子供の教育には極めて注意深く、朝早くから子供を學校に送り、又、度々參觀にも出かけた。子供にも生半可なことは絶対に云はず、又、行はなかつた。

子を大切にすることは、

「止むを得ぬ以外は、絶対に枕もとを通つた事がない。母の枕もとを通るな」の意味が今になつてよくわかる。」

との大尉の訣別の日の感慨として切り出された言葉でも明かである。家を護る針仕事の合間々々に、偉人の母達の傳記に目を通し、得る所があつた場合は、必ずこれを實行し、子供の躰にとり入れる。母堂の教育法は、轉動してゆく先々で、すぐ人々の話題に上つたといふ。

母堂は特別攻撃隊の發表を聞き、畏くも、天聽に達した趣を謹んでラジオで拜聴した時、涙一滴こぼさなかつた。——しかし、獨りになつて、夜寢床に入つてから、こみ上げて来る感激のために、涙が止めどもなく流れて来る時がある。是も、

「聖恩の忝けなさと、こゝまで子供を育て上げて下さつた海軍兵學校への感謝で一杯になつたためです。」

と私に話して下さつた。でも、何回も方々の家々のラジオに我が子のことが繰返され放送されるのをきく家人の感懐は、又格別であつた様である。いつもさうだが、佐世保鎮守府司令長官南雲中將が

「御令息の偉勳には、どう御禮を申しても云ひ盡せない。この偉勳を汚さないやうに、あと／＼の御子も立派に育てられるやうに。」と、又、

同行されてゐた、鈴木高松市長さんにも、同中將は

「讃岐に、また市内に、第二、第三の岩瀬を出して下さい……………」

と申されるし、町寧に座布團もしらずに神靈に額づかれた中將には、流石に母堂は感銘深く、

「お招きしても、來ては下さらぬ方だのに。」

と、同中將が歸られた後で、靈前に合掌する母堂は、

「勝ちゃん嬉しいな。今日も、こんな方がお見えになつて下さつた……………」

と云へば「自然に涙が流れて仕方がないのです。」と。

「ラジオで、十勇士の一人に入つてゐたことをきいて胸がすうつとしたが、其の後、日が経つと共に「勝ちやんの偉かつた」ことが感じられる様に思ひます。」

「勝ちやんも幸せ者です。それだけ私も幸福です。毎日、勝ちやんに「ありがたう有難う」と、お禮を云つて暮してゐます。」

「二十二年間、無傷で、上御一人からお預りした勝輔を、そのまま無傷で陛下にお返し出来ました。本當に幸に存じます。」

「この母にしてこの子あり」で、母堂の慈愛と眞心は、恰も春雨の大地にしみ込み、草木を育くむやうに、嚴父の力と相俟つて、この忠魂勝輔大尉を教へ育てゝいつたものであらう。

尙、吳海軍の合同葬に、嚴父と母堂がゆかれた時、第六十九期の（大尉の同期生）歡待を受けたことは、お二人共實に喜ばれてゐた。而して語られる。

「兵學校の教育の力か、凡べての方が、生き神さまに見えました。」

「お父さんお目出度う。お母さんお目出度う。僕らの同期生としてよくやつて下さつたよ。今度は、僕が白木の箱で歸つてくるから、其の時は、お父さんやお母さんはお迎へ下さいね」と、極めて自然に申される。かくて夕方の六時頃から九時半頃まで、お父さんお母さんと、心から歡待して下さり、少しも歸りたくなかつた。胸の中が「サイダー十本位一べんにのんだほどすうつとしました。」全く「海軍の小説」にもある通り、同期生は本人だけではなく、本當にその家人とも親族とまでも、深い親交をするやうです。暫らくゐるうちに、「同期生の方がみんな自分の子のやうに」思はれて來ました……。」と。

その中に鎮守府の司令長官もお見えになりましたが、

「おめでたう。お目出度う。よくやつて下さつた。」

と申されるので、吳にゐる間、少しも淋しいとか、悲しい氣持などはしなかつたと申された。

兵學校の教育!!「君國のためには平氣で死んでゆく」。それが海軍魂として徹底してゐる。

しかも、お二人が隣りの部屋の八釜しいののぞいてみる——多分マージャン位をやつてゐるのかなあ——と。すると豈圖らんや、軍艦のおもちやをもつて、戦友達が

「俺はこゝをやる。俺はこちらからだ。いや俺はこゝをやつて轟沈さすのだ。」

と、お互ひにわいわいはしやぎながら、かうした遊戯の中にも海軍實戰の研究をやつてゐるのである。お二人共、實に驚嘆したとのことである。

「本當に海軍兵學校は、心身をみがいて軍神をつくり出す學校です。神様を次々とこしらへてゆく學校です。これでこそ我が帝國海軍は全世界に無敵なのでせうね。」

と嚴父と共に、深い感銘で述懐されてゐた。

私もこの兵學校のお話を承はつてゐる間に、兵學校教育の心強さと、有難さがしみんと感ぜられて、機會さへあればこの兵學校に是非しばらくでも滞在させていたゞき、私が心を洗つていたゞきたい心持で一杯になつた。いや、一億同胞老若男女すべてが、この兵學校精神に清められたならば、現在の國力は幾層倍せられ、聖業完遂の巨歩を踏み出されるものと思はれた。

苦難の中に育つ

(その一)

出産は輕かつたが、間もなく母堂が産褥熱におそはれ、四十度以上の發熱が十日間も續きしたため、母は、全く意識不明に陥る。所は、松山市で異郷。兄勝氏は二つ上の三歳である。

家に年寄りもなく、雇人は早くかへつてしまひ、そのあと代りの人がない。旅のつらさである。不自由その極に至る。

兄にも手をとられる。勝輔大尉は泣く。母堂は産褥熱に悩む。嚴父は全く困惑した。母堂は産褥熱のため乳があがつてしまひ、止むを得ず「粉ミルク」を嚴父の手でつくる。しかし、その作り方が全く要領を得ず、ぐたぐたと煮つめすぎたり、煮たらなかつたりして祕結する、下痢する。嚴父は手づから、どの子供のでもよく、おむつを洗濯したが、殊に、勝輔大尉のおむつ、洗ひは、頻繁で、母堂が見かねて大變恐れ入ると、

「子供のものでから何んでもないよ。」

と、ごし／＼と石鹼洗ひをする。かくして勝輔大尉は、生まれて間もなく、大きい苦難の中にさらされたのである。即ち、最も大切な母に手離され、相當長い間、父のみに育てられたのである。

(その二)

翌年、即ち、二歳の時である。麻疹の潜伏せるを知らずして種痘をしたものである。嬰兒であり、麻疹になつてゐる上に、種痘をした事が悪いばかりでなく、種痘それ自身も餘りよくなかつたとかで、種痘の後が大變に痛み、相當にふくれ上り、そのためか、高い發熱がつゞいたのである。之に加ふるに百日咳にかゝり、全く踏んだり、蹴つたりといふあり様である。よわり目にたゞり目といふか、體力が衰へた時に、百日咳もはげしくなり、吸ふ息はく息に頻りに咳をし、その苦痛はよそ目も痛ましい程であつた。併し、當時嚴父も母堂もまだ若き時に、餘り氣に病むほどではなかつたが、近所の人中には心配の餘り、

「多分、勝輔さんは殺してしまふだらう。」
と、いつたといふことである。

百日咳の薬といつても、よいものとはなく、肺炎の豫防注射をしたり、よいと言はれる煎じ薬をのますなど、親としてつくすべきはつくしたが、十ヶ月もわづらひ續けたものである。

當時は近所にも同病兒が多く、事實、死亡も甚だしかつたので、

「よく助かつたものである。」

と、大尉の御両親の述べられたことは、けだし自然のことばである。

餘りに次々と、生まれ落ちて以來の苦難病難に、すっかり瘦せてしまつて、臀部が老人の如くとなつて、實に、あはれな姿であつたといはれる。

「眼ばかりぎら／＼光らせて、少しも子供らしさがなかつた。」

「かはい、子供といふ感じは全然なく、むしろ鋭い目つきは悪くいけば……………」

と、嚴父も母堂も何度も言ひ合つたやうである。かくて、生まれたばかりで、既に死生の境をいく度かさまよひ、或は、心膽もそのうちに、自ら鍊られたのではないかと思はれる。

(その三)

苦難はつゞく。其の後も小學校の二年頃までは、冬が來ると大抵は風邪に冒される。咳始めると屹度激しくなる。瘦せてしまつて抵抗力がなかつたのかも知れない。

「咳をしはじめると、ひどくなり、必ず私にとりついて來ます。苦しませられにか、よく抱きついて來ました。」
とは母堂の思出である。

瘦せ方も見て居れぬ程で、手首などは極めて細く、弱々しい子供であつた。御両親との話中幾度も思出として、

「一寸體に觸れるとすぐ泣く。痛がる。泣き虫少年世界を驚倒す」と新聞にも見えてゐたが、實際に泣き虫でした。全

く栄養不良の弱い子供で、餘りに細くて手など見られなかつた。」
とのことである。 だけでは

「子供らしさ。」かはいさ。」を失つたのも、實に、もつともなわけだとうなづかれた。
子供であつて子供らしさを感じられないことは、決して幸せではなかつたであらう。

四、俊 傑

よき體質

旃檀は二葉より香ばし

鋭い眼つき

優秀なる頭脳

よき體質

小學校の一年に入學した時、校長先生と受持の先生の前で身體検査をうけた時のことである。母堂は、既往症もすつかり話し、從來すつと病氣勝ちであつたことも學校醫に話されたものである。しかるに、その時の學校醫は

「今まではさうであつても、體質は大變によい。規則正しい生活をさせ、運動をよくやらせば、きつと丈夫な子供になります。よく、體育に注意せば、將來は必ず立派な體になります。」

と、語られたのである。母堂は大變嬉しく、又心強くなり、それから學校醫の云はれた通りに、子供の健康には格別細心の注意を拂つてゆかれた。

其の後、三年頃からは肥りも來て、段々丈夫な體になり、終には、海兵、陸士を一時に合格といふ見上げた體になり、更にかの潜航艇の中で頭張られる程の頑強な身體にまでなつたのである。

「學校醫は本當によくみて下さいました。やはりお言葉通り體質は極めてよかつたらしいです。この子のことなどから考へて見ますと、幼い時に弱いからと云つて、左程に心配したり、神経過敏になる必要はないやうです。いろ／＼と規則正しく、相當に體育といふ點に關心さへ拂へば、屹度丈夫な體に育てられます。」

と、母堂は泌々と體験談をきかして下さつた。

旃檀は二葉より香ばし

まだ大尉が四歳の頃の事である。

大尉は好んで、よく母の使ひに出た。まだごく小さい幼時のことゝて、三度に一度位は、お使ひを忘れて、よく道で蟹を相手にして遊んだものである。

母が呼びに行くと、大尉は飛んで歸つたが、よくお金を持つてゐないことがあつた。

「もしや」と不安にかられて問ひ質すと、無邪氣な少年は、さつさと遊んで居た蟹の穴の所まで母親をつれて行くので

ある。さうして、蟹の穴を一つ二つと數へて、何番目の穴からちやんとお錢を出して来て母堂に渡すのである。これは遊んで居る間に、

「錢を落してはならない。」と、

「蟹の穴に錢をしまつて置く。」といふ、幼兒に似合はぬ細かい注意から、四歳の大尉が考へ出した一策であつたのである。

鋭い眼つき

幼時から眼つきの鋭い上に、弱く病氣勝ちにて、一層きつく光つて見えたやうである。従つて、可愛い所は少しも見られなかつたし子供らしさを感じた時がなかつたとのことである。

何でもがまん強く、瘦せた顔に眼のみ、ぎら／＼光らせて、むしろ、氣味わるく思はせる程だつたといふ。

勝輔は口ぐせのやうにくりかへされた言葉は、

「勝輔はどうも目つきがちがふ、赤ん坊の頃からどう見ても眼がきつすぎる。大出世して偉い人物になるか。それとも、大泥棒になるであらう。」と。母堂は、

「二口目に大泥棒になるといはれる。どうもきゝ耳が悪くてしかたがなかつたのです。しかし、今にして見れば、主人の眼は間違はなかつた。先見の明があつたのでせう。ほんたうに大盗人になりました。あのイギリスの大戦艦を奇襲して盗んでしまつたのですから……。」

と、感激の心持で語られる。

この光る眼で家人はいつも話相手とされたさうである。弟妹が我がまゝでも云ふと、この眼で怒つたといはれる。

「勝ちやんの眼が光つてゐる。」

と、大尉と話す母堂も、一生けんめいであつた。小學校、中學校、兵學校と、大尉を教へられた先生方は、みんなこの鋭い射る様な眼光を問題にされたものである。その光に先生も同級生もすくんだといふ。

家人と話す時すら、この極めて鋭い眼つきを以て、相手の眼と見合はさないと話の途中で止めてしまふ。教室などでは、教

師の眼から絶対にこの光る眼を他へうつさないのである。

「岩瀬君の眼の光にあつては、いゝ加減なことはいへない。一時間中此方をくひいつて居る。あの鋭い眼には自ら氣をひき締められる感じさへする。」

と、語られた先生もあつた。

この炯々たる眼光こそ、大尉の俊英なる心魂の輝き、明哲せる頭腦のひらめきであつたのである。

優秀なる頭腦

大尉は昭和三年四月、丸龜市城北小學校に入學し、四年生まで同校で學んだ。受持ではなかつたが、その頃から勤続せる馬場教頭は

「體は小さい方でしたが、負けじ魂の強い熱血少年で、その一方に、落ち着いた處があり、飛び抜けて成績が良く、四年まで首席で押通し、算術などは特によく出来たやうです。學校は一日も休んだことがありませんでした。お母さんはよく學校に來られて、いつも、勝輔少年の教育に心がけてゐたやうです。」と。

又、大津市南校の六年當時の受持八田先生は、

「無言な子で、一度口を開くと堂々と話し、特に質問ぶりは突差のものでなく、ちやんと前から用意したもので、私も僻易するぐらゐでした。數學が得意のやうでした。」と。

更に、徳島縣立池田中學在學當時、同校教頭として前後二ヶ年間、大尉に國語、漢文を教へた森先生は感慨深げに語る。

「昭和十一年三月滋賀縣立膳所中學から轉校して來たが、その時の試験成績は極めてよかつた。私が二十二年間の中等教員生活中に、轉校試験であれだけの成績を占めた生徒はありませんでした。」と。

父が稅務署に勤務せし關係から、頻繁に轉校してゐるが、小學、中學を通じて、一度も首席から落ちたことがないといふ一事からでもその頭腦のよさがよくうかゞはれる。

小學校の時なども、毎學年級長に任命され、優秀の衰狀を受け、種々なる統一考查にも、常に、秀逸なる好成绩を示してゐる。

一度も試験勉強などをした事がないといふ。これは、ふだんの努力の賜ではあるが、俊英なる透徹せる頭脳を持つてゐたからでもある。同級者がよく参考書の選擇購入を大尉に頼む。

「岩瀬、たのんでおいた参考書は。」

と請求すると、一日か二日で讀終へ、頭に入れてしまつてゐる。しかも、その事項を忘れない。

「讀書家はよいが、藏書家はいけない。」

とは、常々から、大尉の口ぐせに云つた言葉である。とにかく入學難といふのを少しも知らない。常に研究をつゞけ、殊に教室内では眼を光らせて、ぎろ／＼させながら眞剣に學習するから、よく鍊成され、實力もついてゐたのであらう。

どの學校も入學難とともなく、試験勉強といつてせず、

「とん／＼拍子に進學し、何れの試験もうまくゆき、終には、印度洋までもいつてしまつた。」

と、両親はこも／＼語られる。

高知で、海兵、普通寺で陸士を受け、同時に見事合格したのであるが、海兵志願は其の時、五百人あり、身體検査で二百人に減り、學科で十一人にまで減じ、更に、嚴選して、結局、四人合格で其の一人となつたのである。

所が大尉本人は、

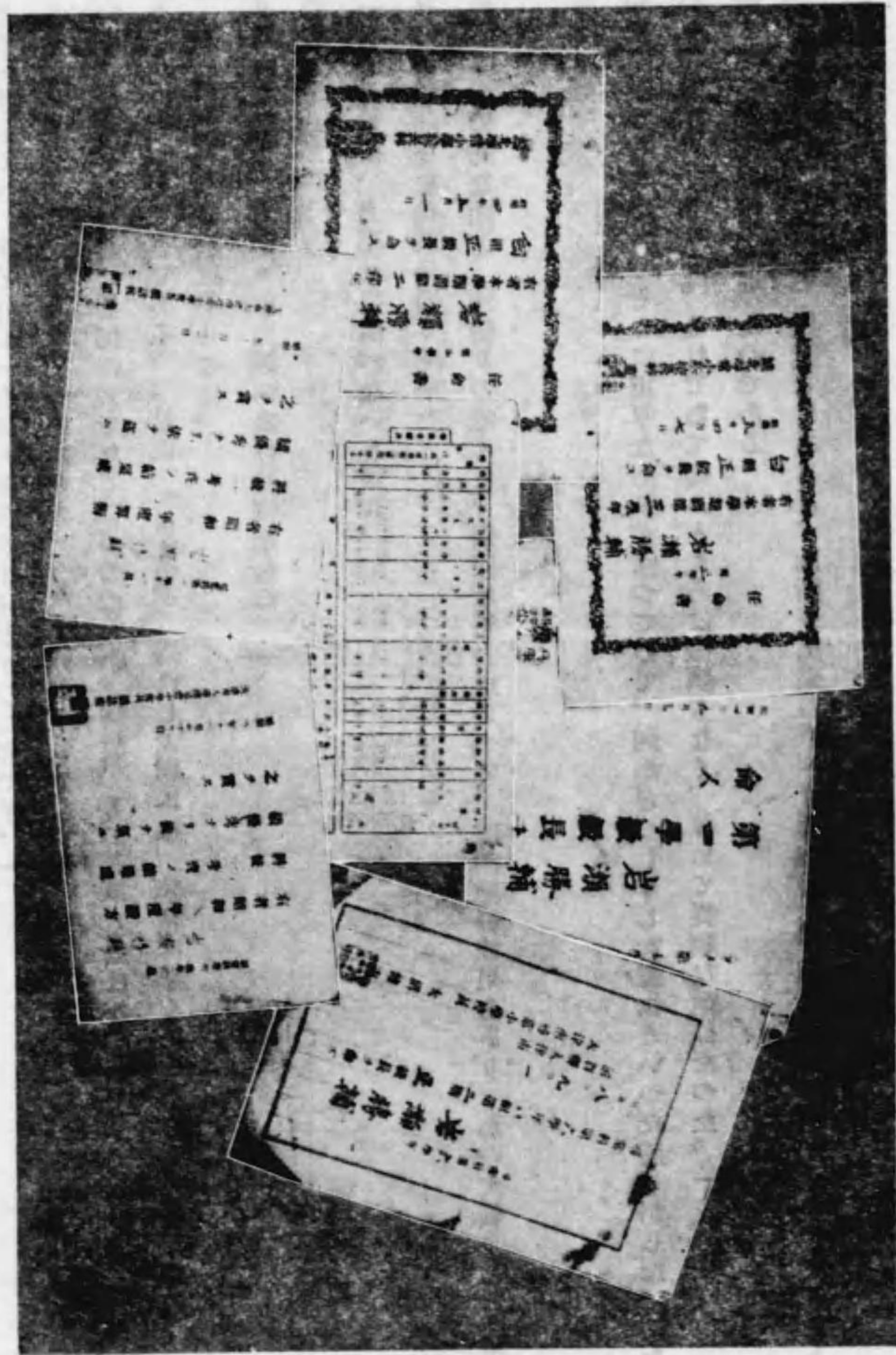
「數學が失敗した、半分しか出来なかつた。今から受験準備だ。計畫をたてよう今度こそ。」と。

母堂の「少し休息しては」といふのを聞かずに、汽車の中で計畫をたてゝゐる。所が、數學が半分出来なかつたといふから皆心配して、中學時代の先生に問ふと、大尉の一番得意のものである。そんなことはないといふ。兄も半分出来なかつたとする

と受からぬと諦めてゐた所、無事合格である。大尉は

「これは試験官の方の間違ひだ。間違つて受かつたのだ。頑張らねばならない。」

と。兄はどうも不思議がり、數學が半分出来ないので受かる筈がないと、いつも気がいらであつた。それで、大尉に何回問



小學校時代の級長任命書其の他

ふても「半分出来なかつた失敗だ」とくり返す。四年になつて卒業前になり、兄の詰問に初めて、

「數學が十問題出て、其の中の一問題の半分が出来なかつたのです。」
と、兄も全部の半分ではどうもと思つてゐたが、

「長い間、心配をかけた。全部の半分ではなく、一つの半分か。何故、もつと早く云はなかつたか。」
と、叱るやうに言つたさうである。「是位」と思はず、秀れし大尉には、非常に悪く考へたらしいのである。
潜水艦、殊に、特殊潜航艇に乗るには、

「鍛えられた體と、みがくられた頭がなければならぬ。」
との事である。

日記の一月十九日に、力學は自信がないと書き、
翌二十日に力學は兎に角八分通り出来た。と。

要するに、この優秀な頭と、頑張りの意志と、強靱な體力によつて、猛訓練の成果もあり、かの大戦果をあげ得たものである。

舊師の思出話に、

「岩瀬君は黙つてゐても、そこに重厚な空氣が漲つてゐて、何かどつしりした置物といった感じがした。何を質問しても
餘裕綽々の應答ぶりだつた。それでゐて街ふところは微塵もなく、極めて従順な生徒だつた。」と。

先生も驚く頭の冴えを持つてゐたのである。

なほ、「岩瀬君のゐる教室で授業してゐると、油断が出来ぬ。ヘマをいふと岩瀬君が感づいて、すぐニタリと笑ふので、
先生の方が緊張させられた。」

といはれるのも頭の鋭さを物語る所であらう。

五、自 制

幼時から自分の事は自分でする

極めて質素儉約、服装などには無關心

寡黙實行の型（日記）

不斷の反省により厳しく自らを責む（日記のまゝ）

幼時から自分の事は自分でする

小學校の二年頃までは、すつと、か弱く、病身で、一寸觸つても痛がる程の體であつたから、養護方面ではやゝ手間取つたやうであるが、其の他の身のまわりのことでは殆んど世話をやかさなかつた。

母堂は、

「兄弟中で一番世話がいきりませんでした。却つて、してやると機嫌が悪かつたものです。」

と。三年生の夏休み前のことである。野球網の支柱か何かにとびついてゐて、つい右腕の肘關節を脱臼し、一ヶ月程ギブスをいれたことがある。普通なれば泣き騒ぐまだ十歳頃の少年でありながら、醫者に行きつくまで、一言も、痛いとはいはなかつた。忽ち、便所へいつても差支へるわけである。母堂が何とかして上げようと云ふと承知しない。決して母の手をわづらはさず凡べて自分でしました。また、御飯をいたゞくにも極めて不自由である。そこで、これも母堂はどうにかしてやりたいものと思つてゐると、

「お母ちゃん。一寸、匙を貸して頂戴い。」と。

なんでも左手でさつさと食べて平氣である。

着物を着たり、ぬいだり、帯することなどもするふん困難であるが、一向他人の手をわづらはさうとはしないのであつた。

「右手一本が動かなくても、多少不自由ではあるが、この通りまだ左手がちやんとあるから……………」

と、何ごとでも世話をやかせず、どん／＼自分ですましていつたのである。夏休頃だから、何冊もの帳面に書かあたかも、受験準備のやかましい時であつたので、宿題もたくさん出てゐたのである。夏休頃だから、何冊もの帳面に書かねばならなかつた。

受持の先生から「もうよいと特別のお許し」があつたものだが、やはり、全部左手で文字は大きくなり、餘りきれいには書

けなかつたが、すつかり、やり遂げて提出したので、受持の先生も驚歎されたさうである。この心的態度が、別項に記したやうに「負けじ魂」となり、「がまん強い闘魂」となつて、何事でも徹底せずんば止まぬ氣魄へと發展したのであらう。

「勝ちやんは殆んど参考にする本とは持つてゐない。かはいさうな位である。」

と。母堂はよく話されたといふが、之も自分の力でやり通した結果であらう。小學校の時からである。朝何かごぞん／＼やつてゐる。見ると、ボタンを自分でつけてゐる。また次の朝もやつてゐる。見ると破れを繕つてゐる。

「勝ちやんはどうして、そんな事は、お母ちゃんに頼まないの。」

と云へば、

「兵隊さんは何でも自分でします。お母ちゃんに兵學校までも、ついて来ていただけません。」

と。決して自分の出来ることは頼まれなかつた。

そのためか、兵學校に在學中などは、何でも巧妙に出来たし、しかも、極めて敏捷だつたやうである。あの〇〇の海を木の葉のやうな特殊潜水艇に乗つて行き、しかも彼の防備嚴重な敵地に敢然突入、更に上陸までして勇戦奮闘したといはれる、岩瀬大尉のこの獨往邁進の敢闘精神は、かくして、幼時から學校時代、さらに最期まで貫きとほされたのである。

「自分のことは自分でする。」

この生きた典型を岩瀬大尉にみられる。

かうしたことを靜かに考へてゐると、何んでも自分のことを自分でやりぬかれたといふ、かの聖將東郷元帥のことがしのばれて、兩者相通する所あるを思ひ、深い感銘に打たれる。

極めて質素儉約、服装などには無關心

小學校の頃から登校前に何かやつてゐる。見ると毎朝のやうに、

「破れをつくらつて居る。ボタンをつけてゐる。」

尙、靴下など底がぬけてゐても平氣である。履物など、無い時には、跣足で出かけるといふ風であつた。持物など極めて大切に、兄弟中でも母堂が、物を買つて與へた時最も感謝したのは勝輔であるといはれる。

帳面がないと、鉛筆でかいた上から、墨で大きく書いて居る。

「持物をごく大切に、自分から買つて下さいと殆んど要求しない。」と。

殊に、筆筒の件であるが、中學校の時、セルロイドのものが蓋が半分に割れてゐるのを見て、

「代りを買つては——」

と母堂がいはれると、

「小さい物など、かうして出し入れに便利です。」

と。半分に割れたのを却つて便宜になつたと喜んでゐる。しかも、それを中學校から兵學校に、更に、最後の軍艦にまで持つて行つてゐたので、軍艦から送りかへされたものと聞いては、實に感心の至りである。

小學校の五年の時である。丸龜から明石の人丸小學校に轉校した所、明石は別荘地帯で、兒童達はすべて、紺サージの折襟に半ズボンで、極めてさつぱりしてゐる。大尉は木綿の小倉で、長いズボン、しかも、何回か洗濯したので白けづいてゐる。轉校した當時は、友人達に盛に罵られたり嘲けられた。

「支那ちゃんだ。支那ちゃんだ。あれを見よ。あのかつこうを。」

と。併し、本人は全く平氣であつたらしい。

それからずつと長い間たつて後、母堂がそれと気づいて、洋服を短いズボンに折襟のを買つて着せた時、まだ、一度も口にされなかつた大尉が初めて、

「あのね、お母ちゃん。僕が入學した頃から、皆、僕の服装を見て、支那ちゃん、支那ちゃんといつて笑つたの。併し僕は、平氣であつたよ。」

と、云つたさうである。服装などには少しも氣を止めず、全く平氣で勉強には一心に勵んだ様で、間もなく一番になり、皆からも自然に敬はれたといはれる。

母に何にもいはなかつたのは、心配をかけては、との孝心もあつたのであらうが、母堂もこの時ばかりは、なぜ早く言つてくれなかつたかと、いぢらしくも思つたさうである。とにかく、服装には極めて無頓着だつたが、兵學校に入つてからは一寸かへるも、ブラツシユかける。折目をつける。何でも清潔にきつぱりして、學校方針に従つたといふ。大變、儉約なことは葉書の返事など重なる時、その時、其の時に繪ハガキを書いておき、十數枚一度にまとめて、

「不經濟だから、五錢ですましておく。」

と。弟妹などに出されてゐる。少しの小遣錢でも残ると、母堂に、

「これだけ残りました。」

と、いつて必ず返したものである。

大尉の遺品の數々を拜するも、その儉素なことに頭が下るばかりである。母堂の

「参考書など殆んど買はない。可愛さうな程勝ちちゃんは持つてゐない。」との話も首肯れる點である。

寡黙實行の型(日記)

「岩瀬が見えぬ。」と戦友が求めると短艇練習であり、何かの研究である。常には殆んど語らない。彼の壯舉も言ひたかつたと思ふが、最期まで絶対に語つてゐない。母堂も

「口數の少ないおとなしい無口な子供でした。」

と。大津市南小學校卒業當時の受持八田貞造氏は、

「大變無言な子であるが、一たん口を開くと、堂々と話し、殊に、落ち着いた質問振りは、今もありくと記憶に残つてゐる。しかも、お座なりのものではなく、前から準備した質問で私も僻易する位でした。」と。

黙つてゐるが、何でもよくわかつてゐて、

「岩瀬君は床の間の置物のやうである。」

と、中學時代の先生もいはれたことは前記の通りである。

人の悪口とか、教師のあだな等は絶対に云はない。即ち少しも無駄口をきかなかつたやうである。寡黙實行の型だから、嚴しい自責、自戒、自奮、反省等に、其の日其の日を過したものであらう。大尉の日記に、

「冗舌者には底力がない。宣傳は何時か馬脚を露はすことあり。」。(一、二五)

先づ寡黙、謹嚴、容易に喜ばせず。

黙々として本分に邁進するは、我が海軍の傳統精神なり。汝須く之努めよ。(七、二四)

自制てふこと、實踐躬行てふことは畢竟その意は同じ。自制には意志の力を要す。意志の力は戦勝の因にして、血のにじむが如き修練によりて鍛錬せらるゝものなり。(一一、二二)かくして日記にもその信念をあさやかに書きつゞつてゐる。

不斷の反省により嚴しく自らを責む(日記のまゝ)

此の訓示要旨は「實踐躬行常に反省」だ。

自ら能動的に訓練に精進すべし。他よりやらされ居るとの考へ起りたる時は、訓練の効の擧らざる時なり。自己修養の好機を興へられたりと思ひて感謝すべし。(一、八)

短艇訓練、水取り不充分。尻を浮かす如くせば可なり。(一、一七) 短艇訓練は、四號の指導をなす。未だ、自ら充分なる實力を有せざるに他の指導をなし得る理なし。戦務處理の三要則、周到確實、簡單明瞭、迅速適時、(二、一) 君子は獨りを慎しむ。講堂に於ける態度反省を要す。考査終了まで風呂に行くべからず。酒保に行くべからず。余誓ふこと數次、而も遂に守れたるもの一としてなし。(二、一三) 俱樂部に食物を注文する等の暇と費があるならば、先づ、足元の學業に精を出せ……。(三、一六)

松浦様よりお手紙来る。如何に不肖に大なる期待をかけて居らるゝか。只今の如き状況にて宜しきや。努め、努めて學業に勵まざるべからず。此れで終れりと云ふ事はなし。事を精神修養にかりて、兎角、學業をおろそかにせんとする傾向あり。(三、二五) 來週よりは、努めて自ら事を求め、進んで多忙ならんことを期す。苟くも、安逸を求むる勿れ。(四、一二) 自習時間に睡氣を催うせしは不可也。奮闘的なるべし。

自習時に勅諭を暗記謹寫す。忠節の次に於て數行誤りたり。誠に恐懼慚愧に堪へず(六、九) 先日、父上の何かの席上にて(母上の手紙に依る)上郡の菓子屋の息子が本校の三學年に在學中にして、余をよく承知しありとなし、而して、余が何にても成績良好なる旨を云ひたりけるとか、母上は之を信じたり。慚愧に堪へず。何人のお世辭を云ひたるにや。我が現狀に比し、甚だ以て申譯なし。豈、奮起せざるべけんや。(七、一二)

机に向へども、徒に眠し。今から半年前の嚴冬訓練、短艇訓練の頃を考へて見よ。朝は、眞暗闇に寒風ついて猛訓練。晝は晝で、一時間以上、みつしりの訓練。しかも、考査はある。寒さは寒し。凍傷にはかゝる。それでも、元氣旺盛、頑張り一つで押し切つた。あの頃の元氣が出ないことがあるものか。陽氣の加減で、少しは眠いのかも知れんが、何の頑張れぬことがあらうか。歲月不待人!!(七、二五) 青年不重來。一日難再晨。及時當勉勵。歲月不待人。(七、二六)

吾人は他の船、機、兵主、醫等の士官とは本質的に異なる。機關科將校とも違ふ。故に、他の士官と共に遊宴に耽り、職務を怠る等のことあるべからず。(一〇、七)

明日の講話の草稿を練る。二週間も前より起草せしも、その愈々前日とならずんば、之を完成する能はず。不可なり。遂に自習時間全部を費して漸く終る。二十五分の時間を興へられて講話をなす以上、何物かを感銘深く印象づけざるべからず。國體を説き、忠誠の念を益々鞏固ならしむるの他なし。(一〇、一六) 短艇指揮として、何時にてもお役に立つべく、心掛くるを要す。俺はもつとやらねばならぬ。つまらぬことに興味を持つ勿れ。やるべきことは多々あり。(一一、一七)

六氣

魄

熱 血 漢

小柄なるも“攻撃精神”に漲る

すさまじき闘魂(日記のまゝ)

貫徹せずんば止まぬ“鐵の意志”

負けじ魂を以て頑張りぬく(日記も)

“只今”を重んず(日記のまゝ)

明日への奮闘を期す!! 計畫的なり(日記)

熱 血 漢

竹を割つたやうな性格で、感激性が強く、涙をポロ／＼流す熱血漢であつた。この事は日記などにもよく首肯される。日頃から、自分は最年少者だから、他の隊員に後れをとつてはならぬと、不眠不休で猛訓練に従ひ、上官に對しては、

「特殊潜航艇に炸薬を裝備し、若し、攻撃が失敗した時は、體當りで敵艦を撃沈したい。」

艦上猛訓練

との意見を上申したこともある。

この感受性強き點が、頑張りぬく鐵の意志となり、すさまじき、負けじ魂となり、厳しき自責、自ら鞭つ力となつたものであらう。

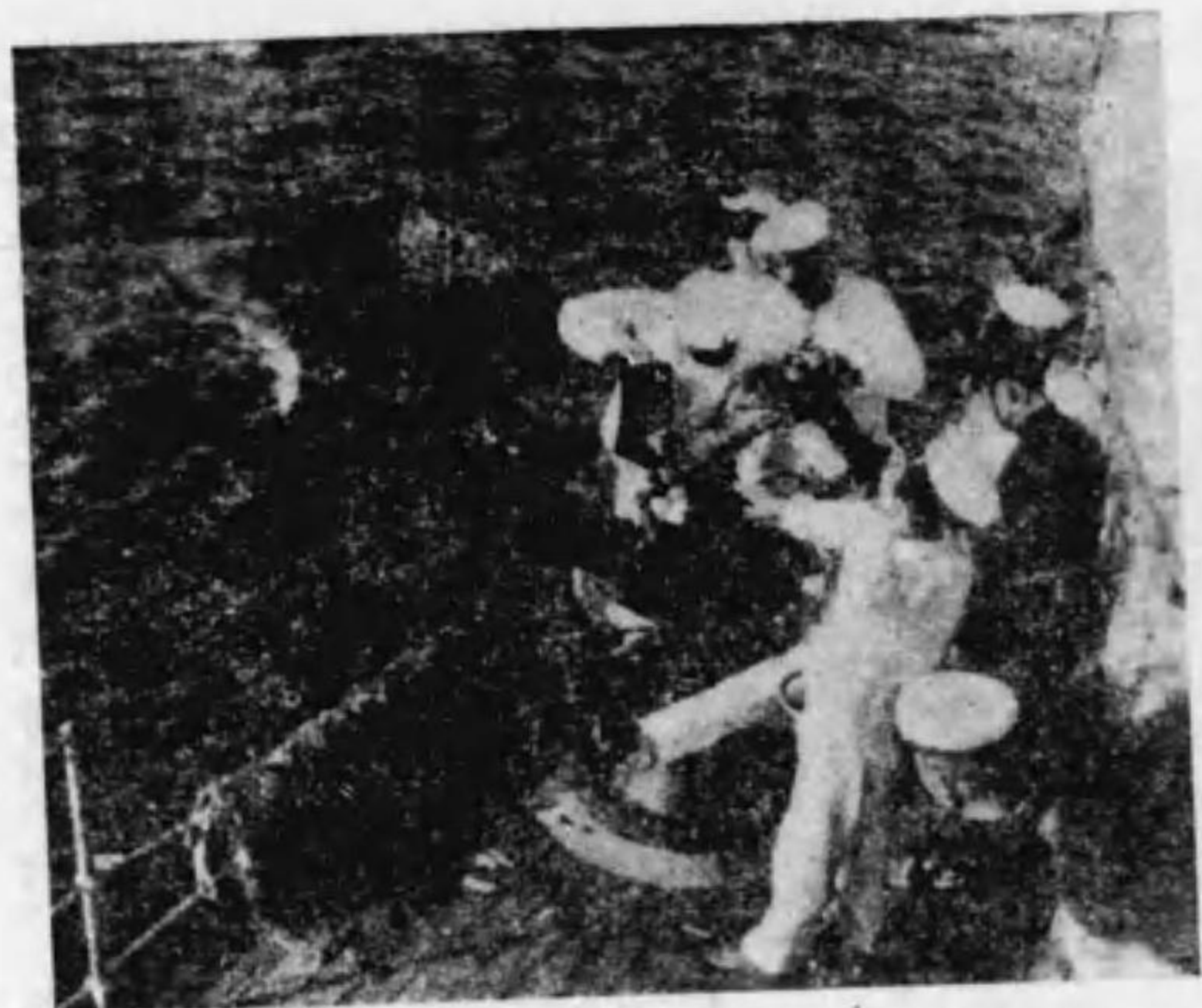
日記の全頁は、この熱血が、溢れたぎつてゐるやうに感じられる。

この大感銘、大感激こそ、大尉をして世界史を動かす一大快舉をなさしめしものと思ふ。彼の第二次攻撃隊員に選ばれた大感激は、他の者よりも幾層倍の猛訓練となり、奇襲の大戦果となつたのである。

身體は小柄なるも“攻撃精神”に漲る

岩瀬大尉は、中學校の四年生から、海兵も陸士も見事合格したが、一番心配だつたのは體の小さいといふ一事であつた。いや、小柄なため體重もたよりなかつたやうである。母堂は、

「もう一耗でも小さかつたら駄目でした。中學校の二年頃から伸びな



かつたらしいのです。もし、身長のために不合格であつたとすると、五年生になつても、身長は少しも伸びてゐないのだから、終に、受からなかつたでせう。」と。また、

肉弾相撃つ

「體重も安心出来ませんでした。金棒のおかげで、胸圍は格別廣くて、身體の均齊もよくとれてゐたやうです。しかし、勝ちやんは、若し體で不合格など云はれたら、"どんなにねばつてども、きつと、入學して見せる"と意氣込んでゐました。」と。

この様に體は軍人として、ごく小柄であつたが、"全身これ攻撃精神"といはれる程であつた。海軍兵學校の一年の終りであつた。訓練成績の講評に分隊監事より、

「岩瀬は、攻撃精神の旺盛なること無比である。軍人は攻撃精神が第一だ。」と、褒められた。海軍兵學校では何か下級生があやまると、上級生がさす。教官に代つて、上級生自身の力で、一年生を諭すのであるが、いつも

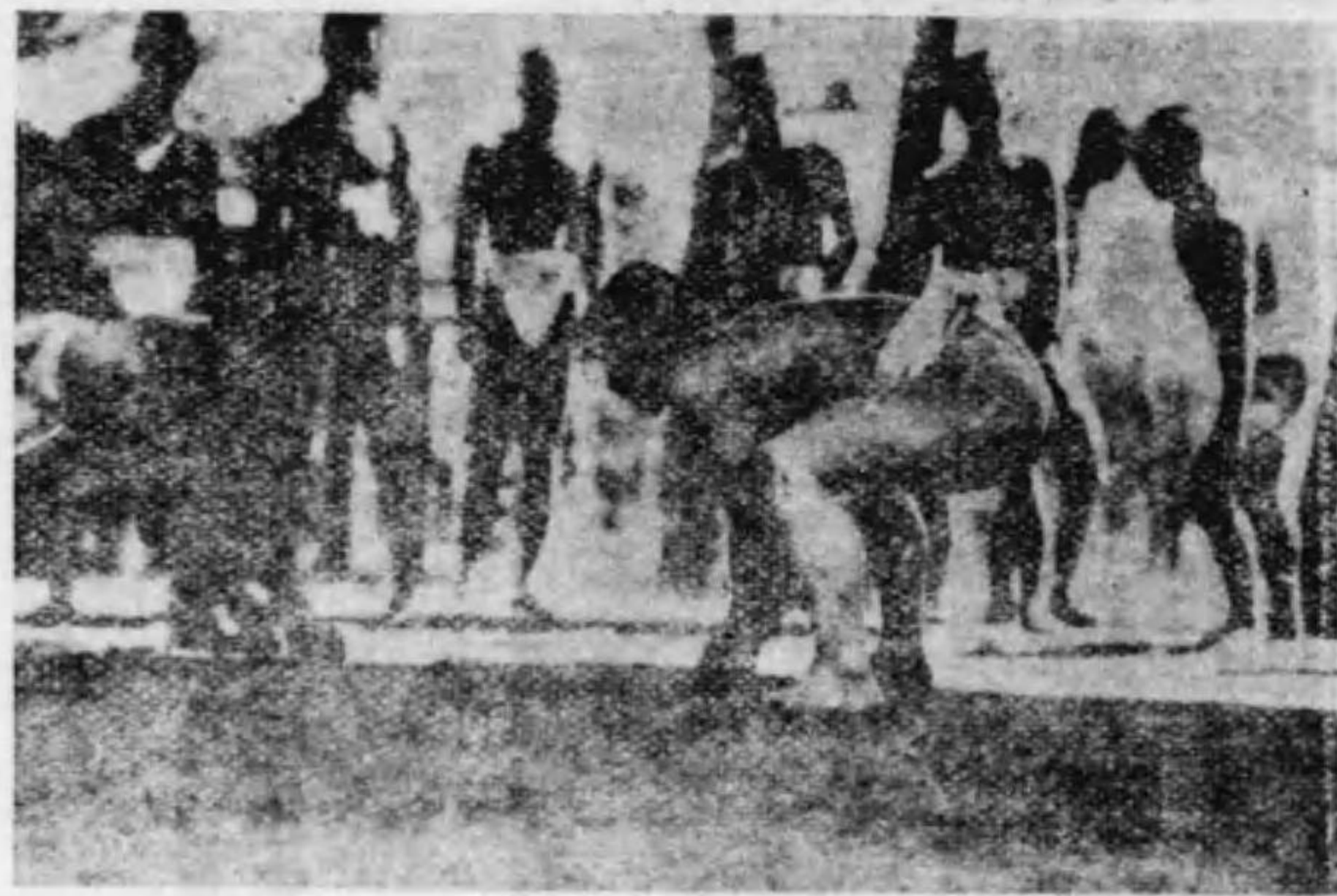
「二年の岩瀬を見よ。あれを手本にせよ。あの攻撃精神を學べ。」といつたとの事である。

「相撲」をよくやるが、攻撃精神で専らつきあたる。従つて、

「大尉は負けてもみんなに賞められた。」

さうである。いつも大尉は、

「小さい體は氣力で補つていく。」



と、とても元氣者であつた。

「小さい爲にボート漕ぐ時など、他の者が一回でよいものを、二三四漕がなければならなかつたのではないかと思ふ。その爲に、他の者の數倍の猛練習をしていつたものです。」

と、父母共に話されたが、こゝにも攻撃精神が躍如としてゐる。短艇練習など、何回「尻の皮をむいても」やつてゐる。日記の一頁にも、

「常に自ら能動的にやるべし。他よりやらされるのと考へ起りたる時は、訓練の効は學がらざるなり。」と。また、

「一つに氣力。二にも氣力。三に體力。四に伎倆。この旺盛なる氣力、堅忍不拔の精神、烈々たる攻撃精神にあらば、敢て、體力術力を云々するに及ばず。體の小さきが何だ。力の弱いのが何だ。そんなものは理由にならぬ。」

と。いつも攻撃精神に漲つてゐた。「すさまじき鬪魂」の項には、更に詳述しておきたいが、彼の

「特別攻撃隊員の一人に加へられたのも、この攻撃精神の特別な持ち合せだが、最大原因となつたのであらう。」

と信じられるやうに思ふ。

日記など、諸所に、この攻撃精神で綴られ、讀んでゐる中に生き生きと大尉の姿が眼の前に浮かんでくるやうに思はれる。軍神にまで進み得た人物陶冶も、この攻撃精神に因つて出来たのであらう。

「岩瀬は、敵前にゆけば必ず上陸して斬り込む。」といつてゐたから岩瀬がやつたのだらう。」

と、同期生の語るのも所以ありと思はれる。

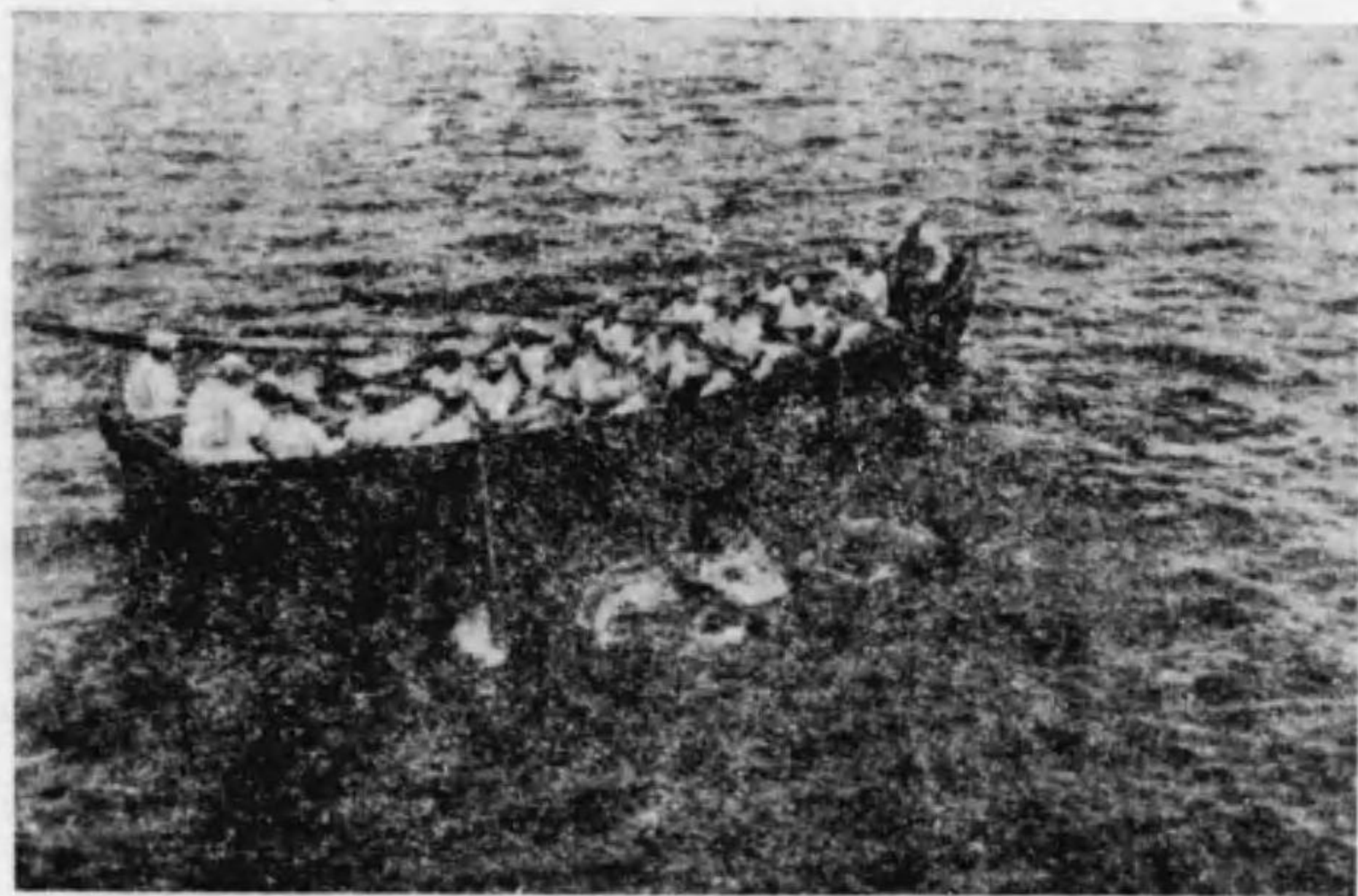
すさまじき鬪魂（日記のまゝ）

死者狂ひにて、頑張れ。(一、二五) 血のにじむが如き勉強こそ、吾人進歩の過程なり。

明日より待望の短艇週開始さる。各員、當に決死の覺悟にて勝利の一路に邁進すべし。光榮ある四分隊一クルーの二番

手に選ばれたり。任重く力不足なり。體力の不足は氣力にて補ふべし。短艇を漕ぎて斃るゝは本意なり。假令、死すとも本分を盡したりと謂ふを得べし。安きを偷む勿れ。奮闘の一路を邁進せよ。二週間は自己の體なりと思ふべからず。橈を操る機械なり。機械は最も忠實に漕ぐべきなり。烈々たる攻撃精神以外に、何等の區々たる女々しき感情を挿むを許さず。三十分連続力漕を目指し、生徒第一等を目標に短距離、遠漕共に優勝せんことを期す。(二、一二五)

力 漕 !!



一つに氣力。二にも氣力。三に體力。四技倆。

旺盛なる氣力、堅忍不拔の精神、烈々たる攻撃精神にあらば、敢て體力、術力を云々するに及ばず。體の小さきが何だ。力の弱いが何だ。そんなものは理由にならぬ。兎角俺は體力の小なるを以て自己辯解をなさんとす。最も寒心すべきなり。(二、二二七) 愈々競技の當日とはなれり。休暇明け厳冬訓練より顔で笑つて、心で哭いて、鍛へに鍛へた腕を表す時は今日だ。(三、六)

御都合主義にて、私見を以て事を判断處理すること勿れ。弱音を吐く勿れ。至誠なるべし。活氣あるべし。積極的自發的なるべし。食事の閑なくんばなざれば可なり。(六、三三)

今から半年前の厳冬訓練短艇訓練の頃を考へて見よ。朝は、眞暗間に寒風ついて猛訓練。晝は晝で、一時間以上みつしりの訓練。しかも、考査はある。寒さは寒し。凍傷にはかゝる。それでも元氣旺盛、頭張り一つで押し切つた。少し眠いが、何の頭張れぬことがあらうか。歲月不待人!! (七、二二五)

自制てふこと、實踐躬行てふことは、畢竟その意は同じ。自制には意志の力

を必要とす。意志の力は、これ、戦勝の因にして、血のにじむが如き修練によりて鍛錬せらるゝものなり。

我に對しては汗を流す。下級生に對しては涙を流す。君に對し奉りては血を流す。(一一、二二二)……前途の重責を靜かに

見つめ、猛然たる勇氣を振つてあらゆる困難を突破せよ。身を粉にして、へとくになるまで頭張れ。(一二、七)

お、このすさまじき闘魂!! 大積極の精神。これでこそ、二十二歳の年齢である世界的大事業を果したのであらう。

貫徹せずんば止まぬ、鐵の意志

大尉は一生、この「鐵の意志」を以て貫き通したのである。明石市人丸小學校五年の時代である。轉校入學して間もなく、

その受持の前田先生は

「岩瀬君は、頭は格別冴えてゐるが、惜しいことに體が十分とはいへない。鐵棒をうんとやると身體も鍊られるし、骨格がしつかりします。」

と。母堂は、これをきいて

「骨組をよくするために、金棒をするよといのお話でしたよ。」

と、大尉に傳へた。

それからといふものは、始業時一時間前には、必ず登校して金棒にとりついた。受持の先生も、

「多分、三日坊主」で終るであらう。」

と、思つてゐたのに、いつでもやつてゐる。前田先生が相當に早く出勤しても、いつも先に來てやつてゐる。いつ見てもきり／＼と廻つてゐる。毎日缺がさす必ずやるものだから、手など豆の上に出る血が代にちむ。むごたらしくて目もあてられなかつたとの事である。日が経つに従つて、胸圍が段々廣まつて來るやうに思はれる。母堂も、時折、一所に行つて見ると、小さいのに遠い所から飛びついて大車輪のやうにきり／＼廻轉する。しかも、無茶はしないで、極めて規律正しく、二

三十分で止める。けれども、寒い、冷たい冬でも、シャツ一枚で、元気に金棒にとりついていつた。こゝにも、がまん強く、何事にも必ず長続きする頑張性が見られる。性質として負けず嫌ひで、何でもやるとなると、「必ずやり通す。」「生半可ではすまさない。」「金棒にしても、受持の先生が早く来ても、その前からやつてゐるし、一寸遅くなると、既にすましてゐる。先生もその貫徹せしむる意志にすつかり感心してしまつた。」「勝ちやんは幸のよい子です。その時、その時によい先生に受持たれ、よい御注意をいただきました。お蔭で、胸廓も見ちがへる程立派になりました。これも、教育の力であり、先生の御かけです」

中學校へ、更に、兵學校から今度の壯途への身體の基礎は、この頃築かれたやうです。」「身體は五尺二寸位で小さかつたが、胸圍だけは、逆も大きく、肺病などの心配は少しもなかつたものです。」「母堂の追憶はつきない。」

母堂の大きい「見えない愛の力がかけ」となつてゐると思ふが、それは、毛頭申されない謙虚な母堂の婦徳が、奥床しく感じられる。

『自制には意志の力を必要とする。意志の力はこれ戦勝の因にして、血のにじむが如き修練によりて鍛錬せらるゝものなり。』とは日記の一頁である。

負けじ魂を以て頑張りぬく (日記も)

冴えたる頭腦にこの「燃ゆる様な負けじ魂」は、「鬼に金棒」となり、大尉の實力を遺憾なく發揮せしめたのである。大尉の兄弟はみんな負けるのがきらひだつたが、特に大尉は目立つてゐた。

兵學校の時は、校技その他、度々試合があつたが、偶々、敗戦になることがあつても、その手紙には、「自分は偶數組であるが、奇數組が勝ちました。奇數組は〇〇の點が感心だ。偶數組は、この點を學ばねばならぬ。」

と、決して負けたとは書かない。しかも、敵の悪口は絶対に云はないし、羨ましがりもしないで、大いにその美點を賞讃する。友達に對しても、よく賞讃して負け惜しみは云はなかつた。母堂は、

「剛情すぎる程負けず嫌ひでした。従つて、だら／＼することは大變きらつた。」と。

何事でも、貫徹せしむる意志も、漲る攻撃精神も、この「負けじ魂」があつたからこそである。「何でも自分でする」と、必ずやつて見せた大尉である。優秀な成績で終始したのも、前記僅か十歳で、右手をギブスでかためてゐながら、少しも母堂に世話をやかさず、自分で頑張りとしたのも、此の負けじ魂である。

ぎろ／＼光る眼玉も、この魂の光であつたのであらう。中學時代といへば、兄弟一所に通學してゐれば、語學などはよく兄に質問するものである。ところが、大尉は少しも最初から最後まで質問をしない。二年上の兄勝氏がその理由を尋ねると、

「先生の言はれる事を聞いてゐると、其の必要は少しもありません。」

と答へ、毎日授業開始が八時半なのに、六時頃には必ず登校し、兄勝氏と共に、首席で通したといふ。四年から海兵、陸士一度に合格といふ拔群の成績も、この頭の冴えからである。この平素の修練からである。日記の中にも「登れて後已む」。俺にも出来る俺だつてやる。やらねばならぬ。やらすにはおかぬ。(二、一〇) 早速第一日の訓練に尻の皮をむいた。(一、九) 短艇訓練には風和ぎよし。尻の皮更にむく。(一、一〇) 尻の痛いのは閉口。戦闘即應。至誠通神。人格完成。(一、一二) 明後日からは早速、嚴冬訓練がある。今まで貯へて来た銳氣を養ひ、以て大いに頑張る。黙々たる張切りを以て、青年の眞價を益々發揮せん。(二、七) 眠し!!頑張り!!頑張り!!(二、一一)

武道短艇間終了せり。而して、宮島遠漕終了せり。然れども、吾人は氣を弛むることあるべからず。一意専心、只今迄の緊張せる心と、堅忍不拔の氣力、體力を以て本分に邁進せざるべからず。

余には、當に、遂行すべき大願あり。(三、九)

本日卒業式豫行。吾人は如何にしても勉強せざるべからず。只、勉強すれば人格も陶冶さるゝなり。卒業するだけでも、家

郷の父母同胞の喜悅幾何なるや。而も、榮譽ある恩賜品御下賜になるに於てをや。余は兎に角、勉強せざるべからず。(八、五) 計畫無き生活は、恰も、盲人の手探りに路を行くが如し。……前途に光明を見つめたる、張り合ひのある生活をなすべし。(九、二八)

両親の「がまん強く頑張り屋にはこまる。」との嬉しい小言も、この自奮、自戒、奮闘の負けじ魂から自然に出たものであらう。

“只今”を重んず(日記のま)

吾人は勉強せざるべからず。無條件で勉強しろ。他に言ふことはない。今が大切だ。試験前になつて慌て、べそをかいても遅い。今が肝要なり。(三、二二) 光輝ある二千六百年も餘す所一ヶ月餘とはなりぬ。今にして奮闘努力、有終の美を飾るにあらざれば、又、何時の日か、この記念すべき佳年に生れ合せたるを欣ばん。(二、一九)

吾人は、兎にも角にも勉強せざるべからず。之本分遂行の唯一最良の道なり。だらしなき生活をなしあらば、卒業後如何なるや。今より自制心を大いに發揮せんことを期す。(二、二〇)

下級生指導に心を奪はれて、自分自身が浮はつてしまつては何にもならぬ。先づ、足元を固めよ。自己の立脚の地に反省を加へよ。更に更に堅確なる立場に立つて、前途の重責を靜かに見つめ、猛然たる勇氣を振つて、あらゆる困難を突破せよ。身を粉にして、へとくになるまで頑張り。只今よい加減に暮す者は、卒業後も好い加減に過す。果ては、身を過り、汚名を後の世迄残す事あり。(二、七)

即日即決主義。

今日一日無爲に過したり。實に醉生夢死、何たる恥づべきことぞ。自らその不甲斐なさにあきれるばかりなり。兎に角、今頑張り!!。(二、八)

一大事とは只今なり。

今が最も大切。一大事なり。心を締め直して、奮闘一番!!。(二、九)

本年最終の十五日間。今年をしめくゝりとして、今年中既習のことは、今年中に結末をつけよ。

命令は絶対に厳守し、即時實行すべし。

軍紀の根本はこゝに在り。(二、一五)

明日への奮闘を期す!!。計畫的なり。(日記)

“吾人は如何にしても勉強せざるべからず。”と。

海兵と陸士を受験した時、十日餘も入學試験に疲勞してゐるにも拘はらず、歸りの車中にて早くも“ついで失敗しては”、と次年の一ケ年の計畫をちやんと樹てゐる。母堂は

「少し休んでからにしないさい。」

と氣遣かつた程である。次に日記のまゝ記してみよう。

勉強すれば人格も陶冶さるゝなり。卒業するだけでも、家郷の父母同胞の喜悅、幾何なるや、而も榮譽ある恩賜品御下賜になるに於てをや。余は兎に角勉強せざるべからず。(八、五)

計畫無き生活は、恰も盲人の手探りに路を行くが如し。本校入校以來、既に、二年有半にして、最上級生となり、而も、盲人の歩むが如き、行當りばつたりの生活を續くこと斯くの如し。世に新體制の宣傳さるゝ今日、余が生活も清算されずんばあらず。前途に光明を見つめたる、張り合ひのある生活をなすべし。先づ、日曜には來週一週間の豫定を樹つべし。更に日々自習止め十分前には、明日の豫定を計畫し、本日の成果を反省すべし。“戦史讀みて暫らく胸の音を聞く”。(九、二八)

吾人は兎にも角にも勉強せざるべからず。これ本分遂行の唯一最良の道なり。だらしなき生活をなしあらば、卒業後自由な

る環境に在るときは、如何なるや。慄然興起せざるべからず。卒業後は心懸一つなり。今より自制心を大いに發揮せんことを期す。(一一、二〇)

考查まで僅か十二日。昔の俺はもつと勉強してゐた筈だ。頑張れ。卒業すれば自習しようとしても、特別の時間は與へられない。自習時間を有効に使用し得ざる者の卒業後は果して如何。三思猛省せよ。(二〇、八)

七、孝 悌

美しき兄妹愛

孝心深し

(附) 優しき一面 (日記による)

ある一面

美しき兄妹愛

勿論、兄弟愛もうるはしかつた。兄の勝君、弟の清幸君、妹の昭子さん、この四人兄弟だが、勝君は大尉とは丁度同じ頃、即ち廣高師在學中であつたので、廣島と江田島に住み、その仲のよさは、江田島を訪問した時の兄勝君から、母堂に宛てた手紙に躍如としてゐる。次のは、大尉の兵學校卒業の年、兄勝君から母堂への手紙である。

「昨、日曜日は快晴に恵まれ、久し振りになつかしい江田島を訪れました。(中略)、弟は試験が多く、相當に難儀をしたが、愉快に終へたこと。高等數學、力學、砲術のこと。兄貴たるもの、ぼかんと聞いてゐなければならぬことを堂々と聞かされて、さすがに我が弟なり。」と感嘆しました。(後略)」

殊に、一人の妹の昭子さんに對しては、非常にこまやかな兄妹愛のもつ大尉であつた。

昭子さんの女學校入學の時のことである。昭子さんは成績もよく、親たちも安心して大丈夫だと思つてゐた。兵學校へは入試の結果を直ぐ通知すると打合はせてゐたが、どうした間違ひか、豫定よりも三日もおくられて大尉の手に入るやうな結果となつた。手紙の遅れたのは不合格の知らせに相違あるまい。と、直感した大尉は、手紙の封をすぐ切る氣持になれず、妹の悲しみを思ふと立つてもゐても居れず、

「共に泣いてやらう。」

と、手紙を持つて便所に行き、封を切つてみると、豈はからんや。駄目だと思つた反對に、目出度い入學の知らせである。直ぐ飛出して喜んだの何の、

「あの時は思はず嬉し涙が出た。」

と、後々までも家族に語つたといふ。

大尉の手紙は、どれも、到底表現出来ない感動を一通々々から受けるが、この昭子さんの女學校入學を祝した手紙——その

時代の大尉としては珍らしい巻紙に筆で書いた手紙——はとりわけ人の眼をひく、

拜復、目出度く合格の由大賀奉り候。平素の御勉強の功績なりとは云へ、貴女様始め、御両親様のお喜び如何許りと拜察仕り、遙かに拙者も満腔の敬意と満足を表する者に御座候。實は、餘りお知らせが遅いので、甚だ失禮ながら萬一を懸念して、是の二、三日はそれ許り考へ居り候。今夜からは安心して悠々と寝られる事と存じ候。數日來、當地は雨催にて、櫻も將に開かんとして躊躇致し居るが如く存ぜられ候も、昨日より、チラホラ蕾が笑みかけて、武骨共に春の訪れを囁き居り候。(中略)

お手紙に仰せられ候様、愈々、女學生として、非常時下の銃後を背負ひて立つ立派な日本女性となれんことを心より祈り申上候。先は、右取急ぎお喜び迄。亂筆御免被下度候。

勝 輔

我が敬愛する

昭 子 様

二 仲

戰友數名より宜しくとのこと

——この二仲の中に海軍兵學校生徒の純真な珠のやうな性格を見出す。——
この時の大尉は、まだ、二十歳であつたが、このかたい候文の中に、妹に対する深い静かな親愛の情の溢れてゐるのは驚くべきことである。

尙、日記を拾つて兄妹愛をしたので見よう。

三月二十八日。弟清幸より手紙來る。妹のことにつき何の來信もなし。

三月二十九日。昭子の入學試験は二十五日より二十七日迄とか。發表がありさうなものだが。

三月三十日。昭子の入試は發表されたのであらう。合格したのなら直ぐ電報でも打てば良いのに。……多分大丈夫とは思ふが、流石に心配になる……………。

四月四日。昭子より來信。三月一日付合格。即時喜狀を出す。父宛、昭子宛。

四月十日。昭子は、昨九日、始業式にて天晴、女學生となりたり。

四月十五日。一冊十五錢として十冊。小包として送らん。首席になりたると、昭子の入學祝なり。

孝 心 深 し

親思ひの大尉は、暑さにつけ寒さにつけ、想ひ描くのは父の姿であり、母の面影である。三日に一度は書かずに居られなかつたのであらう。母堂は、

「早く別れようとして、一生涯のを、一べんにくれたのでせう。」

と、長短とりくみながら、今も三百通の大尉の便りが残されてゐる。

小學校の頃、度々嚴父の轉動されるのを弟妹などが

「お父ちゃんが度々かはられるから、言葉づかひなど、わからなくて困る。嘲られるからいけない。」

といふと、大尉は、

「子供が父についてゆくのは當り前だ。子供は父のつき者だよ。」

と、極めて淡々たるものであつたといふ。

父に對しても「お葉書來る」。母上の「お手製の「スシ」「エギリメシ」を古鷹頂上にて戴く」。といふうちに、日記にも、決して敬語を忘れてゐない。

物を大切にされ、儉約して、決して自分から物を買つて下さいとは殆んど要求しなかつたといふ大尉の孝心にも敬服される。

勝輔大尉が航空隊に勤務した時、母堂は大尉に手紙を出して

「飛行機は危くないか」

と訊いたところ、親孝行な大尉は、飛行機の説明を多忙の閑を盗んで便箋に五枚も書き、最後に「お母さんに判り易いやうにと、宙返り」とか「急反轉」とか「着陸」の圖をかいで送つた。」

のであつた。

最後の歸省の際、平常病身の母堂が、その日は大變元氣な様子をしてゐたのをみて、

「これで、なんの心残りもなく死んでゆけます。」

と、冗談のやうに母の背中を撫でながら、ニツコリ笑つて出て行つたといふが、

「死を覺悟してゐたといふそぶり、は少しも見えませんでした。」

とは、母堂の述懐である。

昭和十五年十二月七日の日記に、

『下級生の指導に心を奪はれて、自分自身が浮はつてしまつては何にもならぬ。先づ自己の立場に反省を加へよ。更に、更に、堅確なる立場に立つて、前途の重責を靜かに見つめ、猛然たる勇氣を振つて、あらゆる困難を突破せよ。身を粉にしてへとくになるまで頑張れ。』

「家郷にありて、遠く遊學せる不肖の身を思ふ父母のことを思へ。大恩ある伯父のことを考へよ。優しかつた伯母が死ぬ間際迄思つてくれたことを忘れるな」。只今、よい加減に暮す者は卒業後も兎角よい加減に過す。果ては、身を過つて汚名を後の世まで残すことあり。』

と、大尉の孝心深き知恩の念がよくうかゞはれる。

優しき一面(日記による)

同級生にも、何かと親切にしたが、下級生の指導など、全く親心を以てのぞんだやうである。兄妹愛のこまやかさについては、別項として、日記に見ゆる俳句、歌などによりこの一面をながめよう。文章の得意なりしは手紙其の他でうなづかれる。元來寡黙のうちに中々ユーモアな所があつて、兵學校時代にもよく句作に嗜んだものである。

「俳句にはユーモアが必要だ。必要でないにしても當然含まるべきものだ。血と涙で過した生活の中にユーモアを見出して、笑ふに笑へない、泣くに泣けない人生の姿を描出するには、俳句が最も適してゐる。」例、「三振に頭掻きたる大男。」

と。その句作の態度を日記に残してゐる。

今は思ひ出となつた秋の句に。

秋 草の野に白球の後を追ふ
ホームラン空の青さや眼にしみる
時 雨るゝや雞頭の花重たげに
蟬の音の聞えずなりて秋寂し
また、
岩清水蜜柑の香しみこめる
大いなる星一つ落つ小夜嵐
雲行きを仰ぎて今日の時雨かな
草の香に故郷の山偲ばるゝ
無花果を見上げて子等は爪立ちぬ

蟲の音に聞入る窓に夜更けぬ
更に、 戦史讀みて暫く胸の音を聞く 等々。
和歌としては、

古のますらをどもがいそしみの

跡を偲びて涙流れぬ

ますらをのたけき心の一筋に

君を思ひて勉むべきかな

詩の如きものとしては、

小草に宿る露の香に、 酔ひつゝうたふきりぎりす。

あゝ、その森にみの虫は、 雨に濡れてぞ、ちゝと鳴く。

たゞ浮かぶまゝに書きつけた日記の間に散見したもので、想をねつたといふのではないが、大尉の優しき一面をうか
ゞひ得ると思ふ。

あ る 一 面

大尉は俳句に對する態度の中にも述べられてゐるが、常によく、

「軍人は威張るばかりが能ではない。ユーモアが大切だ。」

と、誰にも語つてゐたやうである。

家人の方々の異口同音に申されるのによると、元來、聲の餘りよくない大尉は、歌謡や浪花節なども上手な方ではないが、
歸郷された休暇の時などは、よく浪花節などを言つて、家人にきかさうとする。

「うまからう。よからう。」

と、おもしろい節で始める。しかも、謹聴しないといけないので、聞かされる家人は、

「随分、笑はされる。みんな、苦しい程おかしく、妹の昭子さんなどは、腹が痛くなる程よく笑つたものです。」

とのことである。これは、大尉の無邪氣さをあらはす點でもあらうか。併し、艦上での大尉の聲は、實に有名で、その號令
は艦中に響きわたり、それを耳にせるものをして、誰をも緊張せしめたといふから、相當に強き氣魂がこもつてゐたのであ
らう。

久しぶりに、親しき家庭にかへつたくつろぎの心持もあつたのであらうが、一面かうした放膽磊落といふか、かういふ點も
よくうかゞはれたやうである。

八、教

養

親しまれし書（日記による）

劔聖宮本武藏を學ぶ（日記による）

見 識（日記のまゝ）

人を導く心構（日記のまゝ）

親しまれし書（註 昭和十五年の日記による）

「大將白川」を読む。大いに感激したり。彼も、亦、松山の人なり。我も、亦、松山に生を享く。先人の名を辱かしむることなきを期す。如何に、白川大將が少年時に刻苦して勉勵したるや、感嘆に堪へず。この勞苦が報いられて、彼の名聲を博するに至りたるべし。教導團に於ける將亦、青年士官時代及聯隊の長となりてより後の刻苦の様は、誠に鬼神を哭かしむるものあり。血のにじむが如き勉強こそ、吾人進歩の過程なり。と。（二月五日）

「大義」を読む。

芥川龍之介「沙羅の花」を見る。（三月十三日）

「花袋紀行集」を読む。（三月十七日）

よく参考館拜觀にゆき、感銘を新たにせる記事を多く見受く。

参考館にて先輩の手記（勤務録）を拜觀し、感銘特に深し。（二月二十一日） 其他

「西遊記」等は興味あるも、餘り多く讀むべからず。専ら史傳を見るべし。先輩苦心の跡を偲びて、感奮興起するは、大いに可なり。（三月十七日）

「廣瀬中佐書翰集」を読む。（三月十五日）

「坂本龍馬」を読む。（四月七日）

「坂本龍馬」の續きをよむ。さきの映畫と同じ筋なり。彼、今にして世に在らば、かの木戸、西郷、井上等と伍して、維新の功臣にして世の重鎮たりしを。一夜、兇刃に可惜一個の快男子、遂に、大業完成を目前にして永眠す。（四月十一日）

「勝安房。」又、一雄傑なり。夙に、眼を海外に向け、能く、我が國の向ふべき道を誤らず。幕臣として克く臣節を完うす。

實に、我が海軍の創始者なり。（四月十一日）

「日本海戦史談」(佐藤中將述)を読む。(五月二十六日)

「橋中佐傳」を半ば読む。その青年將校時代の忠誠、勤儉の情に深く感じ、自ら戒しむ。(六月十日)

「戦史」は例によりて、得たる教訓大なり。曰く、「御都合主義にて、私見を以て事を判断處理する勿れ。」「弱音を吐くな
かれ。」「至誠なるべし。」と。「戦史讀みて暫く胸の音をきく。」

「山本權兵衛伯傳。」

「村上格一大將傳。」を読むべし。(六月三日)

「マハン海戦術。」(尾崎大佐。)

「日本海戦史談」(佐藤中將。)(七月二十四日)

右は休暇中借用圖書とす。

「白相少佐の傳」を読む。

「太平洋風土記」を見る。(十一月五日)

「宮本武藏」(吉川英治著)……註。丹念に下り松の邊を詳細に抜書きす。略す。(十一月十一日)別項に書く。

「宮本武藏」風の巻を読む。彼は名人なり。而して、吾人は名人たらざるべからず。「大根役者になる勿れと。」は猪口教
官の常に言はれし所なり。されば、吾人「彼、武藏」に範を取らざるべからず。されど、安價なる感傷に浸り、女々しき感
情に共鳴することあるべからず。

戦!!——恐らく一死を賭したる戦——に臨む前の彼の覺悟とその準備。情況判断の適切なる。いづれも範として足る。(十
一月二十四日)

「軍艦例規」

「艦船職員服務規定。」「國際法講義集。」(十二月十一日)

「古今著聞集」を読む。(十二月十五日)

江南の勤王志士「龍馬」に私淑し、宮本武藏を敬慕せし大尉は、好んで英雄傳記、海戦史などを愛讀して、修養と研究を重
ねたが、「武藏」の「風の巻」の讀後の感想として、

戦史讀みて、暫く胸の音を聴く。

といふ遺作は、自分の心境を十七字に託したのであらう。

劍聖 宮本武藏を學ぶ (日記による)

これは、大尉が吉川英治著『宮本武藏』を讀み、特に感じされてか、「日記」の間に張り紙をし、丹念に抜き書きされたも
のである。大尉が慕はしく感じられた點と思ふ。

『霧の下り松は、その傘杖を震はせて、何か豫感を天地へ告げてゐるやうだつた。』

眼に見えた敵の數は僅かであるが、武藏は満山滿地が、みな敵の居場所を感じられた。すでに、死界の中に来てゐる肌心地
だつた。手の中まで鳥肌になつてゐた。呼吸は、おそろしく深く靜かに足の指の爪までが、もう戰闘してゐるのである。
じり／＼と一歩々々に進む足の指が、掌の指にも劣らない力で、岩の間を攀ち登つてゐた。

——すぐ眼の前に古い砦の址でもあるやうな石垣があつた。彼は、岩山の腹を傳はつて、その小高い地域へ出た。

見ると、麓の下り松の方へ向つて石の鳥居がある。周圍は喬木と防風林でかこまれてゐた。

「オオ、お社だ。」

彼は、拜殿の前へ駈けて行くなり、そこへひざまづいた。何神社とも思はず、無意識に、べたと両手をついてゐた。折も
折、心魂のをのゝきを彼も禁じ得なかつた。——眞暗な拜殿のうちに、一穗の御明しは消えなんとしながら消えもせず、颯
々と風の中にゆらいでゐた。

「——八大神社。」

彼は、拜殿の額を仰いで大きな力と味方を持つたやうな氣かした。

「神。」

こゝから真下の敵へ逆落しに斬り入つてゆく自分の背にも神があるとする強み。——神こそはいつも正しき武門に味方し給ふものといふ強味。——織田信長が桶狭間へ駆け入る途中でも、熱田の宮へ祈誓されたことなども思ひ合されて、何となく欣しい吉瑞。

彼は御手洗の水で口漱いだ。更に、もう一杓子含んで刀の柄糸へきりを吹き、わらぢの緒にもきりを吹いた。手早く革褌をかけ、鬚止めの鉢巻を木綿で締めた。そして、足踏みを馴しながら神前に戻つて拜殿の鰐口へ手をかけた。

——手をかけて、(いや待て)と、武藏は手を離した。より合はせた。紅白の色もわからぬ程古びた木綿の綱。——鰐口の鈴から垂れてゐる一條の綱。——

(待め、これに縫れ。)といはないばかりな。

然し、武藏は自分の胸に、

(自分は今、神へ何を願はうとしたのか。)

をたづねて見て、はつと手を竦めてしまつたのであつた。

(もう死んでゐる筈の自分ではないか。)と思ふ。

(こゝへ来るまでに——いや、常々から朝に生きては夕に死ぬる身と、死に習ひ、死に習ひしてゐた身ではないか。)と、われを叱る。

それが、今計らずも、平常の鍛錬を、こゝぞと思ふ間に當つて、一種の御明しを仰ぐと、何か暗夜に明りでも見つけたやうに欣しげに心は揺れ、手はわれを忘れて、この鰐口の鈴を振り鳴らさうとしたではないか。さむらひの味方は人ではな

い。死こそ、常々の味方である。

いつでも、すゞやかに、きれいに、深く、ばつと、死ぬるといふ嗜みは、どんなに習つても習ひぬいても、容易に習ひきれぬ修行でないことは勿論だが、ゆうべの月から今朝まで歩いて来た己れの身こそ、それを全く體得し切つたものと、心ひそかに自分を誇つてさへゐたのに——と。武藏は石の如く神前に突立つたまゝ、凝と慚愧の首を垂れて口惜し涙が頬を下つてくるのを覚えぬものゝやうに。

(過つた。)と、悔いを心に噛み、

(——自分では、玲瓏と死身になり切つてゐたつもりでも、まだ、五體のどこかには、生きたいとする血がうづいてゐるのに違ひない。さまざまな世の執着が——迷妄が——あゝ無念な。われを忘れて鰐口の綱へ手を差し伸べさせたのだ、——この期になつて、神の力を恃まうとして！)

今まで一度も泣かなかつた涙を、武藏はしきりと頬に流して、我が身にわが心に、わが修業に、萬恨の無念を持つのであつた。

(——無意識であつたのだ。恃まうとする氣持も、祈らうとする言葉も考へずに、ふと、鰐口の綱を振らうとした——だが無意識だから、尙、いけないのだ——)

叱つても、叱つても、叱りきれない慚愧なのである。自分が口惜しいのだ。こんな浅い修養をして来たけふ迄の自分であつたかと思ふと。

(愚鈍め。)憐むべき自分の素質を考へるほかなかつた。すでに、死身!!何を恃み何を願ふことがあらう。戦はぬ前に心の一端から敗れを生じかけたのだ。そんなことで、何が死身か。何がさむらひらしい一生涯の完成か。

だが武藏はまた卒然と、

「あゝ有難い。」

眞實、神の有難いことを感じた。まだ幸ひにも戦には入つてゐない。一步前だ。悔い、同時に改め得ることだつた。それを

知らしてくれたいものは神である。

彼は神を信じてゐる。しかし、

「さむらひの道」が死である以上、神をも超えた絶対の道だと思ふ。さむらひのいたゞく神は、神を尊ぶことにおいては人後に落ちてはならないが、神の加擔を恃んでは眞の武士道は成しとげ難い。

「……………」

武藏は一步退つて兩手を合はせた。——しかし、その手は鰐口の綱に手をかけた時とは違つたものであつた。

そして、すぐ、八大神社から細い急坂を駆け下つて行つた。坂を降りきつた山裾の傾斜に下り松の辻はあつた。」

この劍聖宮本武藏の尊い心境こそは、そのまゝ、大尉の求めつゞけた境地であつたのであらう。

見

識 (日記のまゝ)

今、譬へば、人の地位は水で、その智能を鹽だとする。地位はどん／＼高くなるのに、智能を増さなければ、稀薄な人となる。いざといふ時に結晶が出来ない。智能が多ければ直ちに多くの仕事を爲すことが出来る。常に、水の増すに従つて塩を増せ。濃度大なる人となれ!!。(一、三〇)

吾人は凡ゆる事に通じ、而して後、只一つの事に力を注がざるべからず。かくして、圓滿なる勤務をなす事を得るなり。

(一、三二)

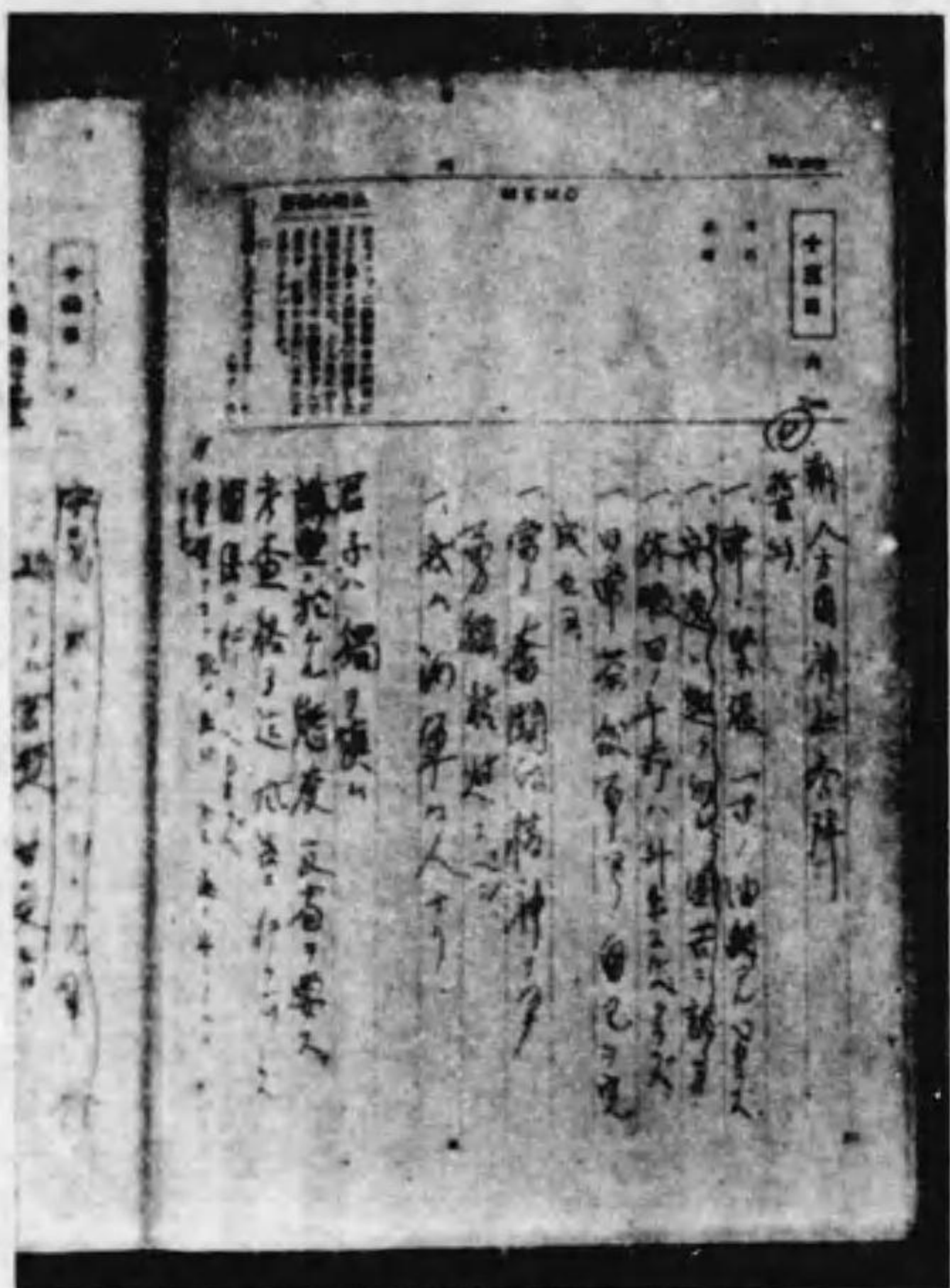
「誓約」。一、常に緊張、一寸の油斷あるべからず。

一、安逸に赴く勿れ。困苦に就け。

一、休暇日の午前は外出するべからず。

一、日常茶飯事より自己を完成せよ。

日記の一頁



一、常に奮闘的精神を以て、勇猛精進すべし。

一、我は海軍軍人なり。(二、一三)

安易に就かんとする勿れ。先輩の齊しく踏みたる苦楚は甘受せよ。頭の悪い者は、人の二倍三倍努力して始めて一人前となり得る。労力を惜しむな。懈怠の念生ずる毎に、顧みて慄然として奮起すべし。(一、一四) 「誓約」。一、常に、奮闘的精神を持して勇猛精進すべし。

一、日常茶飯事より自己を完成すべし。

一、安量もて、一人を容れ自ら律するに嚴なるべし。

一、安逸に赴く勿れ努めて困難に就くべし。(三、一)

物理考査は、暗記物の如き問題なりき。

甲板にて薄暮天測實習は視力最も大切なり。(四、九) すべて物事は叮嚀になすべし。

心をこめてやつた事は、假令拙劣なるも、人の心を打つものありて、究極の目的を達し得るものなり。第一に、字を書く時も同様なり。今よりは、略字くづせる字等は一切書かず、一々楷書にて書けと云ふに非ざるも、一劃一點をも忽せにせざれば、やがて上達するものなり。(四、一〇)

戦史は例によりて得たる教訓大なり。

曰く、「御都合主義にて私見を以て事を判断處理すること勿れ。」「弱音を吐く勿れ。」「至誠なるべし。」「

期訓育の注意事項、

- 一、活氣あるべし。
 - 二、積極的自發的なるべし。
 - 三、食事の閑なくば、なまざれば可なり。(六、三)
- 日、獨、伊協定により、對米關係益々微妙化するものと認む。開戦は早晚免れざる所なり。(九、二九)
- 詔書の大御心を奉養するの道は、各員が各々その本分を遂行するに在り。(九、三〇)
- 自制心を發揮してゆく。心掛一つ、最も愉快に!!。眞の愉快は、逸樂に非ずして、やるべきことをやりたる後に味はひ得るものなり。(一一、一〇)

計畫的生活、反省的生活、進歩ある、日に新なる生活、進歩ある、愉快な生活。毎日愉快、やるべきことは必ずやる。——責任感。——どうしてもやらねばならぬ。——實力の涵養。——必勝の信念。(一一、二二)

吾人は彼武藏に範を取らざるべからず。されど、安價なる感傷に浸り、特に、女々しき感傷に共鳴することあるべからず。「宮本武藏」の言ふその戦。(——恐らく一死を賭しての戦)に臨む前の彼の覺悟と直前の準備。準備情況判斷の適切なる。いづれも範として足る。(一一、二四)

人を導く心構(日記のま)

皆奮勵一番全力を注ぐ時に、一人恬として機を徒らに流す者あり。如何に、シート變更したりとは言へ、漕ぐ氣さへあるならば、今少しく力をいれて良きに非ずや。而も、口にするは、己が疲勞することをのみ、他の同情を買はんとするものゝ如し。余はかゝる戦友を持ちたるを一生の悲しむべき事と感ず。さはあれ。余は、自己の本分を盡さば、それにて可なり。他の非を挙げつらふ内は、自ら本分を盡し居らざるなり。人には一長一短あり。その短所のみ見ゆる人もあり。人を見るには

その長のみを見よ。人の短が見ゆる中は、未だ自己の修養の足らざるを思へ。心に憤怒する所あるも、面に表はすべからず。況んやその人に、あてこすり、或は、蔭口を叩くが如きは、深く戒むべし。度量は洋々たる大海の如くなれ。(二、二九)

昨夜、四號、情落甚しき故を以て、鐵拳を加ふ。四號否、三號、二號のだからしく居れるは、全く吾人の罪にして、三思反省せざるべからず。

本日、一三、三〇一號生徒航空實習に出發せらる。この一週間、立派に留守を果すに非ざれば、何の申譯けか有らん。之が最良の方法は、お達しするに非ず。況んや、鐵拳を用ふるに非ず。唯、實踐躬行あるのみ。而して、之に従はざる横着者あらんか、一時も容赦すべからず。(三、三一)

其の責に當る者、及、上級生は、進んで下級生を導かざるべからず。旺盛なる責任感とは、徒らに下級生を叱咤して、己れ一人責めを果すに非ず。

鐵拳を用ふべからず。眞の指導誘掖は、鐵拳等にて行ひ得るものにあらず。此の信念を固めおくを要す。古昔、我が武士の間には、斯かる風習なし。明治維新後、來朝の英、蘭人教師等の、奴隸等に加ふるを見て、本邦人の之を模倣せるに過ぎず。武士の間にて、かゝることあらば、打ちたる者も、打たれたる者も、共に切腹すべき筋合なり。今頃、英人の模倣をなすは誠に當らず。(一〇、七)

下級生中、練習を嫌惡し、無斷欠席して、参考館或は、道場附近を徘徊する者あり。皆、余が不徳の致す所にして、皆自己の罪に歸すべきなり。況んや、大聲叱咤して、其の怠慢を面罵するが如きことあるべからず。(一〇、一〇)

無斷欠席する者あるに至る。固より、余の不徳の致す所、誰の罪にもあらず。些細なる事故を申し立て休業せる者あり。固より、何人と雖も、苦しみを自ら喜びて受くる者なし。然れ共、無斷欠席する者あるに至りては如何。余は屢々下級生の目前にて自ら其の苦しみを洩したり。されば、係もかくの如し、と思惟し、余の命を輕々にするに至りたるならん。明日よりは新なる勇氣を以て、卒先、先驅をなし、且つ、下級生の健康にも留意し、喜ばせ且つ安心して練習に邁進せしむるに



至らしむべし。これこそ、眞の指揮者と云ふを得べし。
(一〇、一一)

自制心!!自らを制すること能はざる者は、亦、人を制する能はず。

慈愛!!下級者の事情をよく知る。(一一、一九)

朝、御殿山登山。皆、相當に早し。予最も遅し。慚愧の至り。三號は、皆、眞面目にして一生懸命にやつてゐる。皆立派な者ばかりだ。それに對して暴力を用ひ罵言を吐く等のことは一切出来ざる筈なり。赤心を推して人の腹中に置く。(一一、一六)

第七十二期生徒入校するに際し、一號としての心得。

(一)、新入生徒は、全國數千の應募者の中より簡拔されたる、身體強健、學術優秀、思想堅確にして立派なる家庭に育ちたる者にして、未だ軍隊教育を受けざれば、固より軍紀、軍人精神の體得に至りては、何等見るべきもの無きも、人間としては立派なる者なり。
入校の當初、洋々たる希望と堅固なる決意を持ちあるを以て、之を制肘するが如きことあるべからず。(一)、新入生の年齢は相當に若き者多し。十七、八歳前後に於ては、年齢の差による體力、思想、感情等の差は相當に大なり。之等の點も考慮に入るべし。(二)、垂範躬行、四號は何も知らず、されば、一號は懇切に以て何事も教へ導くべし。俺のやる通りやれ。俺について来い。されば、間違ひなし。といふ意氣にてやれ。

三號任せにすべからず。何とかして立派なる生徒になさんとし、眞の弟のつもりにて、立派なる後繼者を作り上げる熱意あるを要す。

自制てふこと、實踐躬行てふことは、畢竟その意は同じ。自制には意志の力を必要とす。

意志の力はこれ、戦勝の因にして、血のにじむが如き修練によりて鍛錬せらるゝなり。

我に對しては汗を流す。

下級生に對しては涙を流す。

君に對し奉りては血を流す。(一一、二二)

本校傳統の氣風的美點は、個人的ならずして、後輩の誘掖、同輩の切磋に、相互扶助的なるに在り。下級生指導は甚だ困難なり。之が運用を誤る時は却つて害毒を流すこととなる。入校當初の教育は特に深甚の注意を要す。新入生徒の中には、ひねくれものはなく、皆、純眞にして感受性に富めり。既に、校長、生徒隊監事より御方針を明示されあるを以て、之が具體的顯現を案じ、小我を捨て大我に歸一すべし。

訓示は、令達の一にして、主として、受令者の精神に訴へて、その効を擧げんとするものなり。されば、受令者は之を服膺して違はざらんことを期すべし。

軍紀、軍人精神は、吾人處世の大本にして、下級生指導に熱心の餘り、大本を忘却するが如きことなきを要す。人が赤心を推して人の腹中に置くときは、必ずや、何人と雖も感激するものなり。指導に當りては焦るべからず。消化可能の限度に教へ込むべし。一度や二度言ひ聞かせたりとも、覺ゆるものにはあらず。

威嚴は、己、自ら備はるものにして、形式により威嚇によりては得らるゝものに非ず。さすが上級生は偉いものだと思はしめざるべからず。分隊としてなすべきことは一號が全責任を以て當るべし。四號三號任せとなすべからず。

誰にても可なるときは、乃公出でずんばの意氣を以て積極的にやれ。自己一人よい子ならんとする勿れ。自我を没却して分

を守れ。自分の功を誇る勿れ。
名を恥づるは、道に近し。名を恥づるは、已を責むればなり。名を求むるは、道に遠し。名を求むるは、心、外に在ればなり。當り前のことを當り前にするは熱意と意氣を要す。寒暑に對しては、瘠がまんをせよ。寒さうな恰好をするな。風紀とは軍人の私生活を嚴肅ならしむるの謂也。(一一、二五)

九、忠 魂

至誠純忠眞劍なり

海軍魂

特に拔擢されて壯途に

烈々満を持すの決意

生 死 一 如

剛 膽 不 敵

至誠純忠眞劍なり

大尉は人の話をきく時、決して態度を崩さなかつた。目下は目下の様に、親身になつて、熱心に話をきいてやり、目上は目上のやうに尊敬の態度を失はなかつた。この性格は幼年時代からで、自分が話しかけてゐるとき、相手が一生懸命にきかないと、決して承知しなかつたといふ。つまり幼い時から、いゝかげんなことを嫌ひ、軍人の最も大切な「誠心」が既に早くから現はれてゐたのである。眼を合はさないと話さないのも、眞劍なる態度と思はれるが、或時、海軍の話の途中、階級のことを聞かれて、答へられなかつた所、其の夜、直ちに本屋を尋ね、午後十一時頃なるに、閉めた店の戸をあけてもらつて、その階級のついた本を求め、「あの問ふた人に渡して下さい」と、家のものに残して出かけた。殊に、話中は端座し、姿勢を正しくし、一度、海軍のことか、兵器——天皇の御物といふ——について語る時は、手を膝に、極めて謹厳であつたといふ。

休暇がついた時などいつも、

「この非常時に休暇を賜はる。實にありがたい。」と。賜暇とはいふが、大尉は又、眞劍な面持でいふのである。

教室における先生にくひ入る眼光。その質問も單なる思ひつきではなく、研究して來る質問で、時に先生の方で僻易したといふ。一度教師が問題を出すと、三つのものに五つ答へ、更に、二つ位の餘裕を持つて居たといふから、學習もよほど眞劍だつたにちがひないのである。若しも、教師のあだ名を云ふのをきくと、あの鋭い眼で怒つたといふから、師に對しても至誠そのものだつたのである。

手紙によつて何かの説明を書く時など、繪まで加へておこしたさうである。

一號にゐる時、四號生徒に所感を求め、
「余の如き者を深く信じ給ひて、生徒の一員に任じ給ひし陛下の御信倚に對へ奉らざるべからず。」

と、特に感銘の言葉として日記に残してゐる。
自習時に、勅諭を暗記謹寫す。忠節の次に於て數行誤りたり。誠に恐懼慚愧に堪へず。(六月九日の日記) また、その前には「弱音を吐く勿れ。」「至誠たるべし。」「積極的自發的なるべし。」「食事の閑なくば、なまざれば可なり。」「とも日記してゐる。翌日直ちに謹んで勅諭淨書と書いてゐる。この項目は、大尉の全生活そのまゝ、それなる感あり。十一月三日の明治節には、輝く紀元二千六百年の明治節を迎へ、感慨を新にして、勇猛精進せんことを期すとあり。何事にも真劍味と氣骨があつたからこそ、かの大事業を果したのである。

海軍魂

大尉のもつ全部の美質は、これ海軍魂の凝集であらうが、海軍兵學校の教育の力で全くこれが洗練されていつたのである。海軍では、昇進任官した時、お目出度うといふと、

「任官したのが目出度いか。」

と、いつて立腹するさうである。

軍艦撃沈の戦果など聞く、又、今度の大尉などの働きをきく、さうした時には、

「こりや目出度い。お目出度う。お目出度う。」

と、我が事の様云ふ。

「海軍では立身出世など、個人的なことは全然考へない。『死』をさへ全く問題にしない。兵學校の生徒は、本當に生き神様のやうです。この學校は心身を磨きぬいて神様をつくる學校です。」

と、大尉の御両親はしきりに述懐されたが、これでこそ、帝國海軍魂が鍊成されるのである。

「敵の軍艦をやりつけるのを唯一の楽しみとするので、遊戯の中にもそればかりである。」

とは、大尉の御両親の目撃談である。

この海軍魂の權化が即ち、岩瀬大尉それ自身である。従つて大尉は日記の中に、

「吾人は全國の青年を代表して我が國を背負ひ立たざるべからず。體は特に大切にして、不注意の爲損せざる如くせよ。」(一、一六)

「勅諭淨書。一、三の無氣力なる者あらば、小隊全部の元氣現はれず。苟くも兵學校生徒の元氣不足せりと言はれることあらんか、千歳の恨事、諸先輩に對しても、誠に申譯なき次第なり。」(六、一〇)

「特命檢閲、生徒隊に關する限り優良なりき。優良とは、拔群なるとき用ひらるゝ用語なり。」(六、一三)

「吾人は未だ軍人精神の陶冶充分ならず。

先づ寡黙、謹嚴、容易に喜怒せず。默々として本分に邁進するは、我が海軍の傳統精神なり。汝、須く之を努めよ。」(七、二四)

「令達といふものは、受令者の身勝手に都合好き様に遂行すべきものにあらず。獨斷專行とは、最高指揮官の意圖を遵奉するものにして、命令奉行と同一なり。令達徹底せざることあらば、指揮官の意圖の儘に突入せざるべからず。」(九、二二)

軍艦〇〇に於て、九四射撃艦の實物説明あり。△△には、候補生副直勤務中なりき。余等も、亦、半歳を出でずして本校を卒業し、海上に駢足を伸ばす事ならん。〇〇〇は、既に、〇〇に塗り、砲塔には〇〇を〇〇しあり。長さ〇〇。艦橋は

〇〇部に在りて、その状恰も〇〇、〇〇の如し。目下〇〇の〇〇中と見え、〇〇〇〇を使用す。(一〇、八)

大尉の歩みそのまゝが、海軍魂の働きであり、それは「不滅の武勳」の中に明證されてゐる。

特に拔擢されて壯途に

岩瀬大尉は、第二次特別攻撃隊戦死十勇士中目立つて若く、享年二十二歳といふ最年少者である。大正十年八月四日生れであるから、昭和十七年五月三十一日に東阿の海に於て散華したとすると、僅かに誕生日として迎へたのは、二十回である。

潜水艇の訓練を受けたものは同時代に相當數ある中に、特に拔擢されてこの驚天動地の働きをしたのである。格別感受性の強き大尉自身も、感銘殊に深く、それだけ一層行動を慎しみ、自重自愛に努めたやうである。厳しい自責の念、はげしい自奮心を常に維持せし大尉は、普通の人間には想像を超えた發憤をしたことであらうと感ぜられるが、とにかく、自ら進んで外のもの、數倍の訓練を受けたやうである。文字通り、血のにじむ猛訓練をやつたやうである。しかも、海軍の偉大なる傳統に育まれ忠魂に徹したところ、既に、死生一如の至醇の境地に到達してゐたのである。訓練の間は勿論、愈々壯途にのぼる直前も、それまでの途中も、極めて愉快に、また、明朗にはしやいでゐたことである。生きながら生死一如の神の心境だつたやうである。戦友たちが休養せる時。

「岩瀬がゐない。」

と求めると、大抵は、自ら特別猛練習をやつてゐたことである。大尉の烈々たるすさまじい闘魂、燃え立つ氣魄が、自ら大尉をさうさせずには居られなかつたやうである。

腕に自信を持ち、天佑神助をかたく信じての死の突撃ながら、

「若しも、訓練不十分なるため失敗などすることがあつては、……却つて、利敵の結果になるかも知れない。」との心算をもつて、超人的な修練を受けたやうである。

「天は自ら助くるものを助く。」

大尉の自制、自奮、敢闘精神に、この言葉の味はれる氣持がする。

おもふに、特に岩瀬大尉を拔擢された方も心眼の開けた方と思はれる。ありがたい事である。

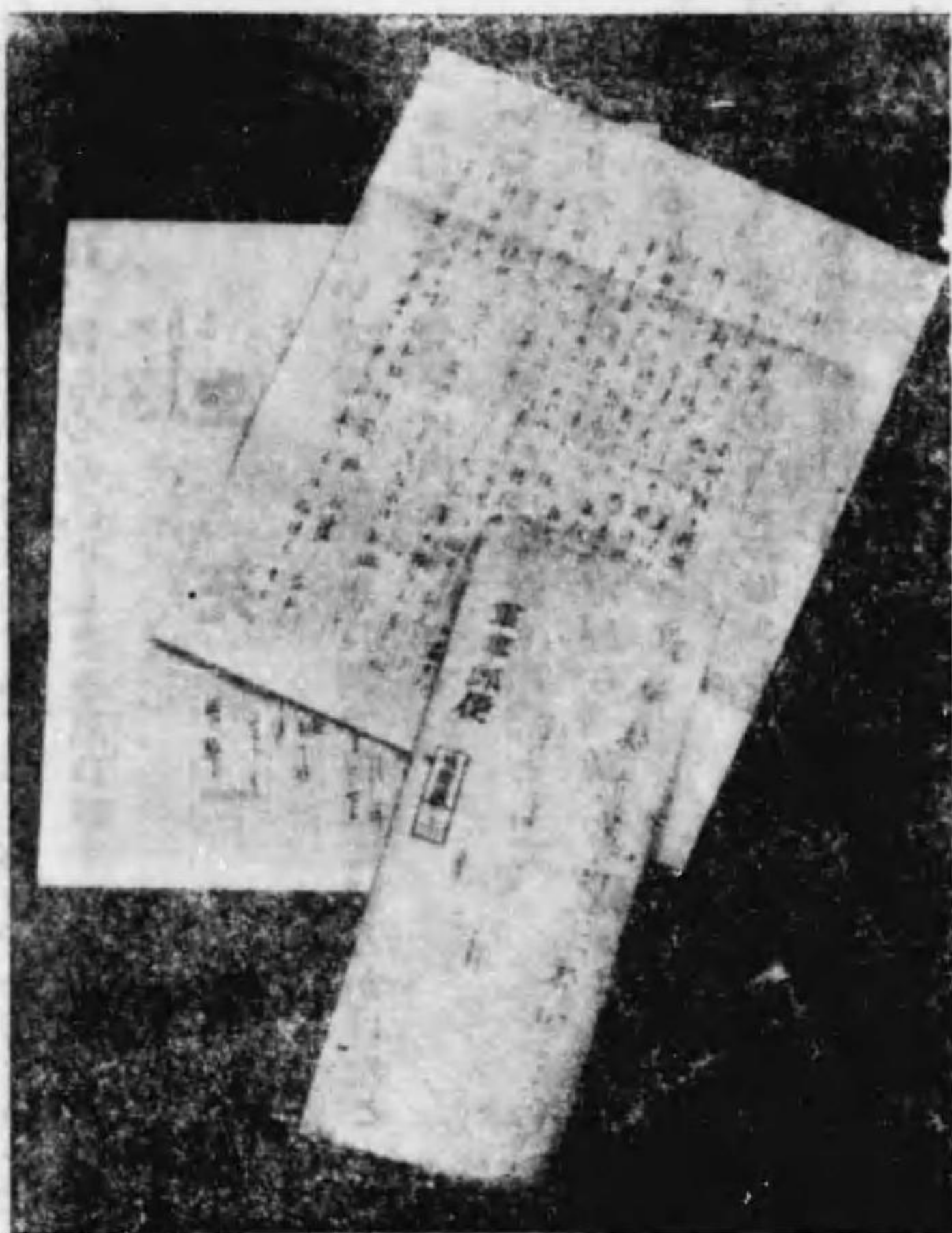
烈々、満を持すの決意

「常には、よく恥づかしがり、溫和な笑顔をしたあのおとなしい無口な勝ちやんが、よくもこんな烈々たる手紙を書いてく

れた。」

と母を驚嘆せしめ、これを讀ましていたといふ舊友も、

大尉の手紙



「なつかしい中に、近寄り難い威厳を感じる」

と語つた手紙によつて、よくうかゞはれる。

「愈々、頑兒も廿二年目の春を迎へ、往古の武將ならば、數萬の軍勢を率ゐて、堂々の陣を張るべき年頃。残念ながら、一海軍少尉の身にしあれば、只、持場職場に全力を盡すのみにて、二十有餘年御養育の御恩を返すに物足らざる氣も致し候も、其の中、花々しき活躍の報をお耳に入れ申す可く候。

兄上も、任地に赴かれ、(註、兄勝君は、この時廣島高師を卒へ、岩手縣に赴任す。)父上も、御不在なれば、(註、嚴父は稅務署官吏として轉任が多く、この時は、下宿住まひをされてゐた。)お淋しいこと、拜察仕り候。

只今、二十七日附お手紙、拜受、誠にお懐しく存申候。開戦以來、既に、一箇月餘を経過するも、直接、敵の攻撃を受けたることなく、些か物足らざる感も有之候。小生等は、何等平時と變ることなく日夜訓練を重ね居り候。之も、一に我が海軍が數十年來、治に居て亂を忘れず、只管、一朝有事に備へ居りし賜にして、開戦せりとて、今更、事新しく備ふる要も是無き有様に候。

兎にも角にも、大いに頑張り切り居り候間、御放念被下度候。
愈々最寒の折柄、御自愛の程奉祈候。

母上様

勝輔

壯途に上る二十二の春の手紙である。闘志満々、すでに敵を呑むの感あり、また、傳統に輝くわが海軍魂の躍如たるものを思はしめられ、自らの心ひきしまる思ひがする。

生死一如

孝心深く優しい大尉が、嚴肅な口調で母堂に話しかけたことがある。それは、母堂のある想ひ出である。

「お母さん、覺悟は出来てゐますか。」

と。いつにない嚴肅さに、母堂も肅然として、

「そりや、お前、軍人の母だから。私にも覺悟は出来てゐますよ。」

と、答へると、

「それを、お聞きして、お母さん、私は安心ですよ。」

と。直ぐ、いつもの溫和な顔に返つたが、あの時の言葉の眞剣さ、態度の嚴肅さは、今でも忘れる事は出来ません」と、しみじみと語る。尙、母堂は續けて、「また、勝ちやんの七生報國!! それは口癖のやうに云つてゐました。

「滅私國難に赴く覺悟は、兵學校時代に、もうちゃんと出来てゐたのでせう。」

「流れ弾丸にあたつて死ぬ様な事はしないからね。」

と、後で笑つてゐました。……男と生れてほんたうに本懐を遂げたことせう。わが子ながらはめてやりたい氣持で一杯です。

杯です。

「小説海軍の主人公、谷真人さんのお母さんがしみじみと理解出来るやうに思ひます……」。と。

最後の歸省の際、いつも病身の母堂の大變元氣な様子を見て、

「これで、少しの心残りもなく死んでゆけます。」

と。冗談のやうに母の背中を撫でながら笑つて出て行つたといふが、「死を覺悟してゐたやうな素振は少しも見せなかつたものです。」と。

大尉が戦死される一ヶ月程前、家族に對して便箋一杯に、筆で太く鮮かに、僅か九文字を以て、

「皆様御機嫌よろしく

勝輔

父上様

母上様

兄上様

清幸様

昭子様

との手紙を送つてゐる。「これこそ死別と心に深く期し」、家族の一人々々の顔を思ひ描くかの様にかく書き連ねてゐるのも、武人の心根を物語つてゐる。文章は短かいが、大尉の凡ゆる決意と倫理が凝集してゐるのを感じてならない。それは、餘りにも云ふことが多く、餘りにも使命の崇高な、この勇士が、愛する家郷への萬斛の餞であつたのである。尙、大尉の生死一如の心境を次の手紙によつて明瞭したいと思ふ。

「御懐しき御両親様に申上候。

今日の事あるは、既に、頑兒兵學校入校の時より覺悟致し居り候とはいへ、先立つ不孝お許し被下度候。

朝夕、御膝下に在りて、假令數日なりとも孝行の眞似事でも致し度く存居候へ共、それも意ならず、誠に心残りには存居候も、君に忠なる之親に孝なるの最大の道と存じ、一意専心任務に邁進仕り候。今回、身に餘る大任を拜命仕り、望外の死場所を得候段、誠に欣快措く能はざる處に有之候。……中略……

同封の寫眞は、出征直前の撮影にかゝるものに有之候。〇〇〇〇〇〇は昨年來雨に苦樂を共にせる小生の〇〇〇〇の部下にして、縁ありて生死を共にすることと相成候。此の書狀御入手の際は、御遺族の方々にも御挨拶なし被下度願上候。皆様、益々御壯健にて御過しあらんことを切に祈り申上候。

甚だ勝手に御座候も、何分多忙にて、又例の筆不精にて、御禮狀一つ差上不申候は心残りに候まゝ、宜しく左の方々にお傳へ被下度奉願候。

松 浦 様

森 吉 勝 太 郎 様 (池田中學校)

前 野 義 夫 様 (吳市西片山町三六番地)

下宿屋の主人にして、昨年十一月より御世話になりたる處、荷物等は此處に預けある筈なり。

御 兩 親 様

勝 輔

また、大尉と格別に關係の深くあられた、今和泉海軍大佐は語らる。

「闘志滿々、意氣正に敵を吞む君が、神々しき姿。生還を期せずして、『只今より出發します。』の強き一言。今も、尙髣髴として臉に映じ、強く耳朶を打つを覺ゆ。正に死地に入らんとするに、何等平素と變る所なく、悠々詩を吟じ、歌を詠み、欣然として之に飛込みて悔ゆる所なし。その攻撃たるや、猛烈果敢、敵の主力を瞬時に潰滅せしめて、遂に歸らず。戦友相見て聲なく、徒らに在りし日の君を偲びて、萬感胸に迫るを覺ゆるのみ……。」

と。その心境、蓋し光風齊月淡々たること水の如く、生もなく死も無く、至高至醇、正に萬物を照す鏡の如き清高な境地であらう。

かくてこそ、かの驚天動地の大事業を克くなし得たのである。

剛 膽 不 敵

大尉の絶筆として、

“豪氣將吞五大洲”

とある通りである。

あの〇〇の海を何日か進み、愈々、明日は壯途につくといふ〇〇艦上に於ける實際談である。その時、同乗されてゐた人の土産話である。もう數時間すれば、“〇〇〇〇”といふ時、大尉の姿が見えない、どうも可笑しい。あの決行を恐れたのではないか。いや、そんな事は絶対にあらう筈がない。と、乗員が方々探して歩いた。心配する筈である。愈々出撃の直前だから一生けん命であつた。

すると、大尉は、

「ハンモックの中で、ぐう／＼と、しかもニツコリしたやうな顔付で寝入つてゐる。」

もう、今晚〇〇〇といふ宵に、この通りである。大尉は元來寝る時はす／＼といびきもかゝずに靜かにねられる。この時も、極めて靜かに、ニコヤカな顔をして熟睡してゐる。これを見た同乗員達は、すつかり二度びつくりしてしまつた。上官も「これなら、そのまゝにして置かう。」

と、黙つて、ひきかへされたさうである。

大膽不敵といふか、何といふか、實に言語に絶するものがあると思ふ。母艦上でも、始終、特殊潜航艇にてのこの壯舉に感激してか、猛訓練の間では、

「うれしく。」

と、いふのみで、唯、はしやぐばかりであつたといふ。「死をみることに歸するが如し」。といふ生死一如の心境は、この剛
膽から生まれたのではないかと思ふ。出陣前の下宿先主人、前野義夫氏の回顧談中に、

「……大望をちつと自分の肚一つに藏つておく程の人は、他人の知らない大きい肚がある事をつくづく知りました。」

と。まことにあれこれと首肯される點である。

故高田高三兵曹長は、生前故岩瀬大尉のもとで猛訓練を續けてゐたが、出發前に同大尉から日本刀をもらつて同乗し、この
征途にいたのであつた。三月三十日（吳海軍合同葬の前日）大尉の實父準三氏と吳水交社で面會した高田兵曹長の實父幸
太郎氏は、思はず固く手を握り、

「あの日本刀で、敵兵を斬りまくつてくれたのです。」

と。感慨深く、しばし無言のうちに臓をくもらすのであつた。

大尉の兵學校同期生は、口を揃へて、「敵地上陸突入せり。」との記事は、必ず、あの剛膽な岩瀬大尉にちがひないと言は
れるやうであるが、誰も皆同じ考へを持つてゐるやうである。

十、餘 榮

大尉をしたふ學徒の聲（手紙その一―その六）
しのばれる大尉（手紙その一―その十三）
公 葬

その一 海軍合同葬

（附） 弔 辭

山本聯合艦隊司令長官
今和泉海軍大佐

その二 遺骨郷里へ

その三 村 葬

（附） 弔 辭

桑島山田村長
嶋田海軍大臣
小菅香川縣知事
鈴木高松市長
宇佐見池田中學校長

胸 像 成 る

大尉をしたふ學徒の聲

昭和十八年三月二十八日の新聞、或は、その前のラジオで感銘をうけた、全く見ず知らずの青少年からの反響を、その二、三の便りによつてうかゞつて見よう。

（その一）

お母様に。岩瀬大尉のお母様。どうか私に、かう呼ばせて下さいませ。……………私は今、後悔の念に打たれて、どうする事も出来ません。おゆるし下さいませ。たつた今、この新聞の配達される前まで、せいたくを云つて父母にいろいろ、ねだつて居りました。

第二回特別攻撃隊の方々の貴い御戦死に、身中が電氣にかゝつた様に、ピリツピリツと、瞬間に、後悔とも口惜しいとも云ひ様のない念に打たれました。……………どうか、御身大切になされます様、日本全國の人々と共にお祈り申上げます。

先づは不心得のおわびまでに。 さやうなら。

三月二十七日夜

不心得だつた一女學生拜

岩瀬大尉のお母様にさゝげる

（その二）

……………昨日、岩瀬大尉のお寫真を見れば、大尉には、本當に、若き尊い神の様なお姿でありました。感激に打たれる氣持のまゝ、じつと見つめました。……………こゝに謹みて遠くはなれては、いたし方もなく、遙かな空から大尉の御冥福をお祈り致します。と共に、御遺族皆々様の御健康をお祈り致します。

三月二十八日

徳島縣立聖暉學校中等部第四學年

川 上 惠 子

(その三)

.....私ハ、キノフ、ラジオデキキマシタ。シンブンデモ見マシタ。ウチノ、オトウサン、オカアサンニモ、オ話ヲキカサレマシタ。

オウチノ、ヘイタイサシハ、トホイセンチデ、大ヘンナ、オテガラヲタテテ、ヤスクニノカミサマトナラレタコトヲキカサレマシタトキ、オイヘノミナサマノ、オ心持ヲ思ヒ申シ上ゲマス。ミナサンオカラダ大セツニ。 サヤウナラ。

山梨石和國民學校初一西組 みうらせつこ

(その四)

.....僕達隣友隊も頑張つて、この大東亞戦争に勝ち抜き、大東亞共榮國を作らねばなりません。僕たちは、米英の少年なんかに、まけてはたまるものと頑張つてゐます。.....

東京市芝區新橋三ノ三 前田芳男

隣友隊一同

(その五)

つゝしんで合掌申し上げます。

此のたびは、お子様岩瀬勝輔海軍大尉殿には、不滅の武勳をお立てになりましたことうけたまはりまして、感謝の言葉もございませぬ。きつと小さい時から、お父さまや、お母さまのお言ひつけをよくお聞きになり、たんれんして體をきたへ、よくご勉強なされたことせう。ぼくは小さい時、體が弱くて、五つの時に、この四條畷の近くへうつりました。小楠公様のお話を朝晩聞き、毎月、ご命日には必ず、お参りさしていただいてをります。二十三歳で忠孝二つながらまつとうされまして。勝輔大尉殿には、此の大東亞戦争に、小楠公と同じ年ごろで花とお散りになりましたこと、まことに、ご名よなことです。

ございました、しかしながら、ごぶじでさへありましたら、大將にも大臣にもおなりになつたことせうに、お父さま、お母さまには、どんなにかお悲しいことございませう。ぼくは、今、初等科四年になるところです。ねや川で五丁ぐらいは平氣で泳ぎます。大東亞戦争は、まだまだつゞきます。ぼくは必ず小楠公様や、神になられました勝輔大尉殿のお心を受けつぎまして、天皇陛下の御ために、米英を撃つて死にます。まことに、少してございませぬが、飛行機が一臺落ちるたびにためました今月分、どうぞ、御れい前にお供へくださいませ。お父様にも、お母様にも、お體をお大切になさいますやうにお祈り申し上げます。 さようなら。

三月二十八日

大阪府北河内郡南郷村 初三男 北 昭 一

(その六)

大津市逢坂國民學校の兒童から。(前、南小學校)

二 仁 根 來 一 彦

ぼくは、今日、かうちやう先生から、いはせたいいのお話をききました。いはせたいいが、はじめて、ぐんかんにのつてゆかれた時のふくを見せてもらひました。ぼくは、三ばんめのはせたいいにならうと思つてゐます。

ぼくは、大きくなつたら、りくどんの勇ましいせんしや兵にならうと思つてゐます。せんしやにのつて、アメリカやイギリスのせんしやのよこはらめがけて、がーんとぶつつかつて、ひつくりかへし、いはせかつすけたいいのやうに、日本の國のために、りつばなてがらをたてようと思つてゐます。

三 仁 西 村 隆

.....略.....ぼくも、大きくなつて、第三次の勇士となつて、りつばに御奉公して、靖國神社にまつられようと思つてゐます。

.....略.....

四 智 本 村 忠 之

……略……岩瀬大尉のおしや眞を見せてもらつて、なるほど、りりしいおかほをした兵隊さんだと思ひました。……略……岩瀬大尉こそは、日本一の軍神です。僕も、大尉に負けぬやうにがんばります。大尉は島へ上つて、日本刀で敵の中へつこんで、いかれた時の勇ましさは、さぞ、りつばだつたらうといつも思つてをります。……略……

五 智 遠 藤 了 寛

……略……私も、岩瀬大尉の萬分の一でもよいから、皇國のためにつくし、後つぎをしたいと、心がどり氣がはり切りました。又、おしやしんを見た時、あのきりりつとした、さうして、引きしまつた顔に、私はいつのまにか涙が流れ出てゐました。私は心の中で、

「大尉殿。今に大きくなつて、きつと仇を討ちますよ。」と、いひたいやうな心持もしました。一聲でもよいから、岩瀬大尉が今こゝで話しかけて下さつたら、どんなに嬉しいことであらう。今に何か話して下さるやうな氣もします。……略……

五 仁 前 田 勝

……略……日本から、遠い遠いあの島に、どうしてお行きになつたのだらう。どうして、そうぢうがとれたのだらう。ふしぎでならない。一度、聞きたいと思ふけれども、それが出来ないのがさんねんです。あの勇ましい力は、どうして出たのであらう。……略……

五 勇 橋 本 八 代

……略……大尉のお家へお参りさせていただきたいが、遠いのでそれも出来ませんから、私の家から南の方と、それから四國の方に向つて、お禮をさせていただきました。私たちは、大尉がこの學校を出られたほまれを忘れずに、大尉の忠烈なお心を心として、第二、第三の岩瀬大尉のお母さんになつて、お國に忠義をつくしますから、どうか安らかに眠り下さい。

五 禮 中 尾 安 子

……略……なんだかおなつかしいお兄様のやうです。この立派な大尉をお生みになつたお母さんは、本當に幸せだと思ひま

す。私は女で兵隊さんにはなれませんが、大きくなつたら、大尉のやうな立派な強い男の子をたくさん生んで、御國の爲に役立つ人に育てたいと思つてゐます。

六 勇 多 田 和 子

……略……常に「他の方たちにはひけをとらぬ。」といつて居られ、出發のまぎには、既に、再びかへることを考へて居られず、「元氣に出發します。」と、おつしやつて行かれたことをきき、思はず目頭があつくなつてゐることを感じました。

……略……きりつと結ばれた口もと。前方をしつかり見つけて何物をもつき通すやうな目。まことに陛下の御ためには何も恐れぬといふ、どつしりおちついたお姿でした。私は、お寫眞があまり御立派だつたので、しぜんに頭が下つて來ました。……略……大尉は常に「七生報國」を口ぐせのやうに言はれたさうで、平常から「海行かば、水漬くかばね」の精神をしつかり持つてお出でになり、今、それを實行して、私たちにお手本を示して下さいました。こんなえらい大尉のお母さんは又、何といふ立派な方です。

「陛下の赤子をお返し出來たことは非常にうれしい。」と心から喜んでお出でになり、「此の世では、再び相見ることではできませんが、勝輔は私の胸の中で永久に生きてをります。」

と。……略……お母さんは始めから、大尉を御國の御ためにお捧げしてお出でになり、その御立派な戦死を心から喜んでお出でになります。……略……さうして、私も、きつとく此のお母さんのやうに、雄々しい軍國の母にならうと思ひました。……略……私はきつとやります。誓つて、第二の岩瀬大尉を生むお母さんになります。

しのばれる大尉(手紙)

(その二) 故軍神廣尾彰海軍大尉遺族一同

……略……偉大なる戦果は、先づ、全世界、特に、米英人の心膽を寒からしめたるは疑ふ所に非ず。口こそ彼等は強がり

をほざくとも、吾忠勇義烈なる海軍魂は、如何なる遠隔の地、如何なる防備も、敢て問題にならざるところ。彼等アングロサクソン民族を、地球表面上より除去するにあらざれば、絶対平和の世界建設は得てのぞむべからざるところ。こゝに於て、岩瀬大尉殿の決意奮戦、大戦果、その尊きを覚ゆるものに御座候。

人生盡くるあり、名盡くるなし。天地と共に赫々たり。年齒僅かに廿二歳。愚息と年を同じくす。うたゝ感なきにあらず。然し、武人なればこそ、此の擧の光榮に浴するを得たりと云ふべく、彼等の志をにぶらせ申すは、本意にあらざるべく、ひたすら冥福を祈り、

“身はよしや、みづくかばねとなりぬとも、なほも護れよ、すめらみ國を”。

念願申居候。……略……

(その二) 池田中學同窓生にて目下東京帝大文學部哲學科 眞鍋利也

……略……小生、大尉と徳島縣池田中學にて、机を並べて學を修め交友を結ぶこと一年餘でしたが、其の間、岩瀬君の風格を敬慕せざる日は、一日として有りませんでした。君は、海兵に進まれ、私に詳細なる兵學校生活についての手紙を戴いたのは幾度であつたでせうか。兄は、特に、國漢に高き天稟を持たれ、實に雅趣ある文章を物されたのを想ひ起すのであります。……中略……先日、勝輔君の御寫眞を新聞紙上に拜して、感慨交々至り、遠く、印度洋の彼方に、肉彈華と散つた高貴な君の姿を追想するのでした。何と高い精神の位階に兄は高翔されたこととせう。永遠に青史に輝きを放つてせう。若く高貴な君の姿は、勇氣と叡智と誠忠といふ、人間最高の徳に、不滅の光を以て輝いてゐるのです。……中略……兄は、精神の雷電を以て、私達を打つたのです。……中略……穢なき高貴な魂は、流星のやうに、すべて、若くして、この世になんの未練なく、瞬間に生きるのせう。尊大不遜なる我執の生活は、百年千年生きるとも、何の美が輝くでせう。……中略……“輝く純粹なる日本人としての一日を”。……中略……中學四年の時、修學旅行をして、高知に行きましたが、歸つてからその旅行記を提出された時、兄は、特別立派な文章を以て、“桂濱に於ける太平洋の叙述”。をなし、荒波の中を單身孤舟

を操つて進む舟人の剛膽を賞し、坂本龍馬の像を、その波濤萬里の彼方を凝視する姿を愛したのでしたが、今にして思へば、この文章こそ、岩瀬君の今日あるを象徴してゐたのでせうか。その日は波が實に高く荒れ狂つてゐました。漁師は、小舟に乗つて、命懸けの獲物追ひでした。沈着、剛膽、挺身そのものゝ海國男子の姿でした。桂濱は月の名所です。ダイエゴスワレスは、月光に置はしく照らし出されて、岩瀬君の活躍を待つてゐたのではなかつたか。何といふ象徴でせう。兄の烈しい精神の火は、魂の血統は、必ず我等の中に繼承して、脈打たねばならないでせう。……中略……神の様な友人を持つた光榮が一杯に身を包みます。坂本龍馬の像を仰ぐ様に、岩瀬君の姿を仰ぎます。……中略……私の無限の悲しみに對して、貴兄は限りなき美を以て沈黙したのでした。“我等は堅く結び合つてゐるのではないか。祖國日本に於て”。と、岩瀬君の無言の教訓が聞へて來るのです。……

(その三) 明石市人丸小學校同窓にて現在東京帝大經濟學部 小幡光一

……中略……その英魂は、私達の心の中に強く深く生きてゐます。……中略……私は明石の人丸小學校で勝輔君とほんの一年程、共に机を並べて勉強した者です。

君は、直情徑行の人でした。遊んでゐても、いさゝかの不正をも容赦しないといふ性質の人でした。……中略……私も五年の二學期から人丸校に轉校して來たので、しぜん、勝輔君とよく勉強の方は競争致しましたが、いつも數學では負けてゐたやうです。……中略……“勝輔君、よくやつた”。と、私の血の逆流するのを如何ともすることが出来ませんでした。

“勝輔君に続け”。と、どこからともなく叱咤されます。世界史の動亂のさ中であつて、“新時代を生むものは、青年を描いて無し”。と、云ふことを深くさとりました。私も、勝輔君に劣らず、眞に國家有爲の人物たらんことを期してゐる次第です。……中略……

(その四) 決行前の下宿主人 前野義夫

……中略……御令息様には、非常にお優しき方にして、又、何處となく尊嚴なる御方にて、皇國武人の典型と申すは御令息

の如き御方かと常に家内共と語り合ひ、畏敬申上居候ものに有之候。さだめし御立派な御最期と確信申上げ候。御公表の日を静かに御待申居候。又、何等御世話も致居らざるにも不拘、小生方に對し、有難き御言葉をお遺書に迄も戴きたる由、洵に勿體なく、家内の者と共に思はず感泣致せし次第に御座候。……中略……追而、御遺品御整理の節、家寶として永く子々孫々に傳へ度く、形見として肩章を戴き、奉安致居候間、此儀何卒御許可被下度奉願上候。

(その五) 丸龜城北小學校二年生受持たりし 矢上 秀雄

……中略……昭和四年八月、小生短期現役兵を終りて除隊せし直後に候。九月より三月迄、半年餘りの受持には候ひしが、剛毅果斷、男らしき風貌、活潑無邪氣なる子供らしき態度は、優秀なる成績と相俟ちて、當時の二年生の優等生として、今尙眼前に髣髴として浮び申候。當時の學級寫眞を取出して拜見致すに誠に感無量なるもの有之候。……中略……小生としては、小さかりし姿を思ひ出し、可愛いさと、いちらしさと、有難さ忝けなさと、只々名狀し難き氣持に有之候。今はたゞ、神去りまし、英靈、とこしへに安らかにしづまりませと祈り上ぐるのみに候。……中略……御本人は申す迄もなく、御一家の御名譽、更に、郷土香川縣の大いなる誇りに有之、小生も卑小なる教育者として、冥加至と、たゞうれしく感謝感激致し居候。……中略……

(その六) 明石市人丸校長 前田 逸夫

……中略……今回、朝鮮視察中、勝輔君の十勇士の一人として、護國の英靈となられし由、拜見致し、雨中感謝の黙禱を捧げ申候。本人の絶筆として、

豪氣將吞五大洲

の言葉は、小生人丸校長拜命以來、念願とせる精神に最も一致せる精神に存じ候。……中略……

(その七) 大津市蓬坂(前、南小學校) 國民學校長 中川 俊一

……中略……殊に、小職の感銘致せしは、曾て少年時代、本校の前身、南小學校に御在學、優等の成績を以て御卒業相成り

たることにして、本校職員はもとより、後輩たる兒童あけて、武勳を敬仰感激致し居る次第に御座候。小職等、大尉殿の死生を超えし至高至醇なる殉忠の精神を、兒童に徹せしめ、第二第三の岩瀬大尉たらしむべく、今後一層教育報國に邁進努力仕る覺悟に有之候。

……中略……来る三十一日の御命日には、慰靈祭執行仕り度候。……中略……

(その八) 滋賀縣立膳所中學同窓會長 杉本 一郎

……中略……軍神として、全國民崇敬の的たる大尉殿が、本校に在學せられし事は、本校の最も光榮とする所に有之、感激の至に御座候。……中略……御遺品は、恭しく本校遊藝室に安置し、本校精神教育の資料として、永く後進の龜鑑となし、以て、第二第三の岩瀬大尉が本校より輩出せんことを祈念致し居り候。……中略……

(その九) 前池田中學校長 森吉 勝太郎

……中略……思はず全身の硬直するを覺え申候。誠に、花中の花、帝國軍人の龜鑑と申す可く、榮譽は人臣の極と存ぜられ候。……中略……

池田中學在學の當時の御英姿を目のあたりに思ひ浮べ、海兵、陸士、一時に合格せられし抜群の秀才振りを偲び奉り、今回の御武勳とを思ひ合せて、此の人にして此の忠烈ありと、感慨無量に御座候。……中略……

(その十) 現池田中學校長 宇佐見 章

……中略……勝輔君には、日頃、母校をなつかしき、我々職員の仕事まで、常に、心に御懸け下され候由、武人の鑑として、あつばれなる勇士として、六百有餘の在校生に深き感銘をお與へ下され候。……中略……

(その十一) 池田中學校教諭 和田 俊男

……中略……僅か二ヶ年乍ら、親しく君に接し申したる小生達も、あたら、有爲の武人を失ひたりと思ふの情切なるもの有之候も、人間死所を得るは難く、また言ふは易く行ふは難きに、勝輔君は、たゞ、大君の御爲に、難中の難事を美事

敢行致され、從容として護國の神と歸せられたるは、武人の本懐まことに死所を得られたりと言ふべく、身を以て吾等に示されたる御武勳は、まことに生きた修身の教材として、本日召集せし生徒一同、皆々、感涙の中に、君の面影を偲び申候。君今やなし。されど、君の精神は、永久に池中に留まりて君の志をつぐべき幾多勇士を出すべしと確信仕り候。吾等職員も、亦、奮然起つて君の遺志をつぎ邁進することを誓ひ申候。……中略……

(その十二) 池田 中學 齋師 脇田 武夫

……中略……中學四年より海兵、陸士の兩校に合格せられし程の秀才にて、池田中學としては先例なき海兵入學とて、學校此上もなき名譽として喜び、爾後、御輔導によりて、毎年の如く海兵合格者を出す様に相成り、池田中學海軍の大先輩として提督となる事を希望致し居候ひしに、惜しみても餘りある事に候。然しながら紅顔可憐の齡を以て軍神と仰かるゝ事、此上なき御名譽と存ぜられ候。小生、三學年の第二學期より海兵へ入學せらるゝまで、國語講讀及作文文法を教授せし事これあり、軍神の師としての光榮に浴し、一層教育報國の膽を固め居り候。感激の餘り、腰折數首を賦して、哀悼の微意を表明致し候。

マダカスカカル島に散りしいくさ神、

敵の艦屠れば、たゞに歸るべき、

命棄つると壘に斬り入る。

雄たけびをあげて斬り入る太刀筋に、

荒涼と寒し雪間漏る月。

廿二歳、多情多感の湧きたぎつ血潮、

あまさを、君に捧ぐる。

提督ともなるべきあたら命をば、
捧げしゆえに神と仰がる。

……中略……

(その十三) 東京市小石川區春日町一ノ一

講道館長 南 郷次郎

岩瀬勝輔

大東亞戰爭ニ於テ、マダカスカカル島、デイエゴ、スワレス灣特別攻撃隊ニ加ハリ沈着果敢、至誠國ニ殉ジ、日本武人ノ本領ヲ完ウシタルハ、眞ニ講道館柔道ノ精神ヲ發揮セルモノト云フベシ。仍テ茲ニ貳段ヲ贈ル。

講道館長 南郷次郎

……中略……特に二段を贈りて、英靈の偉功に報い度、別紙證書御靈前に御供へ下され度、此段得貴意候。

(附) 證書

割印 岩瀬勝輔

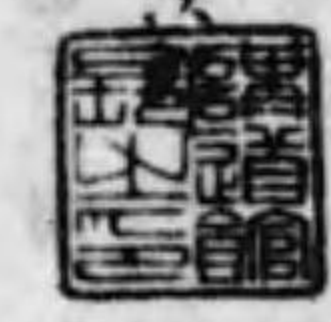
大東亞戰爭ニ於テ、マダカスカカル島、デイエゴ・スワレス灣特別攻撃隊ニ加ハリ、沈着、果敢、事ニ從ヒ、至誠國ニ殉ジ、日本武人ノ本領ヲ完ウシタルハ、眞ニ、講道館柔道ノ精神ヲ發揮セルモノト云フベシ。仍テ茲ニ貳段ヲ贈ル。

昭和十七年五月卅一日

講道館長 南 郷次郎

講道館長之印

講道館長 南郷次郎



公 葬

(その一) 海軍合同葬

(附) 弔 辭

山本聯合艦隊司令長官

今和泉海軍大佐

我が潜水艦魂を中外に宣揚した昭和十七年五月三十一日と、年月こそかはれ、奇しくも同じ日の昭和十八年三月三十一日、(この前日即ち三十日懐しの母港に無言の凱旋をなし、久し振りに對面する遺族に護られて一夜を明かしたのである。)午

前九時半より、一億同胞の感謝と讃仰のうちに、吳鎮守府に於て、いとも、盛大に嚴修された。

この日、齋場たる海仁會櫻松館とは、早朝より各遺族がつめかけ、祭壇には、大軍艦旗を、中央に、畏くも天皇、皇后兩陛下をはじめ奉り、各官家より御下賜の 祭菜料、各方面より贈られし、供物、花輪が飾られ、嚴父準三氏、母堂はなさんには、その前に度ましく面を伏せておられた。やがて、香煙立ちこめ、滿場肅たるうちに、各方面よりの、聲涙共に下る弔詞あり。ありし日の武勳をしるべせる。吳海兵團分隊長山下大尉指揮の儀丈隊一個中隊は、高村軍樂長の指揮する軍樂隊の莊重なる、『命を捨て』の奏樂裡に、弔銃三發を齊射。天もいたむか、雲低く垂れる中に、こだまして、哀傷を咬る。ついで、會ての戰友をはじめ、讃仰の誠をさしける數千の參列者一同の焼香拜禮あり。極めて盛大裡に、十時五十分式を終つた。

(附) 山本聯合艦隊司令長官弔辭

故、海軍中佐秋枝三郎君他、諸勇士の英靈に告ぐ。諸士は夙に大東亞戰爭の事に従ひ、或は寒風怒濤の中、或は酷熱彈

雨の下、粉骨碎身、各其の任を完うし、遂に君國に列す。痛恨何ぞ堪へん。今や戰局大いに進み、皇威八紘に洽し。是固より 御稜威の致す所なりと雖も、亦、諸士が勇戰奮闘の賜に外ならず。諸士が勳は、千載不朽にして、其の忠烈は我等之を繼承し、以て本戰役の目的を完遂せんとす。諸士以て瞑せよ。茲に英靈を迎へて葬送の儀を行ふに當り、恭しく敬弔の意を表す。

昭和十八年三月卅一日

聯合艦隊司令長官從二位勳一等功二級 山本 五十六

今和泉大佐弔辭

維時昭和十八年三月三十一日

謹ミテ、故、海軍大尉岩瀬勝輔君ノ英靈ニ告グ。

曩ニ、米英ノ驕恣暴慢累年其ノ度ヲ加へ、不當ニ皇國ノ進展ヲ阻ムコト多年、妄リニ挑戰シテ吾ヲ屈服セシメントス。蓋シ、天下ノ公敵、不俱戴天ノ仇ナリ。斯クシテ、隱忍遂ニ窮リ、去ル昭和十六年十二月八日、長クモ宣戰ノ大詔渙發アラセラルルヤ、疾風迅雷、曠古ノ大捷ヲ博シ、今ヤ、帝國ノ武威七洋ヲ壓シ、必勝不敗ノ態勢ヲ堅持シツツ、一億一心、勁敵必滅ニ邁進シツツアリ。コノ間、君ハ選バレテ特殊潛航艇ノ指揮官トナリ、酷熱瘴癘近寒烈風ヲモ意トスルコトナク、日夜燃ユルガ如キ研究心ト、卓越セル技能トヲ以テ、斯術ノ鍊磨ニ之努メ、又、終始、至誠奉公ノ念厚ク、寡黙ニシテ沈着、事ニ當リテ剛毅果斷、情ニ厚クシテ部下ヲイタハリ、眞ニ青年將校ノ龜鑑ニシテ、吾人ノ深ク尊敬スル所ナリ。而シテ、客年五月三十一日、一度命下ルヤ、欣然勇躍、策ヲ練リ計ヲ進メ、日ヲ徹スルコト數十日、遂ニ逆卷ク怒濤ヲ乘リ越エ、萬古ヲ排シ、長驅「デイエゴ・スワレス」港ノ強襲ヲ敢行セリ。鬪志滿々、意氣正ニ敵ヲ吞ム。君ガ精神シキ姿。生還ヲ期セズシテ、「只今ヨリ出發シマス。」ノ強キ一言、今尙髣髴トシテ 驗ニ映ジ、強ク耳朶ヲ打ツヲ覺ユ。正ニ、死地ニ入ラントスルニ、何等平素ト變ル所ナク、悠々詩ヲ吟ジ、歌ヲ詠ミ、欣然トシテ之ニ飛込ミテ悔ユル所ナシ。ソノ攻撃

タルヤ、猛烈果敢、敵ノ主力ヲ瞬時ニ潰滅セシメテ遂ニ歸ラズ。戰友相見テ聲ナク、徒ラニ在リシ日ノ君ヲ憶ビテ、萬感胸ニ迫ルヲ覺ユルノミ。嗚呼悲シイ哉。決戦半バニシテ、君ノ如キ有爲ノ士ヲ失フトハ。何ヲ以テカ償フコトヲ得ンヤ。然レ共、今ヤ聖戰完遂ノ希望日ニ大ニ、國是顯現ノ曙光愈々昭ナラントス。之素ヨリ 御稜威ノ下、天佑神助ニ依ルト雖モ亦、兄弟等ガ忠烈ノ賜タラズンバアラズ。其ノ武勳煌々トシテ青史ヲ照シ、後昆相承ケ、景仰己ムコトナシ。君、亦以テ瞑スベキナリ。今ヤ、戦局愈々決戦段階ニ突入セリト言フヲ得ベク、實ニ舉國鐵石、不退轉ノ決意ヲ固ムルノ要今日ヨリ切ナルハナシ。我等益々操守ヲ固メ、愈々練武ニ精進シ、以テ君ガ遺烈ヲ繼承シ、堅忍持久、誓ツテ完勝ノ彼岸ニ到達セシコトヲ期ス。

茲ニ、君ノ英靈ヲ迎へ、親シク葬送ノ禮ヲ行フニ當リ、謹シミテ耿耿ノ至情ヲウツタへ、以テ敬弔ノ微衷ヲ表ス。冀クバ來リ鑿ケヨ。

海軍大佐 今和泉喜次郎

(その二) 遺骨郷里へ

鈴木高松市長が、十二萬市民を代表して宇野まで出迎へられた大尉の遺骨は、昭和十八年四月一日午前十時半、高松棧橋驛着、郷黨の待ちわびるうちに還つて來たのである。白木の箱に安らげく眠る英魂は、同期生、宇野馨中尉の腕に抱かれて、船客黙禱に見送られつゝ下船、沿道は、各戸弔旗を掲げて奉迎、わけても、地元藤塚町の感激は一入で、第六町内會の人々は紋服に威儀を正して同家の門前で出迎へられた。栗林國民學校兒童も、築港に同家に、我等の軍神かへるとの深き感激のうち、度しみて御迎へ申せしことは勿論である。正午過には、小肯知事の参拜もあり、終日焼香が絶えなかつた。

「最も正しく生き、最も眞實に戦ひ苦しんだ人々にとつては、死は最後の慰めであり、最も静かな寢床である。」
 とは、大尉の日記中で、赤鉛筆を以て太々しく側線が加へられた言葉である。盡忠に貫く二十二歳の生涯、醜の御楯として壯烈、水清く屍と散つた大尉の神靈は、今靜かに父母の膝下につこりとかへり來つたのである。

岩瀬家にて

(齋場に向ふ直前)



この日、嚴父準三氏は語る。

「勝輔は、日本軍人として、たゞ、なさねばならぬ事を仕遂げたまでであるが、かくも盛大な合同葬や、お出迎へをうけることは岩瀬家末代までの譽です。身に餘る今日の榮譽を子孫に傳へて、亡き勝輔に劣らぬやう、否、より以上の御奉公を果すやう、家訓をいたしたい。これが、とりも直さず君恩に酬い奉る道だと考へます。」と。

大いなる働きをして、この大みいくさに正しく明かるく一切を大君に捧げつくした偉大なる忠靈は、霞に煙る紫雲山のもと、こゝ高松の地に靜かにおちつかれる事となつたのである。今日より高松市、いな香川縣は、大誠忠魂の眠れる清淨なる場所となつたわけで、八十萬縣民は深き感慨の中に一段と自奮精進する事であらう。

(その三) 村 葬

(附) 弔 辭

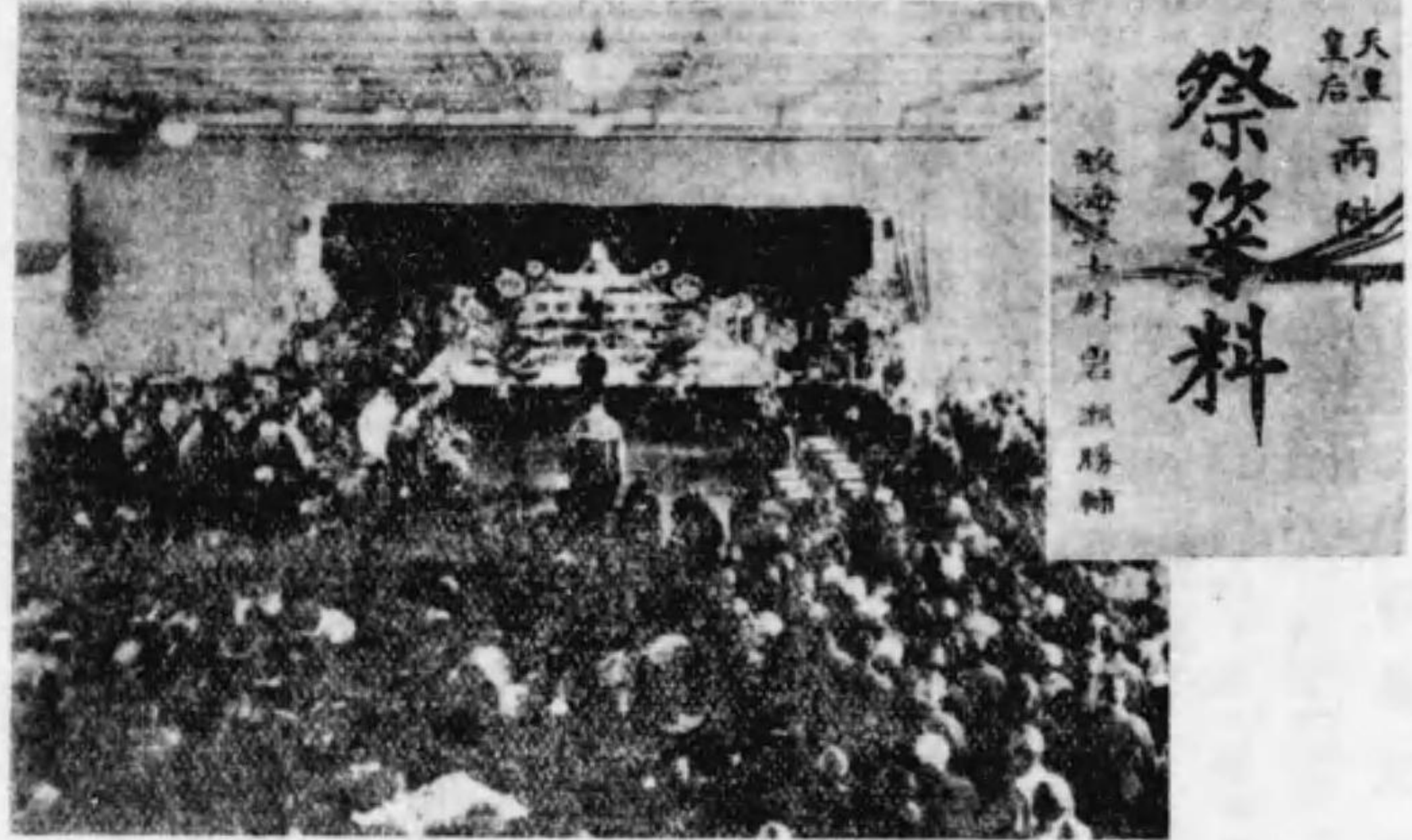
- 桑島山田村長
- 嶋田海軍大臣
- 小菅香川縣知事
- 鈴木高松市長
- 宇佐見徳島縣立池田中學校長

涙新たに武勳を偲ぶ齋場。縷々立ち上る香煙、追悼歌も莊嚴に、おゝ、英靈よ、安らかに眠りませ——最年少紅顔二十二歳を一期に、南阿の海に莞爾として散華した岩瀬大尉の村葬は、昭和十八年四月十二日午後一時より、全村民哀悼のうちに、郷里綾歌郡山田村國民學校講堂に於て、いとも莊嚴に執り行はれた。あたかも、故山の春、今や酣、満開の校庭の櫻は春風に花吹雪を散らして、不滅の武勳を讃へるのであつた。

海軍大臣代理加島次太郎海軍大佐、軍令部總長、聯合艦隊司令長官、吳鎮守府長官、高松地方海軍人事部長代理刀坂禎二大尉、香川縣知事代理池田官房長、鈴木高松市長はじめ、日婦會員ら、一千餘名の参列といふ盛儀であつた。

これより先、前日より英靈は、大尉の祖父義三氏の生家たる大正御大典の主基齋田の名家岩瀬一太氏宅に安置され一夜を過ぎたが、近親の人々は通夜して、大尉の思ひ出に語り明かしたのであつた。かくして定刻、導師西本願寺法主代理岡部宗城執行先導で、父準三氏の胸にしつかと抱かれた英靈は、母堂はなさんに捧げられた遺影と共に、高松縣女の制服に身を包んだ、唯一人の妹昭子さんや、親族の人々に囲まれ、同村、青年學校生徒に護衛されて岩瀬家を出で立つ。他郷で生れ、他郷で育つたとはいへ、懐しい父祖の地、弔旗はためく沿道には、國民學校、青年學校生徒兒童はじめ、郷軍、日婦會員その他各種團體員、村民たちが堵列し、哀悼のうちにも、「我が村の誇り。」と、讃嘆の腫をあげて送迎する中を、肅々と齋場着。正面祭壇に安置された。その左右には、畏き邊りからの 祭糝料、海軍大臣、軍令部總長、吳鎮守府長官、香川縣知事、高松市長その他、各方面からおくられた供物、花輪、武勳を物語る日章旗はじめ、數々の遺品に飾られてゐる。かくて、前記参列者等着席終れば、同二時、導師衆僧を從へて着席、奏樂裡に讀經すれば、遺族席の嚴父準三氏は萬感胸に秘めて、一點をみつめ、母堂はなさんは、ハンカチを顔にあて、無量の面持ち。妹の昭子さんもそつと目を掩ふ。ついで故人の忠靈を一入蘇らせて、朗々全堂に響きわたる祭主桑島村長、海軍大臣、軍令部總長、聯合艦隊司令長官、吳鎮守府長官、海軍人事部長香川縣知事代理、鈴木高松市長等の弔辭朗讀あり。殊に、喪主準三氏の焼香には満場肅として聲なく、たゞ香煙一筋音もなく立上つてゆく。全堂を埋めつくした一般参列者の中からも、すゝり泣きの聲がしばし絶えなかつた。親族代表岩瀬一

村 葬 の 盛 儀



氏、來賓の焼香、一般の手厚い焼香について國民學校生徒の大尉の遺勳を偲ぶ、「無言の凱旋勇士に寄せる」の追悼歌の合唱があり、同四時すぎ忠魂永久に輝やく晴れの盛儀は滞りなく終了した。

(附) 桑島山田村長弔辭

第二次特別攻撃隊、

故海軍大尉岩瀬勝輔君ノ英靈ヲ迎へ、村民ヲ代表、謹ミテ蕪辭ヲ述べ、君ノ忠勇義烈ト偉大ナル勳功ヲ追憶敬慕シ、衷心ヨリ弔意ノ誠ヲイタス。

昭和十八年三月二十八日、全國新聞紙上ニ、或ハニュースニ、第二次特別攻撃隊十勇士ノ赫々タル戦果ト勳功ノ發表ハ、前第一次九軍神ノ發表アリシ時ト同ジク、一億同胞ハ感謝ト感激ノ高潮ニ達シ、絶大ノ讃詞ヲ以テ感銘セリ。君ノ撃チテ止マンノ盡忠報國ノ精神ハ、小中學、進ンデ海軍兵學校入校後モ、ソノ成績ハ群ヲ抜キ、君ノ鍛錬ハ、聽テ不退轉ノ意氣ニ燃エ、率先攻撃隊ニ参加、日夜研究練磨ニ、而シテ最高度ノ軍人精神ヲ發揚シ、時機至ルヤ、昨昭和十七年五月三十一日特別攻撃隊員トナリ、遠ク南阿マダスカル島北端デイエゴ・スワレス灣ニ奇襲突入シ、奮戦力闘、肉弾以テ不朽ノ戦果ヲアゲ、赫々タル武勳ヲ奏シ、遂ニ艇ト共ニ齡二十有二歳ヲ一期トシ、護國ノ花ト散ル。

壯ト言フ可ク、大和男子ノ本懐ナリ。サレバ、君、愈々壯途ニ就ク可ク、御親子兄弟或ハ友人同僚ニ秘シテノ訣別ハ、

遠ク元祿ノ四十有七士ノ父子妻子ノ永別、近クハ、第一次九軍神ノ訣別ノ辭ヲ思ヒ、且ツ、君ノ心情ヲ御一門ノ上ニ思フ致ス時、轉タ感涙ニ咽ビ、胸ノ切ナルヲ覺ユ。然リト雖モ、君ノ忠勇義烈ハ中外ニ宣揚シ、敵米英ノ心膽ヲ寒カラシメタリ。其ノ勳功ハ畏クモ、天聽ニ達シ、特旨ヲ以テ二階級進級ノ最高榮譽ノ恩命ニ浴ス。武人ノ本懐ニシテ其ノ芳名ハ千載ニ輝キ、一億國民ハ軍神トシテ敬慕シ、近ク靖國ノ宮柱トシテ神靜マリ、君ノ榮光ハ燦然トシテ我が青史ニ輝キ、君ノ偉勳ハ永遠ニ竹帛ニ垂レ、我が村史ニ不滅ノ光輝ヲソヘ、且又、君ノ宗家ハ、先帝ノ主基齋田奉仕ノ大任ヲ全ウシ、今亦、君ハ大君ノ御楯トシテ國土守護ノ大任ヲ果ス。累代ノ忠勤ト君ガ忠孝兩全ハ我等ノ龜鑑ナリ。吾村民ハ發奮興起ト感謝感激ニ不堪。本日ヲトシ、村民一堂ニ會シ、壇ヲ設ケ香ヲ燒キ、禮拜以テ我等ノ微意ヲ捧ゲ、併テ君ノ冥福ヲ祈ル。

昭和十八年四月十二日

山田村長 桑 島 幸 七

嶋田海軍大臣弔辭

謹ミテ、故海軍大尉岩瀨勝輔君ノ英靈ニ告グ。君ハ大東亞戰爭ニ從ヒ、日夜勇戰奮闘隨所ニ赫々タル武勳ヲ樹テ、皇軍ノ威武ヲ中外ニ宣揚シツツアリシニ、惜ムベシ、中途ニシテ壯烈ナル戰死ヲ遂ゲラル。洵ニ痛惜哀悼ニ堪ヘズ。

然リト雖モ、一死君國ニ殉ズルハ武人ノ本懐ニシテ、君ノ夙ニ期スル所、而モ君ノ勳功勇武ハ、軍人ノ龜鑑トシテ永ク竹帛ニ垂レ、其ノ忠魂ハ、護國ノ神トシテ千載不滅タリ。

死シテ餘榮アリト言フベク、君亦以テ瞑スベキナリ。

茲ニ、村葬ニ蒞ミ、恭シク弔辭ヲ呈ス。

尙クバ來リ饗ケヨ。

昭和十八年四月十二日

海軍大臣 嶋田繁太郎

小菅香川縣知事弔辭

虔ミテ、故海軍大尉岩瀨勝輔君ノ英靈ニ告グ。

君ハ、資性、寡黙豪膽、頭腦明晰、夙ニ軍事ニ志アリ。昭和十三年海軍兵學校入校以來、一意専心軍務ニ精勵、其ノ成績衆ノ模範ニシテ、常ニ聖諭ヲ奉體シ、研鑽鍊成、盡忠報國ノ誠ヲ捧ゲツツアリ。

偶々、今次開戦トナルヤ、少壯ノ身ヲ以テ特ニ攻撃必勝ノ訓練ニ精進シ、選バレテ第二次特別攻撃隊ニ參加、昭和十七年五月三十一日、百難障礙ヲ冒シ、敵英國艦隊ヲ遠ク「デイエゴ・スワレス」灣ニ奇襲強攻、敵中深ク突入シ多大ノ戰果ヲ擧ゲ、帝國軍人ノ忠烈ヲ盡クシ、遂ニ乘艇ト運命ヲトモニシテ還ラズ。其ノ崇高壯烈譽フニ比ナシ。嗚呼、痛惜哀悼何ゾ堪ヘン。然レドモ、君ガ偉功ハ拔群ニシテ、眞ニ日本精神ノ極致トイフベク、特ニ、官等ニ階級ヲ進メラレタルハ、武人最高ノ榮譽ニシテ、勳績永ク青史ニ輝キ、實ニ國民ノ龜鑑トナリ、後昆ヲシテ感奮興起セシム、君亦以テ瞑スベキナリ。今ヤ、畏キ、大御稜威ノ下ニ、皇軍ノ威武彌々揚リ、振古未曾有ノ大戦果ヲ收メツツアリト雖モ、時局ハ、極メテ多事多難ニシテ、日毎ニ苛烈ナラントス。コノ決戦ノ連續ニ對處スルノ要、寔ニ切ナルノ秋、益々、一億一心、必勝ノ信念ト鐵石ノ團結ヲ以テ、職域ニ奉公シ、飽ク迄、君ガ遺烈ヲ繼承シ、敵米英ヲ擊碎屈服セシメ、斷乎トシテ大東亞戰爭ヲ完遂シ、宸慮ヲ安ンジ奉ラントス。

昭和十八年四月十二日

香川縣知事正五位勳四等 小 菅 芳 次

鈴木高松市長弔辭

謹ミテ、故海軍大尉岩瀨勝輔君ノ御前ニ白ス。

君、曩ニ、無敵海軍ノ一員トシテ、大命ヲ奉シテ勇躍マツロハザル敵撃滅ノ皇戰ニ挺身シ、日夜勇戦力闘、克クソノ本領ヲ發揮、進ンデ第二回特別攻撃隊ニ参加シ、世界ヲ驚倒セシムル壯舉ヲ敢行、遂ニ一切ヲ君國ニ奉還シテ、靖國鎮護ノ神ト仰ガル。勇名、世界戦史上不滅ニ輝キ、遺芳永久ニ香ル。報一度到ルヤ、一億肅然トシテ襟ヲ正シ、而シテ後、湧キノボル無限ノ感謝ハ、之ヲ如何トモスル能ハザルモノアリ。

君ガ純粹絶對ノ忠誠勇武ノ崇業ハ、素ヨリ一億齊シク敬仰措ク能ハザル處。大東亞維新ノ黎明ハ、既ニ、忠魂ノ純血ヨリ燃エ上リ、茲ニ感奮興起セル一億ガ其ノ總力結集ニヨリテ、着々トシテ不拔ノ礎ヲ築キ終リ、今正ニ決戦ヲ闘フ。翼クハ、忠魂照鑑、永ニ皇國ノ上ニ加護ヲ垂レ給ハンコトヲ。

茲ニ、本日ノ盛儀ニ列シ、恭シク弔ス。

昭和十八年四月十二日

高松市長 鈴木 義 伸

宇佐見德島縣立池田中學校長弔辭

故海軍大尉岩瀨勝輔君ハ、我が德島縣立池田中學校ノ出身ニシテ、天資英邁、在學中常ニ首席タリ。ソノ頭腦明哲ナルト眞剣ナ學習態度ニテ教壇ヲミツメタル瞳ノ光トハ、今モ尙、舊師ノ感嘆シテ措カザル所ナリ。友ト交ハルニ親シミヲ以テシ、謹言苟モセザルハ夙ニ同輩ノ敬服セシ所タリ。

昭和十三年第四學年在學中、選バレテ海軍兵學校ニ入學シタリ。ソノ時、恩師達ハ集リテ君ハ必ズヤ、名提督タリ大臣タルモノト嗜シタルホドナリキ。

果セルカナ、今次大東亞戰爭ニ出動スルヤ、昭和十七年五月三十一日、特殊潜航艇ヲ以テデイエゴ・スワレス灣、及、シドニー灣ヲ奇襲シ、赫々タル偉勳ヲ奏シタル第二次特別攻撃隊ニ参加シ、殉國ノ十勇士トシテ、壯烈ナル戦死ヲ遂ゲラル。山本聯合艦隊司令官ヨリハ感狀ヲ授與セラレ、右ノ旨畏クモ上聞ニ達セラル。コノ公報ヲ耳ニシタル母校職員生徒七百五十名ノアノ一瞬ノ感激ハ、忘レントシテ忘レ得ザルモノアリ。嗚呼、我等ハ如何ナル讚辭ヲ以テ君ガ武勳ヲ稱へ、君ガ

英靈ヲ慰メン。唯、靈前ニ伏シテ感涙ニ咽ブノミ。君ガ樹テラレシ不滅ノ武勳ハ、永ク帝國海軍史上ニ燦タル光輝ヲ放チ、ソノ生還ヲ期セザル誠忠無比ノ日本精神ハ、母校池田中學校生徒ノ魂ヲ、永久ニ感奮興起セシメ、我等ハ第二第三ノ岩瀨大尉トナリテ、君ガ素懷ヲ達成セントノ決意ヲ固メシメタリ。

君ガ身ヲ以テ示サレタル尊キ遺訓ハ、永ヘニ後進ノ胸ニ生キ、七生報國ノ誠忠魂トナリテ皇運ヲ扶翼セン。

茲ニ、德島縣立池田中學校職員生徒一同ヲ代表シ、敬弔ノ誠ヲ捧ゲ君ガ英靈ニ白ス。

尙クハ、來リ響セヨ。

昭和十八年四月十二日

德島縣立池田中學校長 宇佐見 章

白井氏作 大尉の胸像



(註) 「餘榮」として、大尉をしたふ學徒の聲並しにばれる軍神の項には手紙をかゝげ、海軍合同葬及村葬には弔辭をかゝげたるも、もとよりこれが全部ではなく、他の方々のはこれを割愛させていたゞいたのである。乞ふ此の點諒承たまはらんことを。

胸像成る

軍神の胸像こゝに成り、近く栗林公園内の香川縣商工獎勵館にて、朝な夕なに出入する觀覽者へ、力強く敵撃滅を呼びかけることゝなつた。

この胸像は、文展六回連続入選した新進彫塑家志度町出身白井謙二郎氏の作になる。高さ三尺餘の石骨ブロン

又製で、去る五月東京上野美術館で、文部省並翼賛會共同主催の勤皇烈士先覺者顯彰彫塑展覽會に出品せられたもので、これを今回縣の手に買ひ取つたもので、昭和十八年八月三日高松に着荷するとの事である。

尙、小倉右一郎氏の力作にかゝる同じく大尉の胸像も、今秋、早々には完成される運びになつてゐる。小倉氏も、本縣大川郡石田村出身で、共に、郷土の彫塑家により記念像の成ることは、格別意義深く、輝かしい勳功を永久に物語ることゝなるであらう。

跋

傳記、殊に岩瀬大尉のそれなどはとても書ける柄ではないが、委囑を受けたので、度みて神靈に誠をさしげることゝしたのである。

そこで、先づお家を訪ねて承はつた大尉の嚴父並母堂のお話や、大尉の日記を中心に、新聞其の他を参考にさせていたゞいて筆をすゝめたので、只管、その神格を損はんことをおそれながら、全く自己を虚うし、たゞ、大尉の全貌を髣髴たらしめんとつとめたのである。

「朝に道をきくことを得ば、夕に死すとも可なり。」

とか。事實、大尉は人生百年の修養を二十二年間に壓縮せし感あり。その岩瀬精神こそ、皇國民魂の精華であり、正しく帝國海軍軍人の師表たるを思はしめられたのである。

抑々、御兩親のお話や、大尉の日記——（註）、昭和十五年即ち、皇紀二千六百年のものゝみ。（一、一〇）とせしは一月十日のこと——は味はへば味はふ程、その偉大さが無限に偲ばれてゆくの、こゝに示せしものは、僅かにその一部に過ぎず。その奥行の廣さは、尙、多く残されてゐることゝ思ふ。ついでには、こゝに列擧した項目の中に、は重複の感無きにしてもあらざるも、よりよく内容に相應はしからんと努めた結果であつて、これらの諸點は大尉の神格の中に全く統一せられ、燦として光を放つたことは勿論である。

かの佛敎學者、松原致遠先生はかつて

「心をこめてなし、専修専念になすといふことの大切なるは、いふまでもなく、事の成する要諦はこれ一つである。しかし、これは流行語のはりきるなどといふ熱した態度をいふのではない。靜かに、倦かず、持續相續するのである。それによつて利するといふ心もちを超えて、その仕事を好み愛するのである。好み愛する心を超えんと仕事を樂しむところにす

すむが、その心には倦きが来るから、それを超えて仕事を敬ふのである。一切を敬ふ心、仕事を拜してかゝり、敬して仕事に向ふ精神が第一である。」

といふやうなことを申されたが、私は、はじめて其の至言なることが、よく味はされたやうな感じがしたのである。即ち、起筆以來だん／＼と時日がたつにつれて、大尉に対する或る畏敬の念がこり、殊更につとめたのでもないが、知らず識らずの中に、このお言葉のやうな境地から次第に筆がすゝめられたやうに思ふ。従つて、この傳記も、全く自分の力で出来たのではなく、悉くこれ、大尉の神格により書かせていたゞいたものであつて、たゞ有難さで一杯である。

しかし、全く淺學未熟の上、職務の餘暇であり、短時日のことゝて、たゞ書き足らぬ感、たゞ述べ盡せざる憾みのみで、この點、神靈並御遺族に對し、謹しみてお詫び申上げる次第である。

ともかく、この拙い文を綴りながらも、偉大なる忠魂岩瀬大尉より、色々と御垂教を賜はり、激しき御鞭撻に預かつたことは、誠に感銘に堪えざる所であつて、特に記して、衷心より感謝し奉ることゝいたしたい。

尙、挿入せる寫眞は、高松市南鍛冶屋町寫眞師香川光瑞氏の格別なる御盡力の賜にて、こゝに特記して、其の誠意溢るゝ御苦心に對し感謝の意を表する次第である。

皇紀二千六百年

岩瀬大尉第三周忌を迎へて

編者 高松市栗林國民學校教頭

工藤義隆謹記

昭和十九年十二月三日印刷
昭和十九年十二月八日發行 (非賣品)

香川縣高松市五番丁

發行兼編輯者 高松市

印刷者 香西榮太郎

印刷所(香川) 株式会社高松製版印刷所

香川縣高松市五番丁

發行所 高松市教育課

(認承縣川香)

504
89

終

